ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告111

富山市
四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡
発掘調査報告書

－店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2023

富山市教育委員会

調査地区全景（上層完掘、空撮、南東から）

調査地区全景（四方荒屋遺跡上層完掘、空撮、東から）

巻頭図版２　遺構

調査地区全景（上層完掘合成、空撮、南東から）

調査地区全景（上層完掘、空撮、北から）

調査地区全景（四方背戸割遺跡下層完掘、空撮、北東から）

SK95 土師器埦出土状況（北から）

SK125 白磁碗出土状況（東から）

SK1001 弥生土器出土状況（東から）

SX1132 石器出土状況（北から）

弥生土器（SK1001 ほか）

土師器椀（SK94・95）

例　　言

1　本書は、富山県富山市四方荒屋に所在する四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡の発掘調査報告書である。
2　調査は、株式会社クスリのアオキ四方店建設に伴う発掘調査である。
3　調査は、株式会社クスリのアオキから有限会社毛野考古学研究所富山支所に発注し、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理のもと実施した。
4　本書で報告する調査の概要は次のとおりである。

調査面積　　2,380 ㎡（四方背戸割遺跡 660 ㎡［上下層延べ 1,320 ㎡］、四方荒屋遺跡 1,060 ㎡）
発掘作業期間　　令和４年８月 29 日～ 11 月 21 日
整理作業期間　　令和４年 11 月 22 日～令和５年９月 30 日
監理担当者　　堀内大介（富山市教育委員会　埋蔵文化財センター　専門学芸員（令和４年度）・主幹学芸員（令和５年度））
発掘作業担当者　常深　尚（有限会社毛野考古学研究所富山支所）
整理作業担当者　常深　尚（有限会社毛野考古学研究所富山支所）

5　調査にあたっては、次の方々よりご協力をいただいた。記して謝意を表します。
　(株)エム・ティ・プラン　(公社)富山県シルバー人材連合会　(株)布村土建　四方荒屋地区
6　自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その成果を第４章に掲載した。
7　出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
8　本書の執筆は、第１章・第２章を堀内、第３章・第５章を常深が行い、編集は常深が行った。文責は文末に記した。

凡　　例

1　本書で用いた座標は世界測地系である。挿図の方位は真北、水平基準は海抜高である。
2　層序および遺物観察表で記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1995 年後期版』に拠る。
3　遺構表記は、溝・畑跡：SD、SF：道路跡　土坑：SK、ピット：SP、不明遺構：SX を用いた。
4　写真の縮尺は不統一である。
5　遺物実測図の縮尺は、原則 1/3 である。
6　挿図中の網掛けは、次のとおりである。

遺物　赤彩　　煤・黒色処理　　油煙

7　第４図は国土地理院発行２万５千分１地形図をもとに作成した。

目　　次

巻頭図版
例言・凡例

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査にいたる経過 …… 1
　第２節　試掘調査の経過 …… 1
　第３節　発掘調査にいたる経過 …… 1
　第４節　出土品整理の経過 …… 1
　第５節　周辺の調査状況 …… 3

第２章　遺跡の位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　調査の方法と成果 …… 8
　第１節　調査の方法 …… 8
　第２節　層　序 …… 8
　第３節　遺　構 …… 9
　　1　上層遺構 …… 9
　　2　下層遺構 …… 29
　第４節　遺　物 …… 34
　　1　上層出土遺物 …… 35
　　2　下層出土遺物 …… 38
　　3　試掘調査出土遺物 …… 41

第４章　自然科学分析 …… 44
　第１節　放射性炭素年代測定 …… 44

第５章　総　括 …… 47
　第１節　弥生時代 …… 47
　第２節　平安時代 …… 48
　第３節　中　世 …… 49
　第４節　近　世 …… 49

引用・参考文献 …… 52
写真図版
報告書抄録

図　目　次

第１図　試掘調査トレンチ位置図 …… 2
第２図　四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡調査区位置図 … 3
第３図　神通川の河口変遷図 …… 4
第４図　周辺の遺跡分布図 …… 6
第５図　基本層序 …… 9
第６図　基本層序・地震痕・SD30・SA203位置図　10
第７図　上層調査区全体図 …… 11
第８図　上層遺構図（1） …… 12
第９図　上層遺構図（2） …… 13
第10図　上層遺構図（3） …… 14
第11図　上層遺構図（4） …… 15
第12図　上層遺構図（5） …… 16
第13図　上層遺構図（6） …… 17
第14図　土坑遺構図（1） …… 18
第15図　土坑遺構図（2）…… 19
第16図　溝・道路跡 SF201変遷図 …… 20
第17図　溝・道路跡 SF201遺構図 …… 21
第18図　溝・道路跡 SF202 遺構図 …… 22
第19図　畑跡（東西畝）…… 25
第20図　畑跡（南北畝）…… 26
第21図　畑跡断面図（1） …… 27
第22図　畑跡断面図（2） …… 28
第23図　下層調査区全体図 …… 29
第24図　下層遺構図（1） …… 30
第25図　下層遺構図（2） …… 31
第26図　下層遺構図（3） …… 32
第27図　下層土坑遺構図…… 33
第28図　下層溝遺構図…… 34
第29図　下層不明遺構遺構図 …… 35
第30図　上層出土遺物図（1） …… 36
第31図　上層出土遺物図（2） …… 37
第32図　下層出土遺物図（1） …… 39
第33図　下層出土遺物図（2） …… 40
第34図　試掘調査出土遺物図 …… 41
第35図　暦年較正結果 …… 46
第36図　弥生時代中期の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡 … 47
第37図　古代道路推定図 …… 48
第38図　中世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡 … 50
第39図　近世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡 … 51

表　目　次

第１表　遺物観察表(1) …… 42
第２表　遺物観察表(2) …… 43
第３表　遺物観察表(3) …… 44
第４表　放射性炭素年代測定結果 …… 46

図　版　目　次

巻頭図版１　遺構
　調査地区全景（上層完掘、空撮、南東から）
　調査地区全景（四方荒屋遺跡上層完掘、空撮、東から）
巻頭図版２　遺構
　調査地区全景（上層完掘合成、空撮、南東から）
　調査地区全景（上層完掘、空撮、北から）
巻頭図版３　遺構
　調査地区全景（四方背戸割遺跡下層完掘、空撮、北東から）
　SK95 土師器埦出土状況（北から）
　SK125 白磁碗出土状況（東から）
　SK1001 弥生土器出土状況（東から）
　SX1132 石器出土状況（北から）
巻頭図版４　遺物
　弥生土器（SK1001 ほか）
　土師器埦（SK94・95）

写真図版１　遺構（1）
　調査地区全景（上層完掘、空撮、北から）
　調査地区全景（四方荒屋遺跡上層完掘、空撮、北西から）
写真図版２　遺構（2）
　調査地区全景（四方背戸割遺跡上層完掘、空撮、北東から）
　調査地区全景（四方背戸割遺跡下層完掘、空撮、南東から）
写真図版３　遺構（3）　四方荒屋遺跡
　調査区南東部（北東から）
　調査区南東部（南東から）
　調査区北東部（北から）
　調査区北東部（東から）
　調査区北部（北から）
写真図版４　遺構（4）　四方荒屋遺跡
　調査区南東部（北東から）
　調査区北東部（東から）
　調査区南東部（北から）
　調査区北西部（北東から）
写真図版５　遺構（5）　四方荒屋遺跡
　K6 区（北東から）
　K9 区（南西から）
　K13 区（南西から）
　SK94 完掘（西から）
　SK95 完掘（北から）
　SK125 完掘（東から）
　SK130 完掘（北西から）
　SK131 完掘（南東から）
写真図版６　遺構（6）　四方背戸割遺跡上層
　調査区北東部（北東から）
　調査区北東部（北から）
　調査区北東部（北東から）
　調査区北東部（北から）
　調査区北東部（南東から）
写真図版７　遺構（7）　四方背戸割遺跡上層
　SD01・164 完掘（SF201、東から）
　SD01 完掘（東から）
　SD09・14 完掘（SF202、北から）
　畝溝底面の凹凸（北から）
写真図版８　遺構（8）　四方背戸割遺跡下層
　調査地区全景（北から）
　調査区北東部（東から）
写真図版９　遺構（9）　四方背戸割遺跡下層
　調査区北東部（北から）
　SK1001 完掘（北から）
　SK1001 遺物出土状況（東から）
　SK1001 内土坑完掘（北東から）
　SD1169 完掘（南東から）
写真図版 10　遺構（10）　四方背戸割遺跡下層
　SX1176 完掘（東から）
　SX1176 完掘（北から）
　SX1206 礫出土状況（北から）
　SX1132 石器出土状況（東から）
　地割れ・噴砂検出状況（東から）
　噴砂断割（北西から）
写真図版 11　遺物(1)　四方荒屋遺跡
　SK94・95・125、SD30・115・118・120・176、確認面、残土出土遺物
写真図版 12　遺物(2)　四方背戸割遺跡
　SK163、SD01・09・14・30・49・151・161・164・166・170、SP144、残土、撹乱、トレンチ埋土出土遺物
写真図版 13　遺物(3)　四方背戸割遺跡
　SK1001、SD155、SP156、確認面、Ⅳ層出土遺物図
写真図版 14　遺物(4) 四方背戸割遺跡･四方荒屋遺跡
　SD174、SX1132、試掘調査出土遺物

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経過

四方荒屋遺跡・四方背戸割遺跡は、昭和 63 年～平成 3 年度に富山市教育委員会（以下、富山市教委）が実施した分布調査の結果を受け、平成 5 年刊行『富山市遺跡地図（改訂版）』に「四方荒屋遺跡」（№. 201014）、「四方背戸割遺跡」（№. 201015）として登載された。平成 25 年刊行『富山市遺跡地図』には、遺跡番号を「四方荒屋遺跡」（№. 2010026）、「四方背戸割遺跡」（№. 2010027）に変更して登載された。

令和 4 年 4 月 26 日、株式会社クスリのアオキから店舗建築に伴い、埋蔵文化財の所在確認依頼書が提出された。対象地 6,411 ㎡が埋蔵文化財包蔵地に含まれており、試掘調査を実施することとした。

第２節　試掘調査の経過（第 1 図）

試掘調査は、株式会社クスリのアオキの協力を得て令和 4 年 5 月 30 日～ 6 月 3 日に富山市教委埋蔵文化財センターが実施した。試掘トレンチを 12 箇所設定し、重機によって遺構面までの掘削を行った。周辺調査から下層遺構の存在の可能性も想定されていたことから、トレンチの一部を掘り下げて下層遺構の確認作業も行った。その結果、調査対象範囲全域 6,411 ㎡で上層に古代の掘立柱建物、中世～江戸時代の溝（畑）、柱穴、土坑などを検出し、下層に弥生時代の溝を検出した。遺物は、弥生土器、古代の土師器・土錘、中世のかわらけ・珠洲、江戸時代の唐津が出土した。

試掘調査や周囲の調査状況から試掘調査範囲の北部の下層には旧河川跡と思われる浅い埋没谷が存在し、その谷の南側微高地に弥生～古墳時代の集落が広がることが分かってきた。このような遺構の分布状況から、弥生～古墳時代の集落が広がる試掘調査範囲南部を「四方背戸割遺跡」とし、下層遺構がない北部を「四方荒屋遺跡」として遺跡範囲を修正した（第 2 図）。修正後の埋蔵文化財包蔵地面積は「四方荒屋遺跡」が 104,468 ㎡、「四方背戸割遺跡」が 121,773 ㎡である。

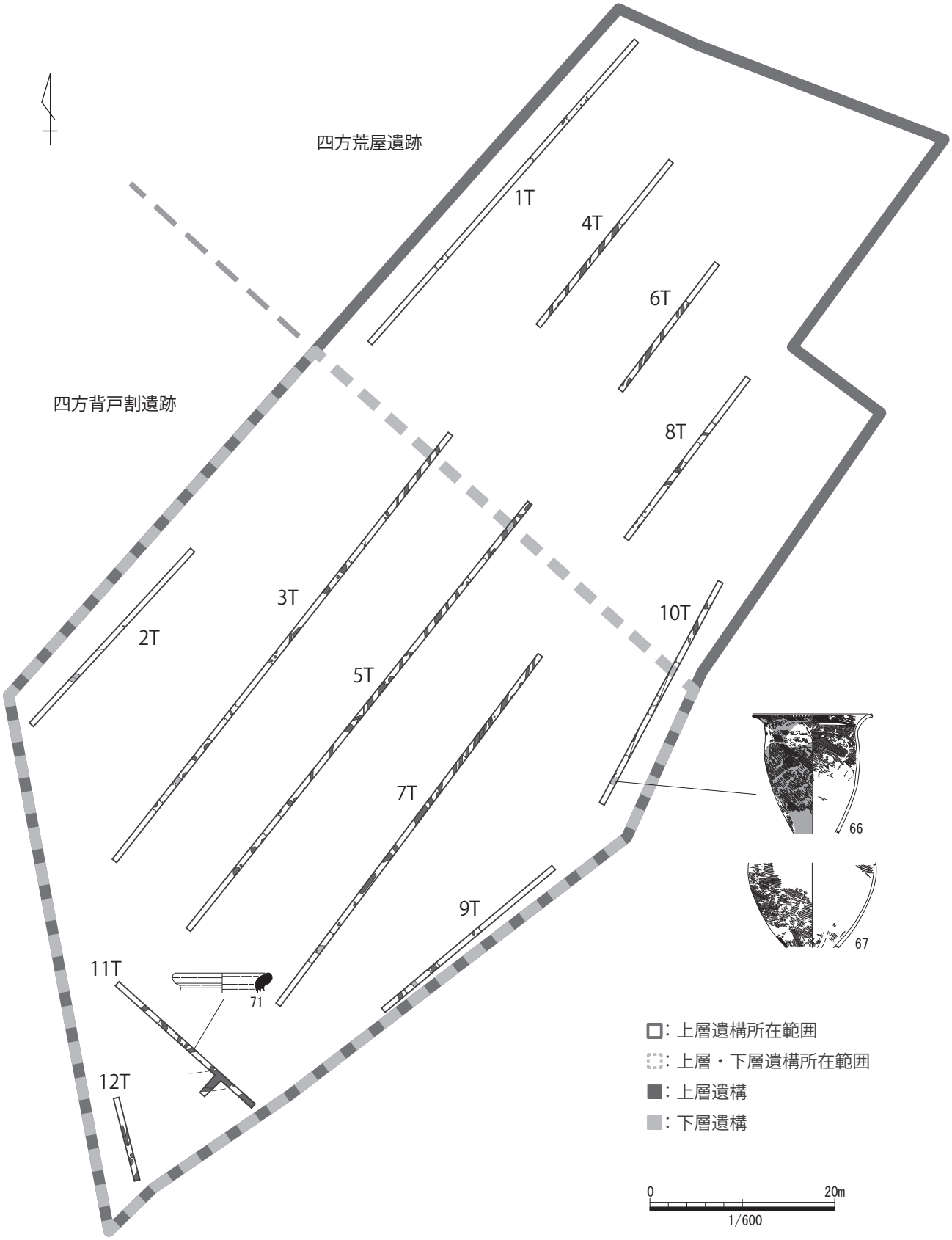
第３節　発掘調査にいたる経過

工事対象範囲全域で埋蔵文化財の所在を確認したため、試掘調査の結果に基づき、埋蔵文化財の保護措置について施主である株式会社クスリのアオキと協議した。その結果、店舗の工事計画のうち、擁壁、建物基礎・地中梁、付帯設備、地下雨水貯留槽、集水桝の掘削工事が下層遺構面まで到達するため、埋蔵文化財を現地で保存できないことから、埋蔵文化財所在範囲 6,411 ㎡のうち 1,720 ㎡（四方荒屋遺跡（上層 1 面）1,060 ㎡、四方背戸割遺跡（上下層 2 面）660 ㎡）については、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。それ以外の埋蔵文化財所在範囲 4,691 ㎡は現状保存とした。

文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、施主から令和 4 年 8 月 5 日付けで富山市教委へ提出され、富山市教委の副申を付けて同年 8 月 18 日付け埋文 34 号で富山県教育委員会へ提出した。文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の報告は、富山市教委から同年 10 月 18 日に富山県教育委員会へ提出した。四方荒屋遺跡は 11 月 18 日、四方背戸割遺跡は 11 月 21 日に調査を完了し、現地を引き渡した。（堀内）

第４節　出土品整理の経過

出土品整理は、現地調査終了後の令和 4 年 11 月 22 日から有限会社毛野考古学研究所富山支所で実施した。放射性炭素年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その成果は第 4 章に掲載した。併行して遺物写真撮影、原稿作成を行い、令和 5 年 9 月 30 日に本書を刊行した。（常深）



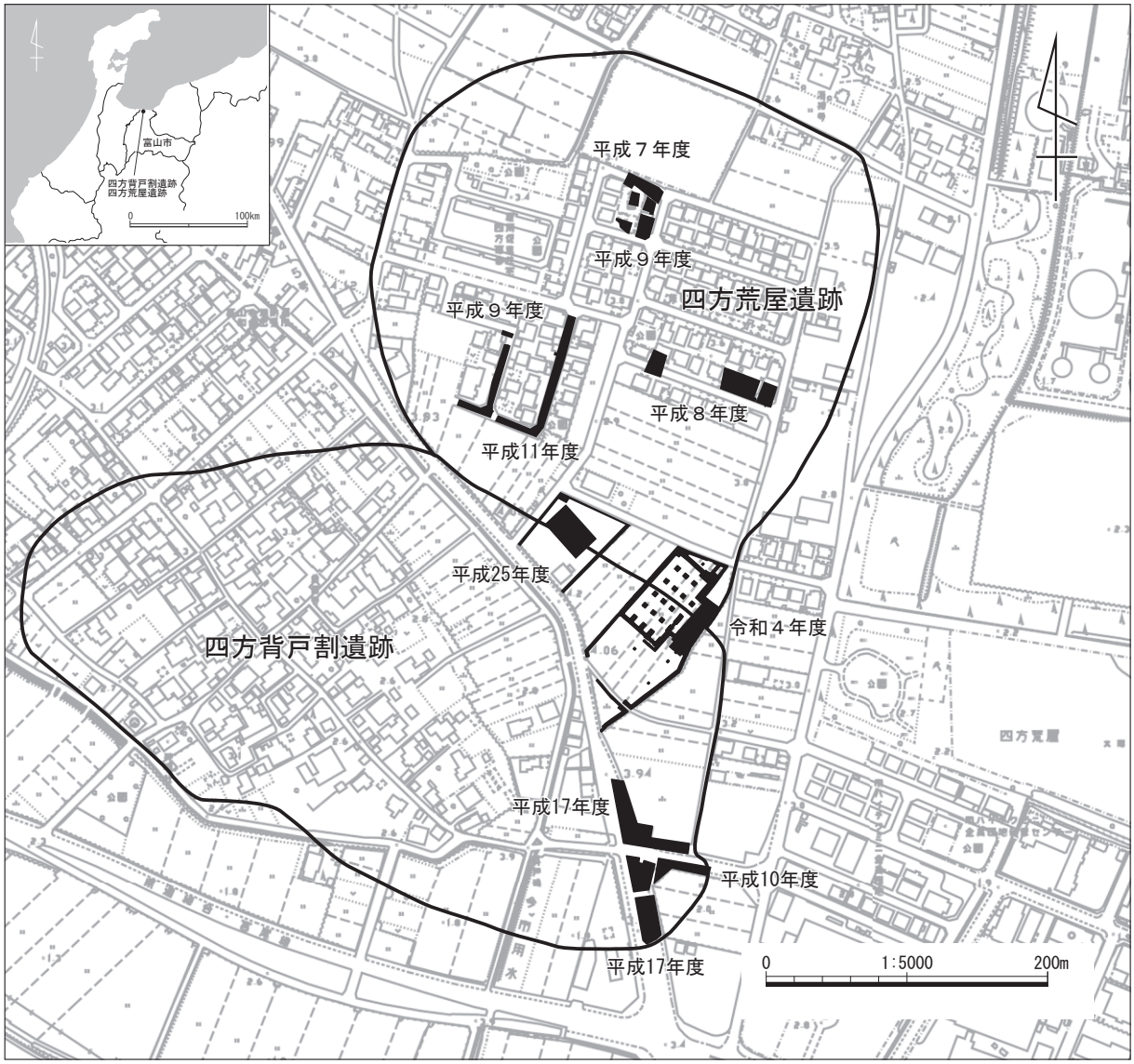
第１図　試掘調査トレンチ位置図

第５節　周辺の調査状況（第２図）

四方荒屋遺跡では、平成７～11年に分譲宅地造成工事に伴う発掘調査を７次にわたって実施した（富山市教委ほか1999、富山市教委2000・2008a）。北地区では、大型建物と倉庫・井戸を配する短冊形の地割を呈する14世紀以降の屋敷地を検出し、かわらけ・珠洲・刀子などが出土した。西地区南部では、江戸時代の東西方向の畑跡（Ｂ群）を検出した。東地区では、古墳時代前期の土坑、平安時代の土坑、江戸時代の南北方向の畑跡（Ａ群）を検出し、古式土師器・須恵器などが出土した。

四方背戸割遺跡では、平成10年と平成17年に国道415号線道路改築工事に伴う発掘調査を実施した。弥生時代中期～古墳時代初頭の平地式建物、溝、土坑、ピット、焼土、中世の掘立柱建物、溝、土坑、ピットを検出し、弥生時代中期～古墳時代初頭の弥生土器・古式土師器、中世の土師器・珠洲・土錘・鉄滓が出土した。1586年天正地震と1858年飛越地震に伴う噴砂跡も検出された（富山市教委1999a・2006a）。

平成25年、四方背戸割遺跡北部（旧四方荒屋遺跡南部）において富山北消防署和合出張所新築工事に伴う発掘調査を実施した。上層で江戸時代の畑跡（Ａ群・Ｂ群）、下層で弥生時代中期～後期の



第２図　四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡調査区位置図

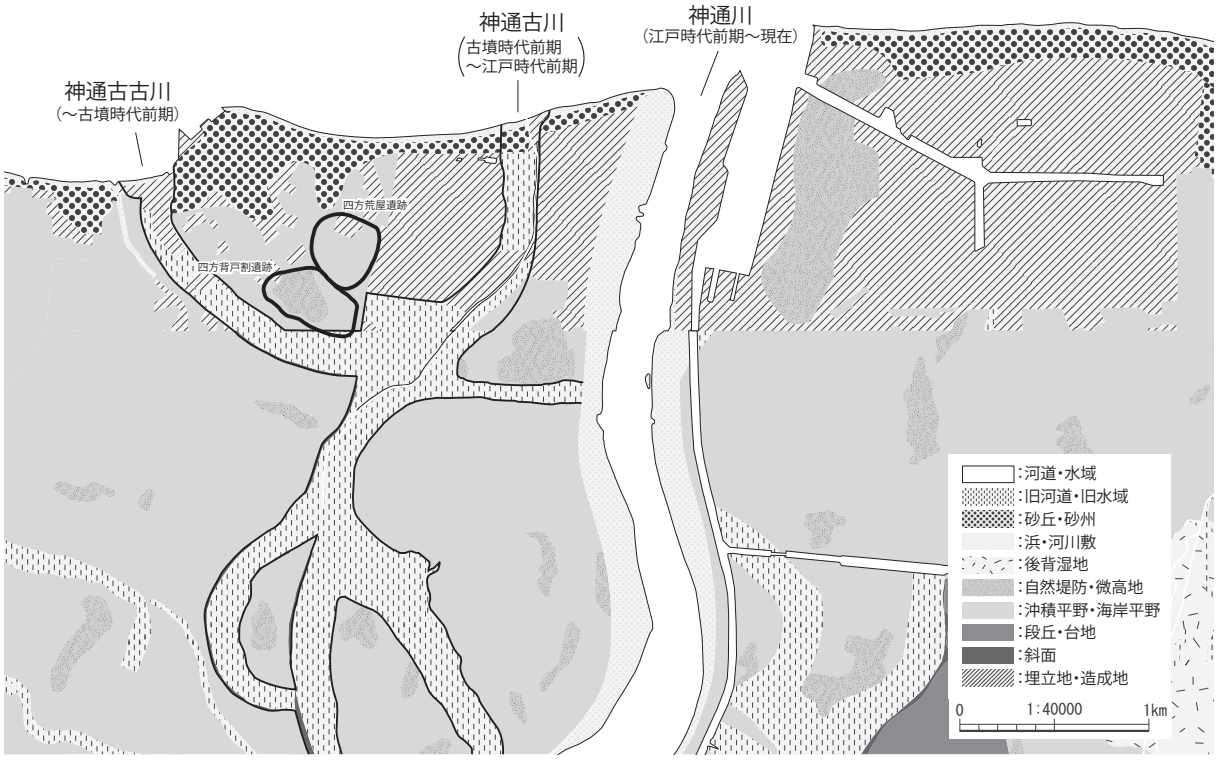
平地式建物、溝、土坑を検出した。遺物は弥生時代中期～後期の弥生土器、中世の珠洲、近世の越中瀬戸などが出土した。弥生土器の中には、後期前半の天王山式土器があり、東北や下越地域など北日本地域との交流を示す資料と考えられている。863 年貞観地震に伴う噴砂跡も検出された（富山市教委 2014）。（堀内）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

両遺跡は、富山市北部に位置し、富山市街地から北へ約 7 ㎞の富山市四方荒屋地内に所在する。現在の神通川から西へ約 1.5 ～ 1.6 ㎞、海岸汀線から約 0.6 ～ 1.0 ㎞の神通川左岸の海岸砂丘内側の低湿地上に立地する。標高は 2.5 ～ 3 ｍである。

神通川河口は、弥生時代から江戸時代にかけて洪水によりその位置が変わっていたことが分かっている（第 3 図）。弥生時代後期には現在の神通川から西へ約 2.8 ～ 2.9 ㎞の富山市打出地内にあり（富山市教委 2004）、打出を通る流路は神通古古川と呼ばれている。小黒智久の研究では、4 世紀中頃（古墳時代前期）の大規模洪水で神通古古川の流路が変わり、古古川跡は河跡湖になったとされる（小黒 2015）。延徳 3（1491）年に書かれた冷泉為広の『越後下向日記』の中で、「･･･ ウチデ里　シバクサ　ヨカタ里　イワセ渡、大河あり、里カミイワセ　ナカエノ木里 ･･･」と記述がある（小葉田 1986）。日記が書かれた室町時代後期には西岩瀬の東に神通川河口であったことが分かる。古墳時代前期以降室町時代までに流路が変わり、西岩瀬の東を通り、海へ注ぎ込んでいたと考えられる。その川は現在細い川となっていて、神通古川と呼ばれている。『越中国四郡絵図』（正保年間から万治年間



第３図　神通川の河口変遷図

（1644 ～ 1660）、小矢部ふるさと歴史館蔵）には、神通古川が本流だった頃の神通川が描かれており、江戸時代前期まで西岩瀬の東を流れていたことが分かる。その後、『越中記』によれば万治元年（1658）の大洪水で東岩瀬の西側に流れができ、その後寛文８～９年（1668 ～ 69）の洪水以後は現在の河口である東岩瀬の西側が本流となったとされる。

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺には、旧石器時代から近世に各時代の遺跡が所在する（第４図）。

旧石器時代は、北代台地の北西山裾にある小竹貝塚ではナイフ形石器が出土している。北代台地上にある北代遺跡では、ナイフ形石器と斧形石器が出土している（西井・藤田 1976）。

縄文時代前期には、縄文海進で広がった旧放生津潟の湖畔に貝塚を伴う集落が営まれた。小竹貝塚では、前期中葉～末葉に集落が形成された。集落に隣接する貝塚内に墓域が造られ、縄文時代前期では全国最多の人骨が発見された（富山県財団 2014）。小竹貝塚の東約 750 mに、前期後葉の「蜆ヶ森式土器」の標識遺跡である蜆ヶ森貝塚もある。現在の神通川底から掘り出された土砂から前期の土器が採集されており、神通川河口付近にも集落が存在した可能性が示唆されている（古川 2005）。

縄文時代中期に入ると、北代台地上に集落が形成され、代表的な遺跡が国史跡北代遺跡である。高床建物を中心に約 70 棟以上の竪穴住居が取り巻く集落形態を取る（富山市教委 1998）。北代加茂下Ⅲ遺跡では、柱列が二重に巡る 14 本以上の柱を持つ特異な建物を確認した（堀沢 1996・1997）。縄文時代後・晩期にも、北代台地上には北代遺跡や長岡杉林遺跡などで集落が営まれる。長岡八町遺跡では、谷地形から後期～晩期の大量の縄文土器とともに大型の土偶、石棒、石刀、御物石器など祭祀関係遺物が出土した（富山市教委・環境事業団 2003）。

弥生時代前期から中期にかけては、神通古古川左岸の打出遺跡などが知られるが、散発的に確認される程度である。

弥生時代中期から古墳時代前期にかけては、遺跡数が増加し、神通古古川流域では、集落が営まれる。右岸に四方背戸割遺跡（戸水Ｂ式～古府クルビ式）、永代割遺跡（猫橋式～古府クルビ式）など、左岸に打出遺跡（法仏式～高畠式）、今市遺跡（月影式）などの集落遺跡がある。打出遺跡では、畿内との関係の深い三連壺や県内最多の鉄器が出土し、神通川下流域の拠点的集落であったと推測した（富山市教委 2006b）。呉羽丘陵上には多数の墳墓や古墳が造られた。呉羽丘陵北端部には、百塚遺跡・百塚住吉遺跡があり、方形周溝墓や前方後方墳、前方後円墳等 28 基を発掘し、「百塚古墳群」の存在を確認した（富山市教委 2009・2012）。百塚古墳群の南西約 1 ㎞には、古墳時代初期の造営とされる杉坂古墳群がある。さらに杉坂古墳群の南南西約 0.4 ㎞に古墳時代前期の円墳と考えられる番神山古墳が発見された（富山市教委 2020）。

古墳時代後期には、番神山横穴墓群や金屋陣ノ穴横穴墓群などの群集墳が造られる。番神山横穴墓群では、昭和期に発見された 15 基に加え 9 基が新たに発見された。B9 号墓からは、馬具 4 点（大型矩形立環状鏡板付轡 1、鉸具 2、飾金具 1）が出土し、上位階級の被葬者の存在が示唆された（富山市教委 2022）。百塚遺跡ではこの時期にも円墳が造られ、円墳の周溝内埋葬施設に馬のハミが副葬され、他地域に先んじて馬を所有した有力者がいたと考えられる（富山市教委 2012）。

古代には、呉羽丘陵北西部に古代射水郡「寒江郷」の存在が推測されている（根津 2006）。北代遺跡、百塚住吉Ｄ遺跡、今市遺跡などがその開墾集落と考えられる。長岡杉林遺跡では、緑釉陶器、灰釉陶器に加え、瓦塔などの仏教遺物も出土し、古代「寒江郷」の中心的な集落と考えられる（富山市教委 1987）。百塚住吉Ｄ遺跡では、7 世紀後半～ 9 世紀の竪穴建物、掘立柱建物、大型土坑など古代「寒

第４図　周辺の遺跡分布図

江郷」の集落の遺構を検出した。特に２基の大型土坑は馬小屋と推測されている（富山県農林センター・富山市教委 2012）。八ヶ山Ａ遺跡では、8 世紀後半～ 9 世紀の区画溝、井戸、土坑などを検出した。区画溝は、周辺の百塚住吉Ｄ遺跡や八町Ⅱ遺跡の遺構と同一方向であることから、周辺と同じ地割となっていたと考えられる（富山市教委 2015）。平安時代の道路跡が、打出遺跡（北西－南東方向）、今市遺跡（南西－北東方向）で検出し、両遺跡の間で交わると推定した（富山市教委 2013b、県財団 2015）。

中世になると、神通川左岸には中世の遺跡が集中する。この辺りは、室町時代頃に成立した『廻船式目』にみえる十大港（三津七湊）の一つである「越中岩瀬湊」の有力候補地とされる。四方荒屋遺跡、四方北窪遺跡や打出遺跡などでは中国製陶磁器の出土や屋敷跡などを確認し、港湾都市的な性格が考えられている（中世岩瀬湊調査研究グループ 2004）。八町Ⅱ遺跡では、鎌倉時代～室町時代の集落を確認し、区画溝や多数の井戸が検出し、千鳥紋を施した漆器なども出土することから京都下鴨神社領「寒江荘」の中核的な集落と考えられている（富山市教委 2008b）。越中守護代神保氏の被官であった国人寺嶋氏の出自の地と推測されている今市遺跡内の寺島地区において、薬研堀や土橋、犬走りなどの館跡とされる遺構を確認し、鎌倉時代にはこの地に有力者の館が存在することが明らかとなった（富山市教委 2011）。

千原崎遺跡では、17 世紀前半（1 期）、17 世紀後半～ 18 世紀前半（2 期）の江戸時代の集落が確認された。2 期の集落は寛文 8 ～ 9 年の洪水以後「千原崎の渡し」が置かれたことに伴い、港町宿場的な性格に変化した集落と考えられる（富山市教委 1996・1999b）。八ヶ山地内に富山藩主前田家墓所（長岡御廟所）が造営される。加賀藩より富山藩 10 万石を与えられた前田利次は、立藩の際に百塚の地に新城を造ることを願い出て許可をされ、「百塚侍従」と呼ばれた。しかし、百塚築城は財政的に叶わず、二代正甫が亡父の念願であった百塚城予定地近くに利次を葬り、以後この場所が富山藩歴代藩主の墓所になった（古川・野垣・小林・蓮沼 2010）。（堀内）

遺跡名一覧（第4図）
1:四方背戸割遺跡　2:四方荒屋遺跡　3:四方北窪遺跡　4:四方西野割遺跡　5:四方沖海底遺跡
6:江代割遺跡　7:打出遺跡　8:今市遺跡　9:寺島館跡　10:草島遺跡　11:千原崎遺跡　12:宮尾遺跡
13:百塚古墳群　14:百塚遺跡　15:百塚B遺跡　16:百塚鍵割遺跡　17:百塚住吉遺跡　18:百塚住吉B遺跡
19:百塚住吉C遺跡　20:百塚住吉D遺跡　21:百塚住吉E遺跡　22:八ヶ山遺跡　23:八ヶ山A遺跡
24:八ヶ山B遺跡　25:八ヶ山C遺跡　26:八ヶ山林窯跡　27:八町C遺跡　28:八町D遺跡　29:八町Ⅱ遺跡
30:長岡八町遺跡　31:北代加茂下Ⅰ遺跡　32:北代加茂下Ⅱ遺跡　33:北代加茂下Ⅲ遺跡
34:北代加茂下Ⅳ遺跡　35:北代加茂神社遺跡　36:北代遺跡　37:北代東遺跡　38:北代大畑Ⅱ遺跡
39:北代中谷遺跡　40:北代中谷Ⅱ遺跡　41:北代村巻Ⅰ遺跡　42:北代村巻Ⅳ遺跡　43:北代村巻Ⅴ遺跡
44:北代シャクドジ遺跡　45:呉羽富田町遺跡　46:長岡杉林遺跡　47:長岡新遺跡　48:北代一万歩遺跡
49:北代南田渕遺跡　50:茶屋町遺跡　51:北代西山遺跡　52:北代西山Ⅱ遺跡　53:北代平野遺跡
54:富山藩主前田家墓所（長岡御廟所）　55:杉坂古墳群　56:長慶寺古墳　57:五百羅漢
58:奥田神社遺跡

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

表土掘削は重機を使用し、上層遺構確認面(Ⅳ層)の上面まで掘削した。さらに四方背戸割遺跡ではⅣ層を重機で掘削し、Ⅴ層上面を下層遺構確認面とした。調査区の名称は、建物基礎など小規模な調査区のみK1～K17区と呼称した（第７図)。グリッドはX=83,480、Y=3060を基点に５m方眼で設定し、東へA・B・C…、南へ１・２・3…と名称を付した（第６図)。遺構番号は、四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡の区別無く、通し番号の前に遺構の種類を記号で付し、「SD01」・「SK95」のように呼称した。四方背戸割遺跡の下層遺構については４桁の番号を使用し、「SK1001」・「SX1176」のように呼称した。遺構の測量は、断面図を手実測、平面図を電子平板で行い、縮尺は1/20とした。遺構の写真は、デジタル１眼レフカメラ（NikonD850）を使用し、RAWデータ撮影をした。遺跡の全景写真はラジコンヘリによる空中写真とし、デジタルカメラ（Canon EOS 5D Mark Ⅳ及びSONY ILCE-7RM2）にて撮影した。

遺物注記は手書きにて行い、遺跡記号・遺構名・遺物番号・取上日を「YA SK95 №.01 220915」のように注記した。遺跡記号は四方背戸割遺跡が「YKS」、四方荒屋遺跡が「YA」である。遺物の写真撮影はデジタル１眼レフカメラ（NikonD850）を使用した。遺構図・遺物実測図・報告書作成ともにAdobe®Creative Suite®でデジタルトレース・編集等を実施し、印刷所にはPDF型式で入稿した。

第２節　層　序

調査地点の標高は2.8m前後で概ね平坦である。基本層序はA～D地点の４ヶ所で確認した（第5・6図)。

Ⅰ層：10YR6/1褐灰色土　表土（耕作土)。シルト質で、Ⅱ層の小塊を含む。鉄分が沈着する。

Ⅱ層:10YR2/1黒色土　旧耕作土。灰色土の小塊を多く含む。一部ではⅠ層に鋤き込まれ、消失する。

Ⅲ層:10YR3/1黒褐色土　旧耕作土。Ⅳ層の小塊を含む。平成25年度調査(四方荒屋遺跡)のⅤ層(近世の遺物包含層）に相当するが、今回の調査範囲では遺物は出土しなかった。Ⅲ層より新しい遺構はSD30・178、地震痕がある（第６図)。

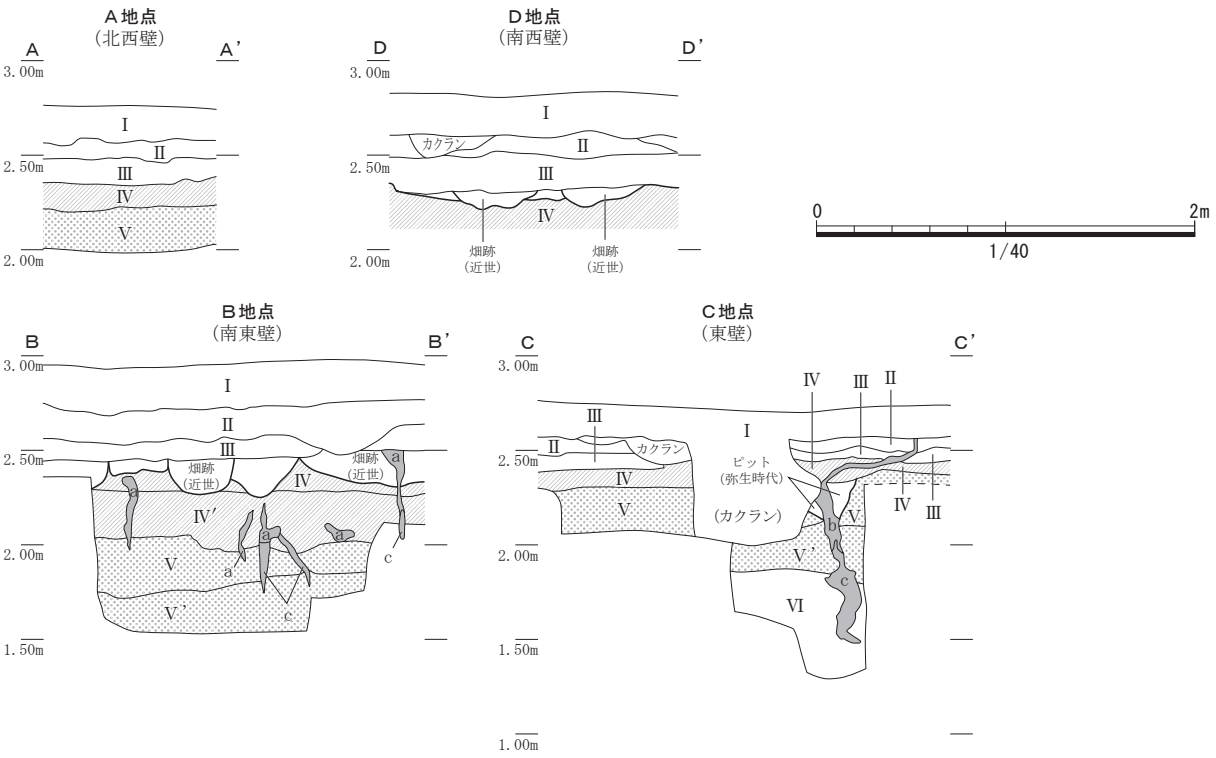
Ⅳ層：2.5Y6/4にぶい黄色土　上層遺構の確認面であり、古代～近世まで遺構を検出した。シルト質～細砂質で、鉄分が沈着する。層厚15～20㎝程度。Ⅳ層上面の標高は、四方背戸割遺跡南側が2.5～2.6mで小高く、その他は2.3～2.4mでほぼ平坦である。平成25年度調査（四方荒屋遺跡）のⅥ層（弥生時代の遺物包含層）に相当するが、今回の調査範囲では弥生土器は出土しなかった。

Ⅳ’層：2.5Y4/2暗灰黄色土　B地点で確認された。Ⅳ層より暗色となり、地震痕（地割れ）の影響で部分的にⅣ層が混入する。下層遺構面における低地に堆積した層と考えられる。

Ⅴ層：2.5Y7/4浅黄色土　下層遺構（四方背戸割遺跡）の確認面であり、弥生時代の土坑、ピットなどを検出した。シルト質である。Ⅴ層上面の標高は、四方背戸割遺跡の南側が2.4mで高く、北東に向かって緩やかに下がりながら、東側は2.0mで一段低くなる。

Ⅴ’層：Ⅴ層の下部。地震痕（噴砂）の影響で下からⅥ層が噴出し、Ⅵ層が混入する層。噴出したⅥ層の周囲に鉄分が沈着する。

Ⅵ層：2.5Y8/1灰白色土　シルト質～細砂質で、鉄分が沈着する。地震痕の噴砂はⅥ層より下から噴出している。



第５図　基本層序

第３節　遺　構

四方背戸割遺跡･四方荒屋遺跡ともにⅣ層上面で遺構を確認した（上層、第７～13図）。遺構は土坑、溝、柵、ピット、畑跡、地震痕があり、時期は平安時代から近世に及ぶ。四方背戸割遺跡では、Ⅴ層上面を遺構確認面とする調査を行い（下層、第23～26図）、弥生時代の土坑、溝、ピットを確認した。

１　上層遺構（四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡）

上層では土坑10基、溝16条、柵１条、畑跡、ピット多数を確認した。

(1) 土坑

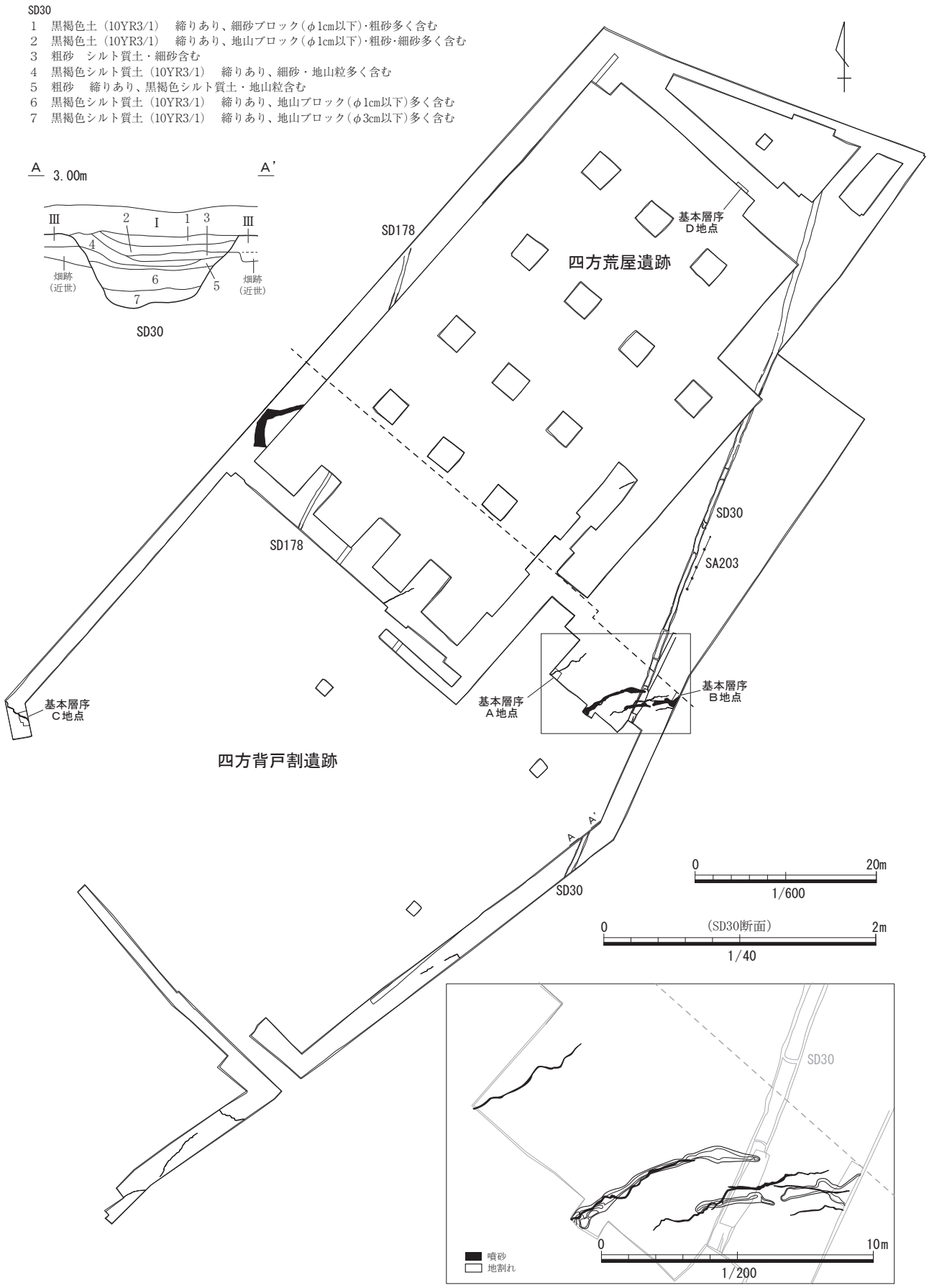
土坑は調査区内に点在し、SK94・95・125が平安時代、SK40・43・130・163が近世以降、SK96・131・165が時期不明である。SK40・130・163は形状・方位・覆土に共通性があり、同一時期の土坑とみられる。

SK40（第14図）　四方荒屋遺跡のS9・S10グリッドに位置する。東西1.2m以上、南北1.1m以上の隅丸長方形で、長軸はＮ-79°－Ｅを示す。深さは52㎝、黒色土の上に地山塊を多く含む黒褐色土が堆積する。出土遺物はないが、Ⅱ層より新しいことから近世畑跡より新しい。

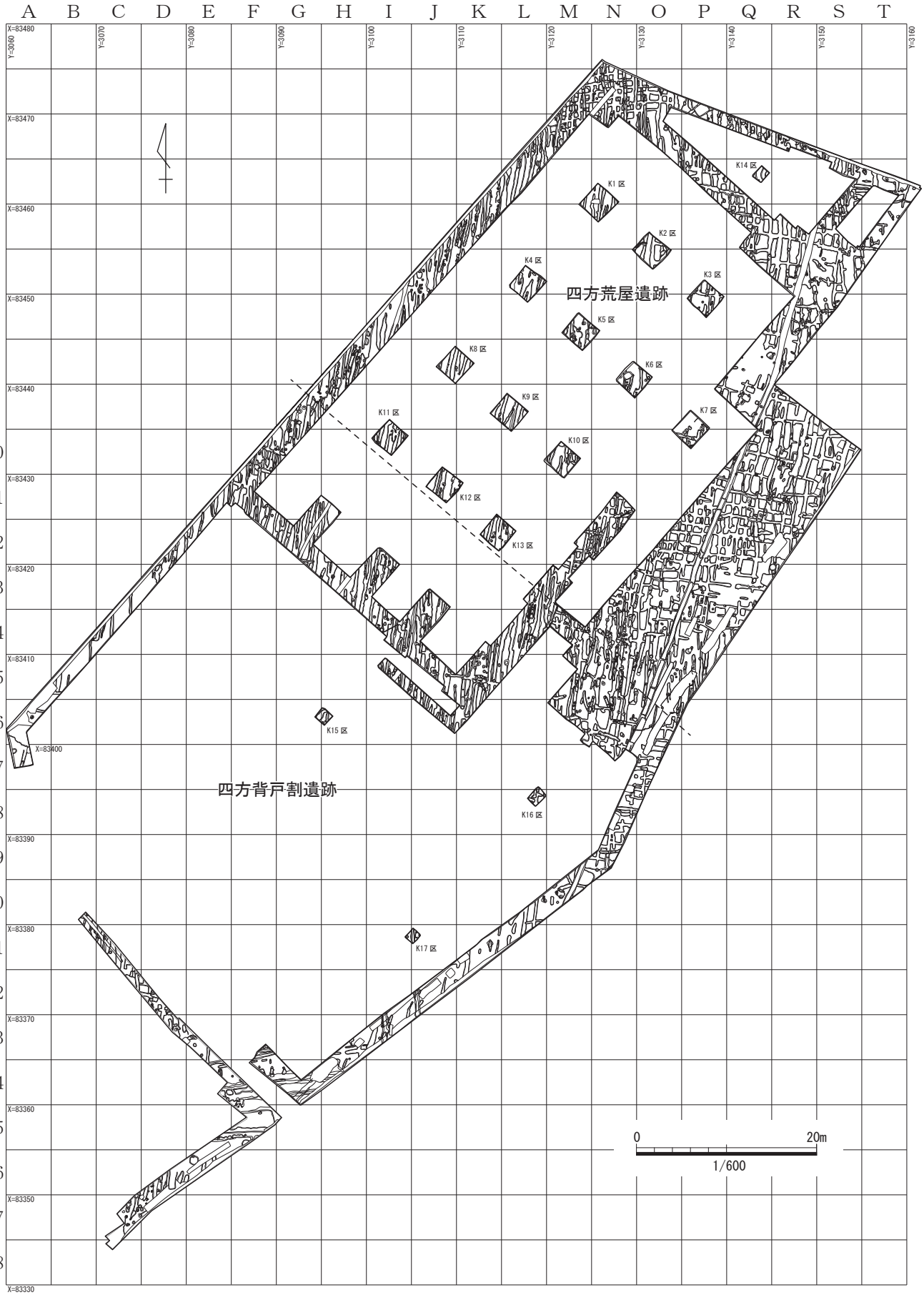
SK43（第14図）　四方背戸割遺跡のN19グリッドに位置する。東西1.4m以上、南北0.6m以上の不整形で、深さは48㎝である。出土遺物はないが、切り合いにより近世畑跡に後出する。

SK94（第14図､図版5）　四方荒屋遺跡のQ13･R13グリッドに位置する。東西1.4m以上､南北1.4m以上の台形状で、深さは10㎝である。切り合いにより近世畑跡より古い。土坑内の南寄りの地点で、赤彩を施した土師器埦･皿（2～4）や土師器甕の破片がまとまって出土した。時期は平安時代である。

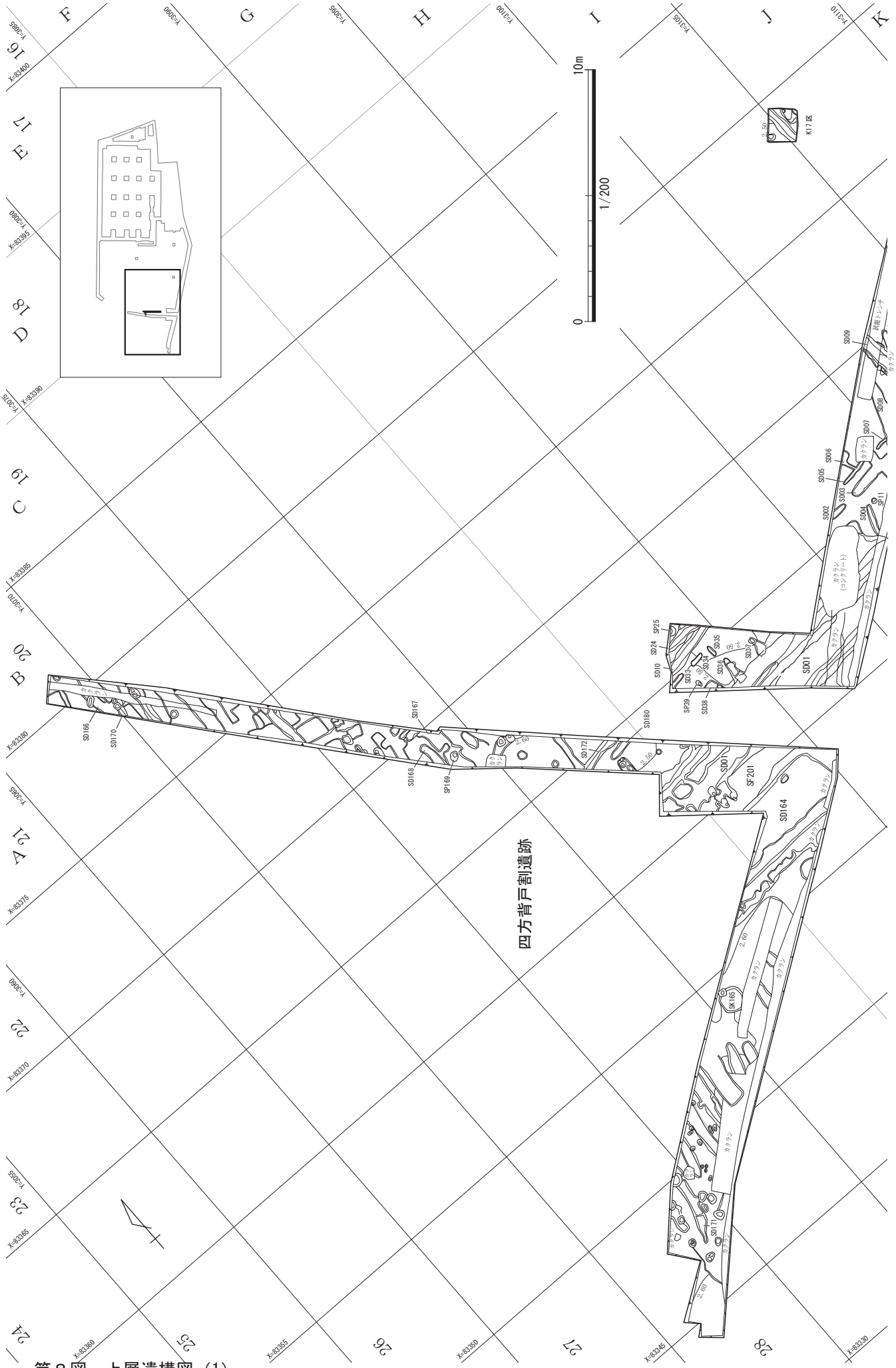
SK95（第14図、巻頭3・図版5）　四方荒屋遺跡のQ13グリッドに位置し、SK94の西に隣接する。南北0.54m以上、東西0.41mの隅丸長方形で、長軸はＮ-10°－Ｅを示す。深さは46㎝である。切



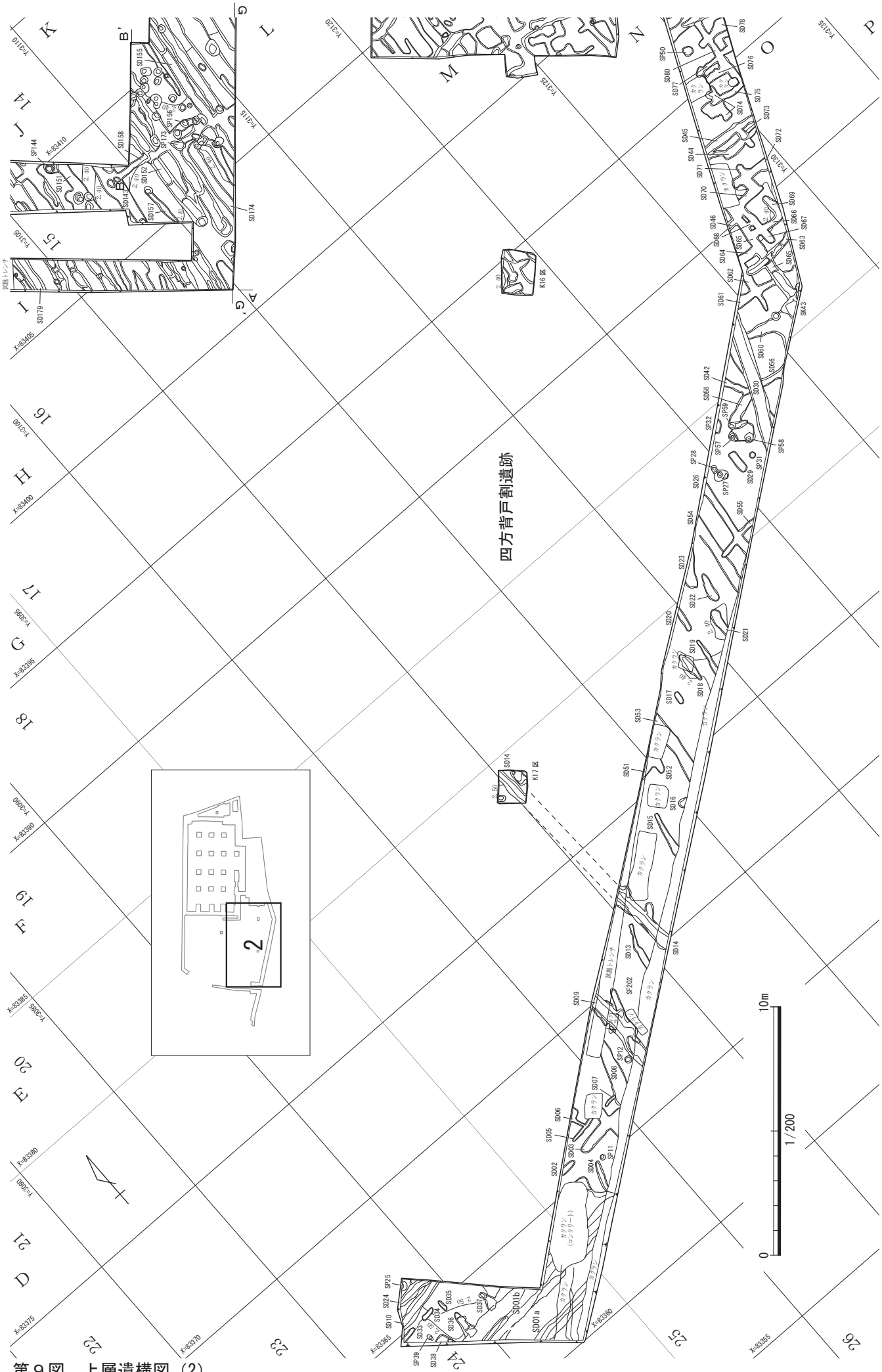
第６図　基本層序・地震痕・SD30・SA203 位置図



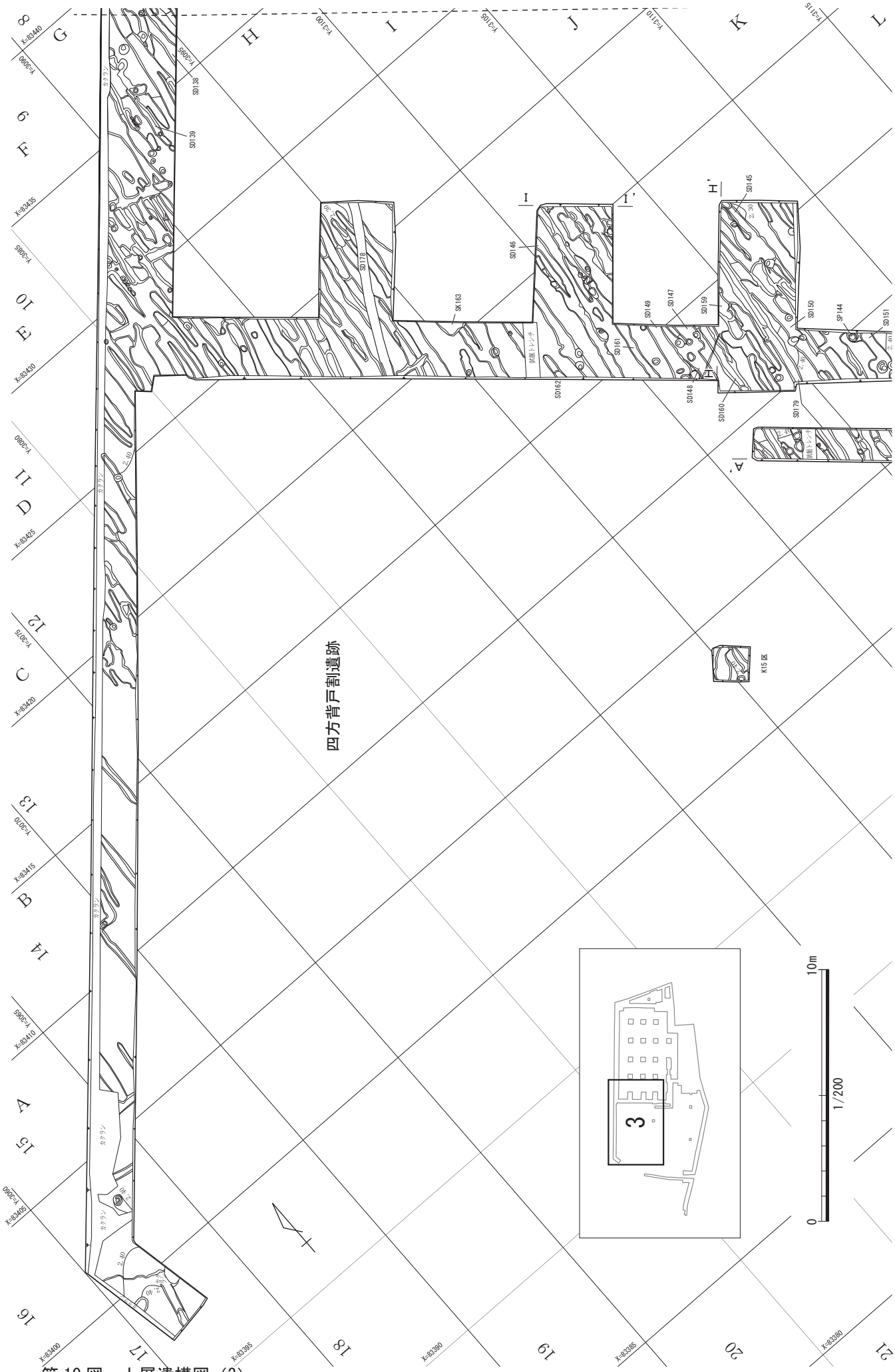
第７図　上層調査区全体図


四方背戸割遺跡
1/200
0
10m
K17区
SD001
SD002
SD003
SD004
SD005
SD006
SD007
SD008
SD009
SD010
SD023
SD024
SD025
SD026
SD034
SD035
SD038
SD039
SD164
SD166
SD167
SD168
SD169
SD170
SD171
SD172
SD180
SF201
SP11
SP25
SP39
SX165
カクラン
カクラン（コンクリート）
2.50
2.60

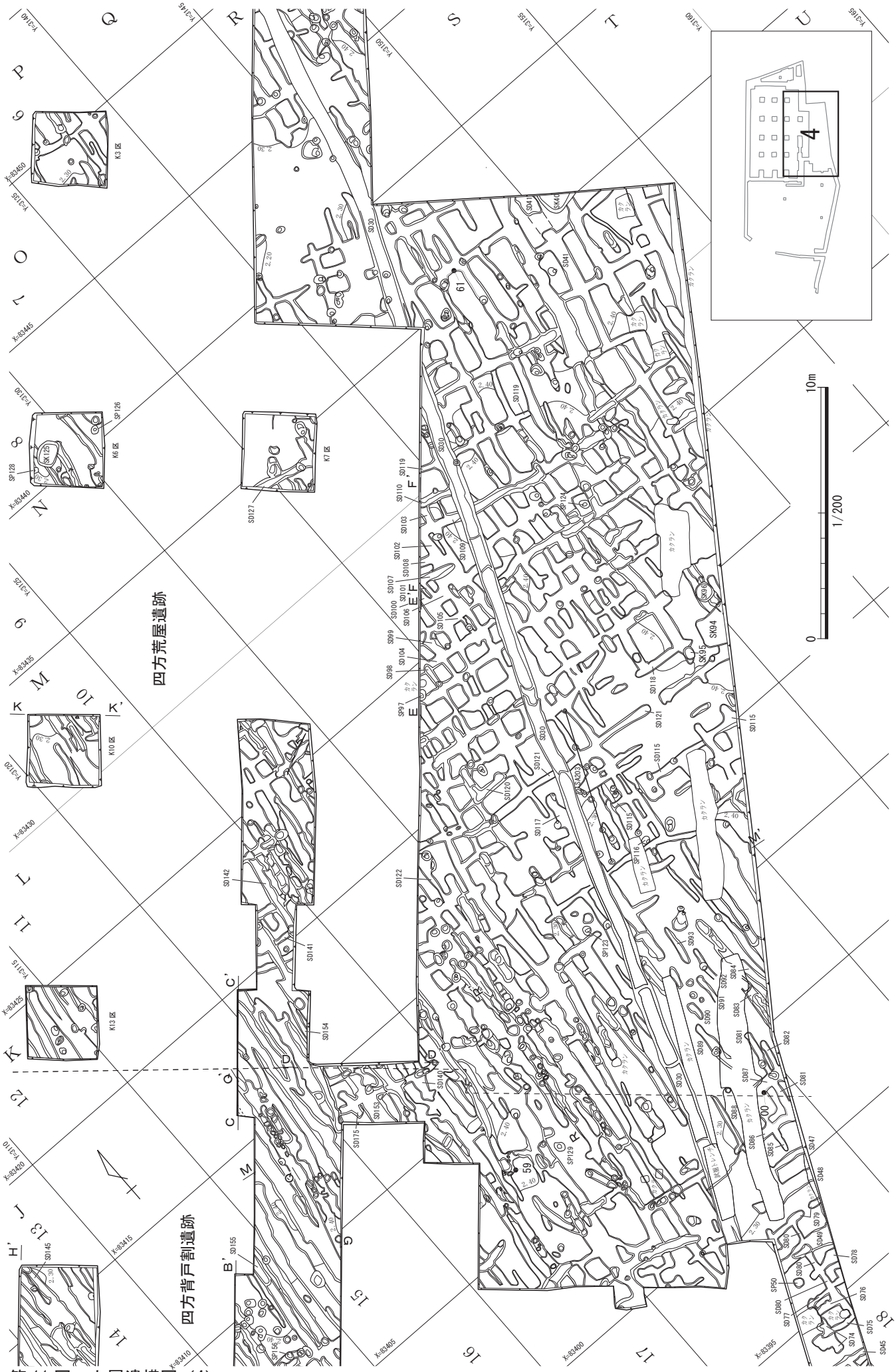
第８図　上層遺構図（1）



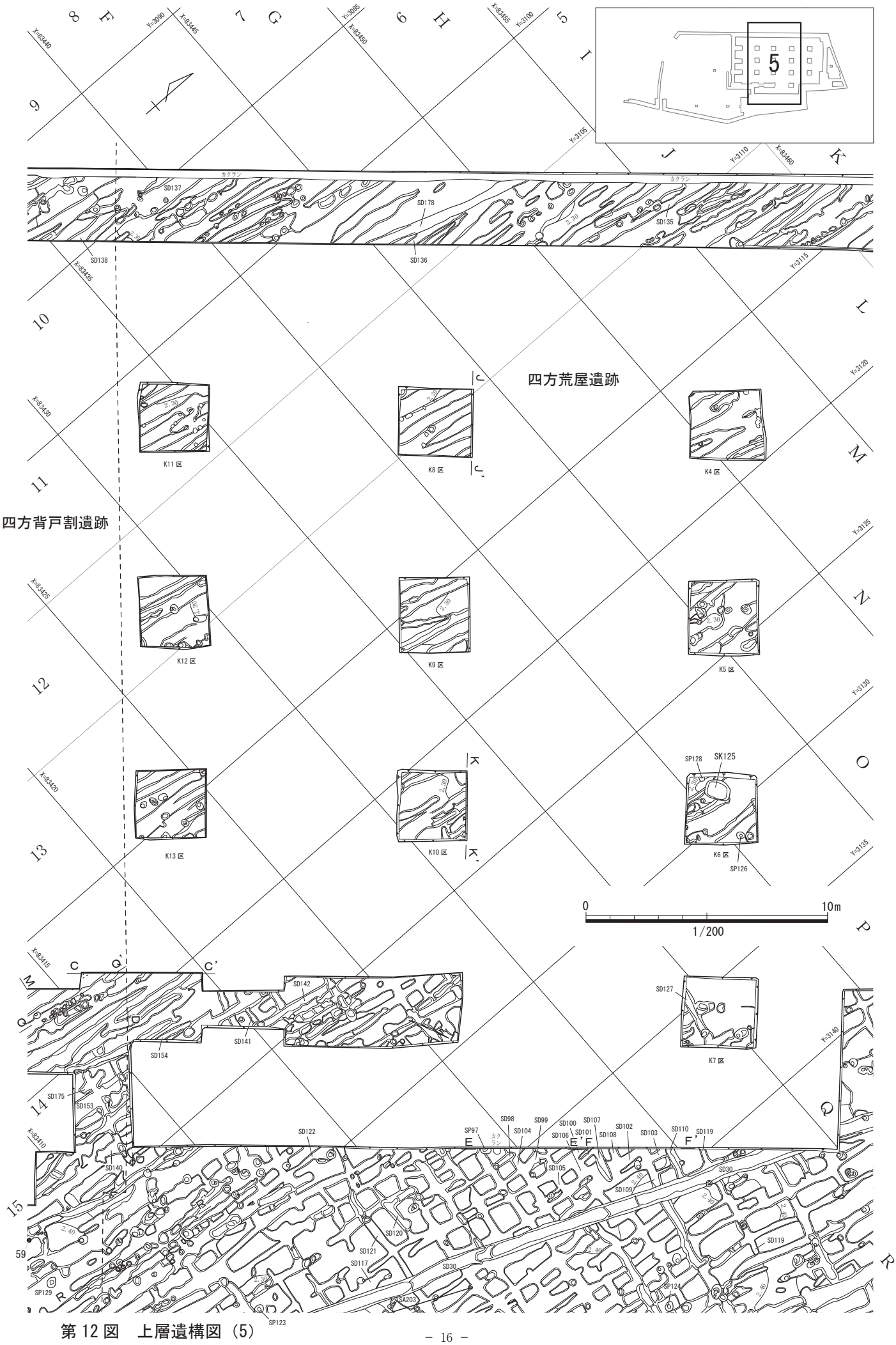
第９図　上層遺構図（2）


四方背戸割遺跡
SD136
SD139
SD175
SK163
SD146
SD149
SD147
SD159
SD145
SD150
SP144
SD151
SD161
SD162
SD148
SD160
SD179
K15区
カクラン
試掘トレンチ
10m
1/200
0

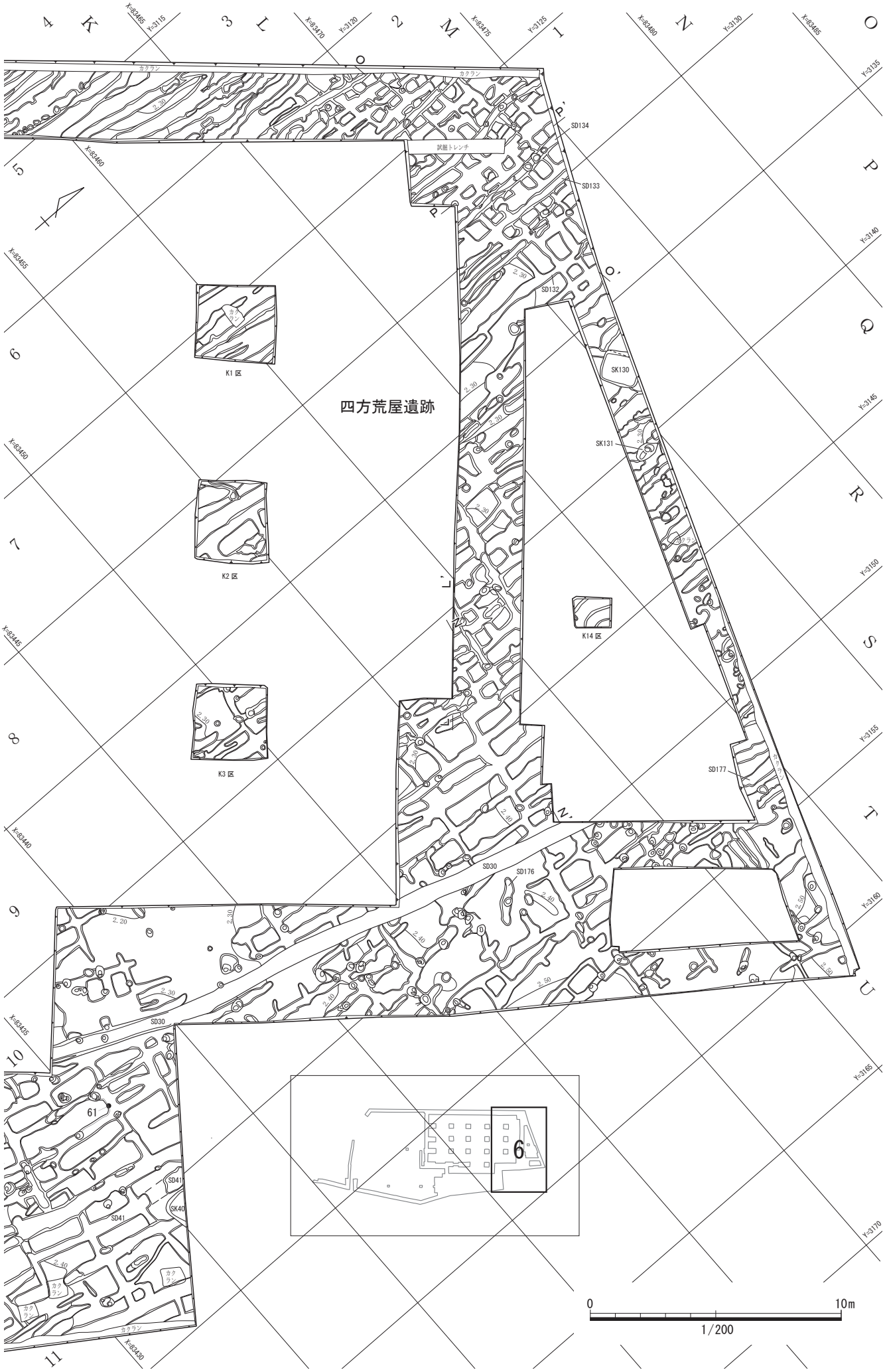
第10図　上層遺構図（3）


四方荒屋遺跡
四方背戸割遺跡
K3 区
K6 区
K7 区
K10 区
K13 区
SP126
SP128
SK125
SD127
SD142
SD141
SD154
SD122
SD140
SD153
SD175
SD155
SP150
SD145
SD119
SD110
SD103
SD102
SD108
SD107
SD101
SD100
SD106
SD105
SD99
SD104
SD98
SD97
SD124
SD118
SD121
SD120
SD117
SD116
SD115
SP116
SP125
SD93
SD92
SD94
SD91
SD83
SD81
SD82
SD69
SD60
SD67
SD68
SD66
SD65
SD47
SD48
SD79
SD49
SD78
SD76
SD75
SD74
SD45
SD50
SD80
SD77
SD30
SD41
SK40
SK94
SK95
SP129
61
59
4
10m
1/200
0

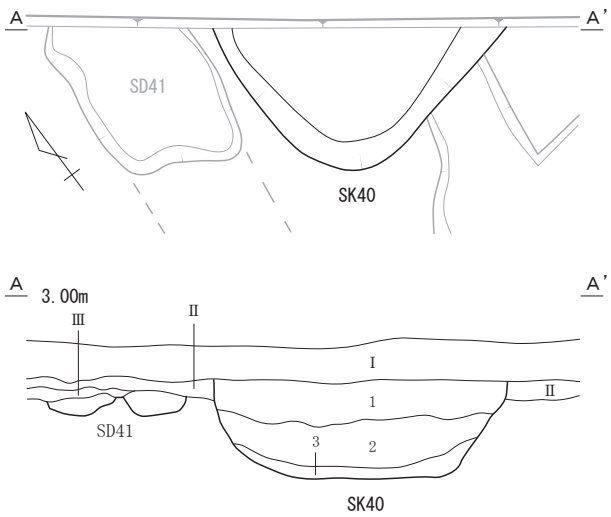
第 11 図　上層遺構図（4）


四方荒屋遺跡
四方背戸割遺跡
SD137
SD178
SD135
SD138
SD136
カクラン
K11 区
K8 区
K4 区
K12 区
K9 区
K5 区
K13 区
K10 区
K6 区
K7 区
SP128
SK125
SP126
0
10m
1/200
SD142
SD141
SD154
SD175
SD153
SD127
SD122
SD140
SD120
SD121
SD117
SD30
SD119
SD109
SD105
SD106
SD101
SD100
SD98
SD99
SD104
SD107
SD108
SD102
SD103
SD110
SD97
SP129
SP123
SP124
SAZ03
59

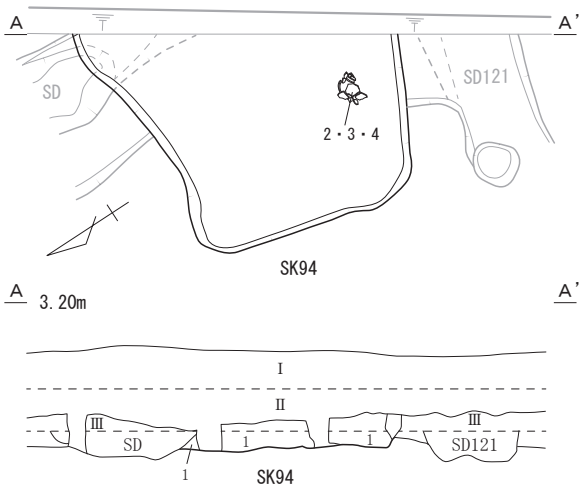
第 12 図　上層遺構図（5）


四方荒屋遺跡
試掘トレンチ
カクラン
SD134
SD133
SD132
SK130
SK131
SD177
SD30
SD176
SD41
SK40
K1 区
K2 区
K3 区
K14 区
61
6
0
10m
1/200

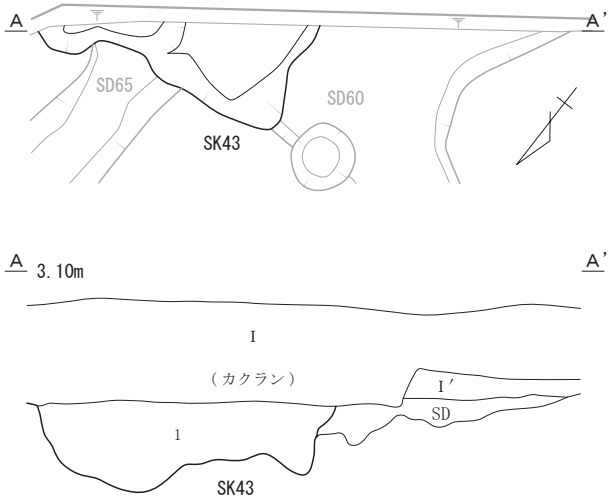
第 13 図　上層遺構図（6）



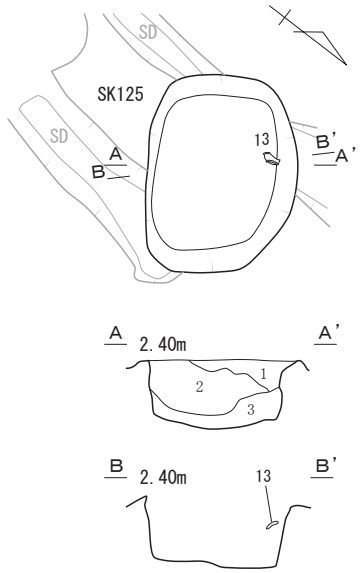
SK40
1　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ5mm以下）少量含む、地山粒多く含む
2　黒褐色土（10YR3/1）　締りやや弱い、地山ブロック（φ2cm以下）多く含む
3　黒色土（10YR2/1）　締まりやや弱い、地山ブロック（φ1cm以下）少量含む



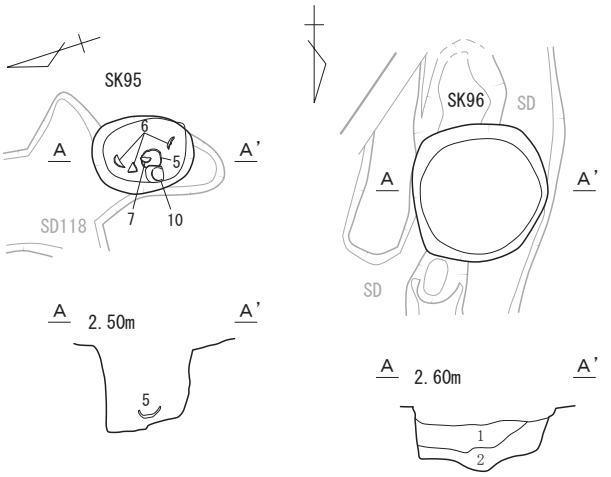
SK94
1　黒褐色土（10YR3/1）　地山ブロック（φ1cm以下）多く含む



SK43
1　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む



SK125
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）　締りあり、地山粒少量含む
2　褐灰色土（10YR5/1）　やや粘質、締りやや弱い、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
3　黒褐色土（10YR3/1）　やや粘質、締りやや弱い、地山粒多く含む



SK96
1　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山粒少量含む
2　黒色土（10YR2/1）　締りあり、地山ブロック（φ1cm以下）やや多く含む

0　2m
1/40

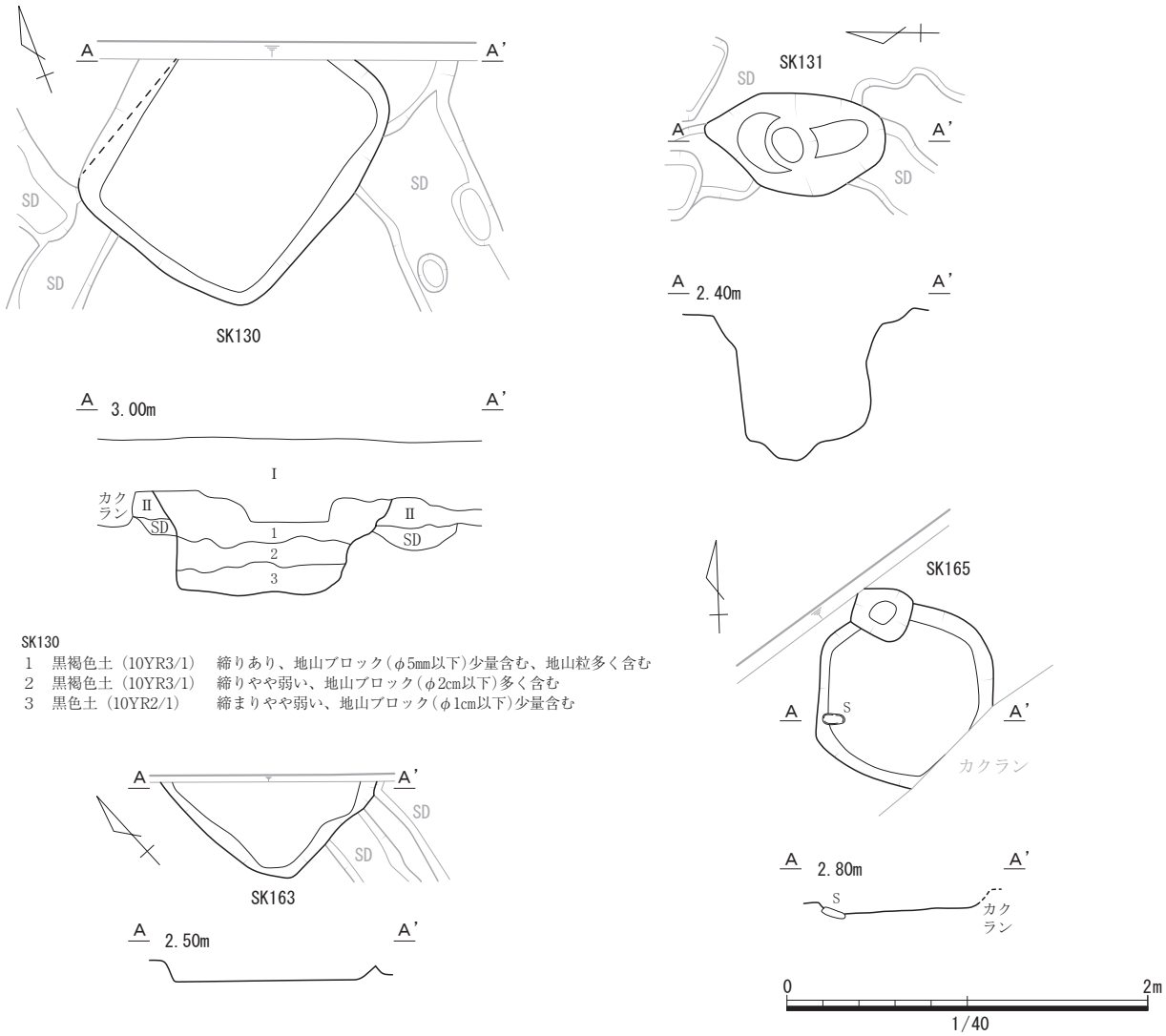
第 14 図　土坑遺構図（1）

り合いにより近世畑跡に先行する。覆土に炭化物が多く含まれたことから、放射性炭素年代測定を実施し、calAD678 ～ calAD873 の年代が示された（第４章）。土坑内からは土師器埦がまとまって出土した（5 ～ 10）。土坑中央の底面付近には灯明皿として使用された 5 が正位で出土した。10 は覆土上層､7 は覆土中層から出土し､6 は覆土上層と中層で接合した。このほかに土師器甕（11）､鉄製品（12）が出土した。土坑の時期は平安時代である。

SK96（第 14 図）　四方荒屋遺跡の Q13･R13 グリッドに位置し、SK94 の北に隣接する。東西 0.70m、南北 0.73m の隅丸方形だが、やや不整形である。深さは 34 ㎝である。切り合いにより近世畑跡に先行するが、出土遺物がなく、時期は不明である。

SK125（第 14 図、巻頭 3･図版 5）　四方荒屋遺跡の N8 グリッド、K6 区内に位置する。長軸 1.04m、短軸 0.78m の隅丸長方形で、長軸はＮ -52°－Ｅを示す。深さは 37 ㎝である。地山塊を多く含む土で埋没した後の覆土上層（1 層）から白磁碗（13）が出土した。近世畑跡と重複するが、新旧は判別できなかった。出土遺物から平安時代の土坑と考えられる。

SK130（第 15 図、図版 5）　四方荒屋遺跡の P2・P3 グリッドに位置する。東西 1.54m、南北 1.23m の隅丸長方形で、長軸はＮ -58°－Ｅを示す。深さは 55 ㎝、黒色土の上に地山塊を多く含む黒褐色



SK130
1　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ5mm以下）少量含む、地山粒多く含む
2　黒褐色土（10YR3/1）　締りやや弱い、地山ブロック（φ2cm以下）多く含む
3　黒色土（10YR2/1）　締まりやや弱い、地山ブロック（φ1cm以下）少量含む

第 15 図　土坑遺構図（2）

土が堆積する。出土遺物はない。切り合いにより近世畑跡に後出する。

SK131（第 15 図、図版 5）　四方荒屋遺跡の Q3 グリッドに位置する。南北 1.00m、東西 0.57m の不整楕円形で、長軸はＮ -1°－Ｗを示す。中央がピット状に深くなり、深さは 83 cmである。出土遺物はない。近世畑跡と重複するが、新旧は判別できなかった。時期は不明である。

SK163（第 15 図）　四方背戸割遺跡の H12 グリッドに位置する。南北 0.88m 以上、東西 0.77m 以上の隅丸長方形と推定され、長軸はＮ -88°－Ｅを示す。深さは 12 cm、黒色土の上に地山塊を多く含む黒褐色土が堆積する。土師器埦（27）が出土したが、切り合いにより近世畑跡に後出する。

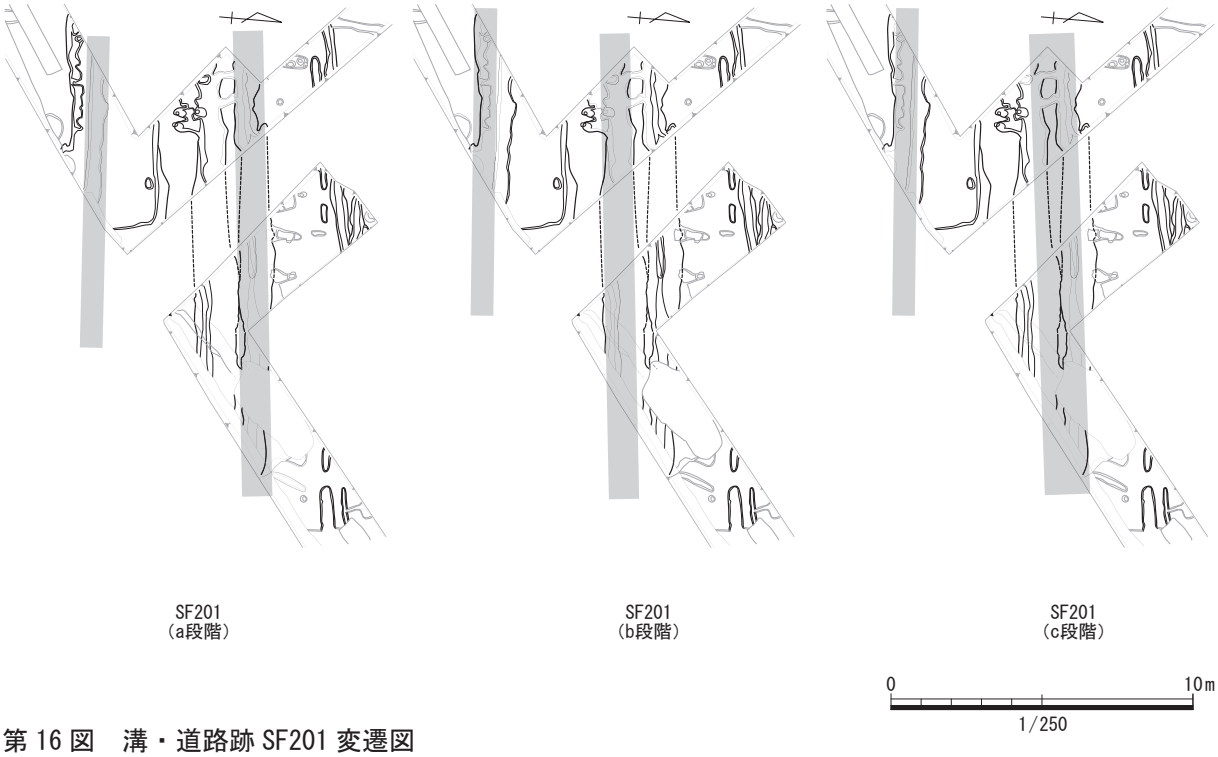
SK165（第 15 図）　四方背戸割遺跡の E26 グリッドに位置する。直径 0.95m の不整円形である。深さは 10 cmである。弥生土器片数点と棒状礫が出土したが、時期は不明である。

(2) 溝・道路跡

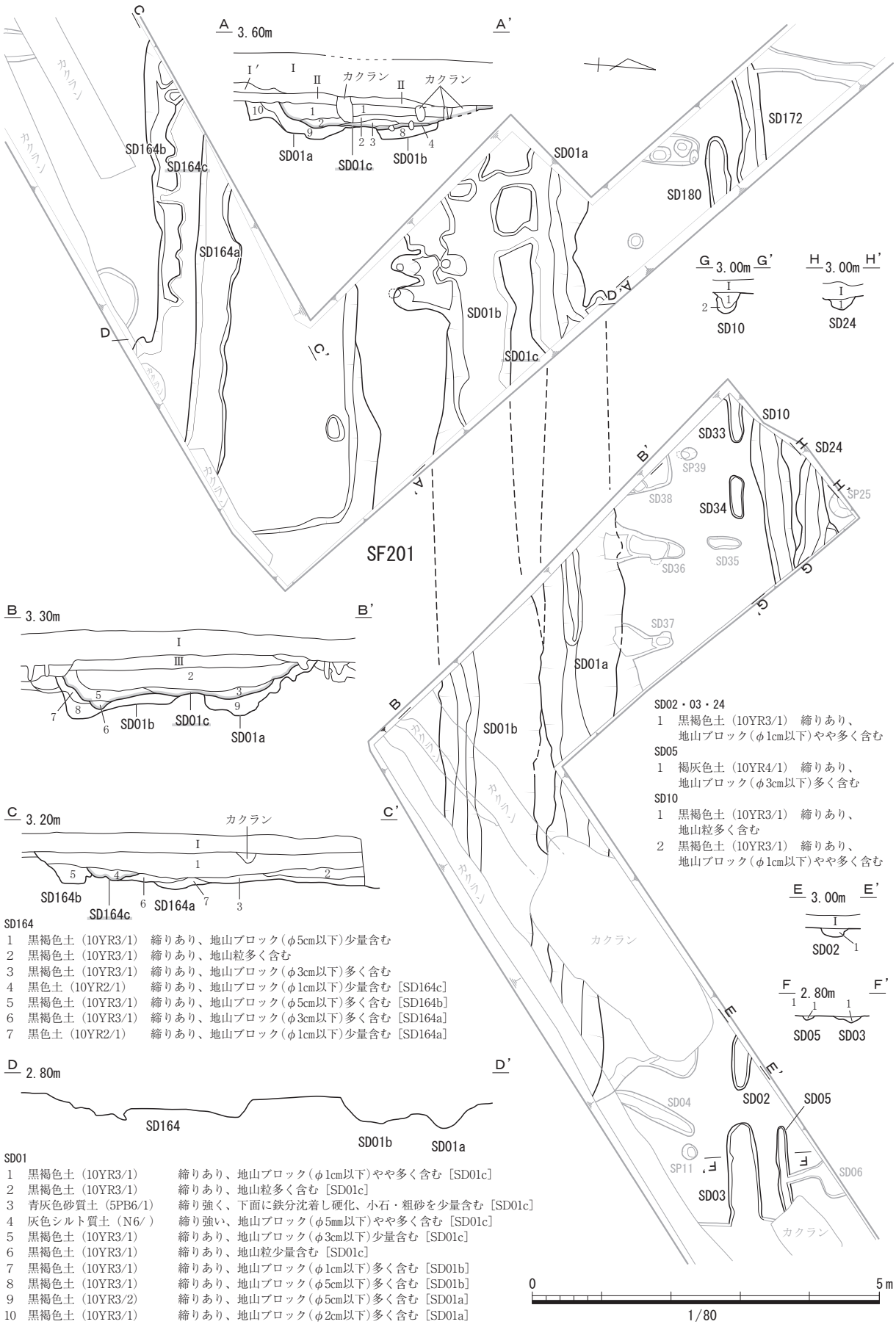
畑跡の畝溝を除き、16 条の溝を検出した。SD01・164 は他の溝に比べ規模が大きく、東西に並走する溝である。この北側に SD02・03・05・10・24・33・34・172・180 の小溝が同様に並走する。これらが道路跡になる可能性から、SF201 と総称した。また SF201 の東側には南北に並走する SD09・14 があり、同じく道路跡の可能性があり SF202 と称した。

SF201（第 16・17 図、図版 7）　四方背戸割遺跡 F24・F25・G24 グリッド付近に位置する。SD01 を北側溝、SD164 を南側溝とする道路跡の可能性がある。両側溝ともに掘り直しによってａ～ｃの三段階があり、それぞれが対応すると考えられる。

SD01 は方位Ｎ -83°－Ｅを示す。壁断面 A･B から規模を推定すると、a 段階は上幅 1.6m、下幅 0.3m、最大深 0.8m の薬研堀状である。b 段階は上幅 1.3m、下幅 1.0m、最大深 0.84m の断面逆台形で、部分的に底面南側が溝状に深くなる。c 段階は上幅 2.6m、下幅 1.5m、深さ 0.6m で、断面は幅の広い逆台形となる。底面標高は a 段階が 1.8 ～ 2.0m、b 段階が 1.7 ～ 2.1m、c 段階が 2.1m である。a・



第 16 図　溝・道路跡 SF201 変遷図



SD02・03・24
1　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ1cm以下）やや多く含む

SD05
1　褐灰色土（10YR4/1）　締りあり、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む

SD10
1　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山粒多く含む
2　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ1cm以下）やや多く含む

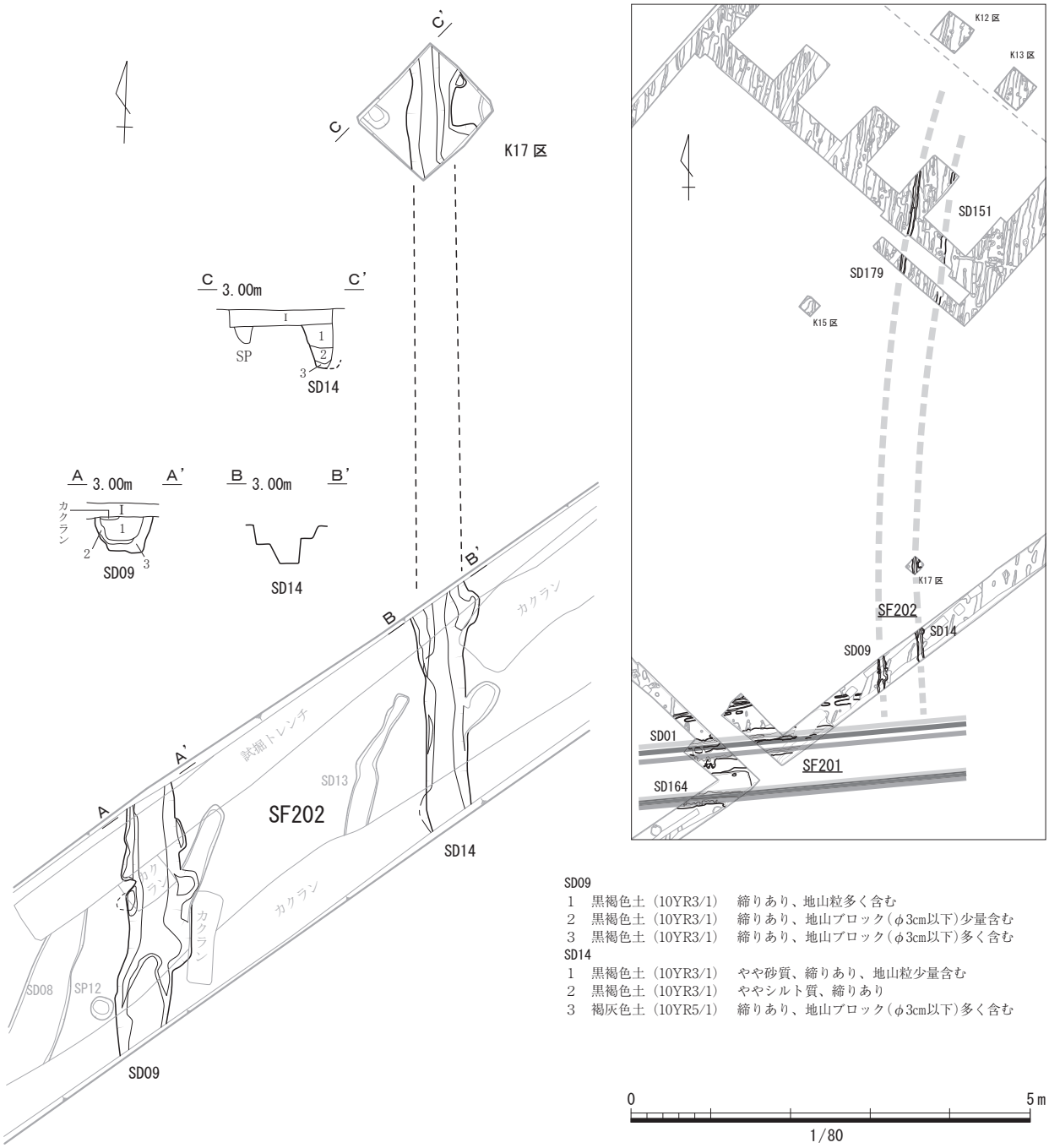
SD164
1　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ5cm以下）少量含む
2　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山粒多く含む
3　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
4　黒色土（10YR2/1）　締りあり、地山ブロック（φ1cm以下）少量含む［SD164c］
5　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ5cm以下）多く含む［SD164b］
6　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む［SD164a］
7　黒色土（10YR2/1）　締りあり、地山ブロック（φ1cm以下）少量含む［SD164a］

SD01
1　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ1cm以下）やや多く含む［SD01c］
2　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山粒多く含む［SD01c］
3　青灰色砂質土（5PB6/1）　締り強く、下面に鉄分沈着し硬化、小石・粗砂を少量含む［SD01c］
4　灰色シルト質土（N6/）　締り強い、地山ブロック（φ5mm以下）やや多く含む［SD01c］
5　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ3cm以下）少量含む［SD01c］
6　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山粒少量含む［SD01c］
7　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ1cm以下）多く含む［SD01b］
8　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ5cm以下）多く含む［SD01b］
9　黒褐色土（10YR3/2）　締りあり、地山ブロック（φ5cm以下）多く含む［SD01a］
10　黒褐色土（10YR3/1）　締りあり、地山ブロック（φ2cm以下）多く含む［SD01a］

第 17 図　溝・道路跡 SF201 遺構図

b 段階は地山塊を含む黒褐色土で埋め戻されているが、c 段階は底面にシルト～粗砂が緩いレンズ状に堆積し、流水の痕跡を残す。遺物は弥生土器甕（49）、土師器甕（14）、珠洲甕（15）・擂鉢（16）、肥前皿ないし鉢（17）、土製品塼（18）・土錘（19）が出土している。

SD164 は方位N -86° - E を示す。SD01 より規模は小さく、壁断面 C から推定すると、a 段階は上幅 0.7m、下幅 0.4m、最大深 0.52m の断面逆台形である。b 段階は上幅 0.6m、下幅 0.2m、最大深 0.46m の断面逆台形である。c 段階は上幅 0.6m、下幅 0.3m、最大深 0.4m の断面逆台形である。底面の標高は a 段階が 2.1 ～ 2.2m、b 段階が 2.2m、c 段階が 2.4m である。a 段階上部と b 段階は、地山塊を多



第 18 図　溝・道路跡 SF202 遺構図

く含む黒褐色土で埋め戻される。c 段階以後は SD164 全体が浅い土坑状に削られ、本来の道路面は消失している（1 ～ 3 層）。遺物は弥生土器壺・甕、中世土師器皿（22）、珠洲擂鉢（23）、陶器碗（24）が出土した。

SF201 は出土遺物から中世の道路跡と考えられる。推定される SD01・164 間の路面幅は a 段階が 4.4m、b・c 段階は 3.8m である。北側溝の SD01 は南側溝 SD164 より規模が大きく、c 段階では流水の痕跡もあることから、用水路としての機能も想定される。また SD01 の北側には約 2m の距離を置いて小規模な溝が 3 条並走しており（SD10・24・33 など）、SD01・164 の三段階の変遷に連動する可能性もあるが、深さ 5 ～ 10 cmと浅く、詳細は明らかではない。試掘調査 11 号トレンチでは、この小規模な溝の延長線上に位置する東西溝から珠洲の甕（71）が出土している。

SF202（第 18 図、図版 7）　四方背戸割遺跡の I23・J22 グリッドに位置する。SD09・14 を側溝とする道路跡の可能性がある。SD09 は西側溝で方位はＮ -1°　－Ｗを示す。規模は概ね上幅 69 cm、下幅 33 cm、深さ 50 cmで、断面形状は逆台形である。底面の標高は 1.9 ～ 2.1m である。断面観察により、地山塊を多く含む土が堆積した後、上幅 54 cm、下幅 26 cm、深さ 28 cmの規模で掘り直しがあり、最終的に地山塊を含まない黒褐色土で埋没する。遺物は土師器甕、珠洲甕（20）が出土した。SD14 は東側溝で方位はＮ -3°　－Ｗを示す。規模は概ね上幅 50 cm、下幅 23 cm、深さ 58 cmで、断面形状は逆台形である。底面の標高は 1.8 ～ 2.0m で、SD09 より 10 cmほど低い。K17 区で北への延伸が確認された。K17 区の断面では SD09 と同様に地山塊を多く含む土が堆積した後、地山塊を含まない黒褐色土で埋没していたが、掘り直しの有無は判断できなかった。遺物は珠洲甕（21）が出土した。SD09・14 間の路面幅は約 3.16m である。SF202 は方位を緩やかに東へ変えながら北へ延び、I14・15 グリッドにおいて西側溝 SD179 が検出された。SD179 は方位Ｎ -10°　-E を示す。規模は概ね上幅 50 cm、下幅 28 cm、深さ 33 cmで、断面形状は逆台形である。底面の標高は 1.9 ～ 2.2m である。地山塊を多く含む土が堆積した後、上幅 41 cm、下幅 21 cm、深さ 20 cmの規模で掘り直しがあり、最終的に地山塊を含まない黒褐色土で埋没する。遺物は出土しなかった。東側溝の北側延長は SD09・14 と路面幅が同一と仮定すると SD151 となる可能性があるが、SD151 は深さ 10 cm以下で規模が小さく、確定できない。SF202 は北側の延伸が不明瞭となるが、中世の道路跡と考えられる。

SD30・178（第 6 図）　SD30・178 は近代～現代の溝で、付け替え前の用水路の跡と考えられる。SD30 は概ね幅 65 cm、深さ 30 cmの規模で、直線的に延びる。北東端は検出されなかった。黒色土や地山塊、細砂などが互層になって堆積する。遺物は弥生土器甕、土師器甕（28）、須恵器壺・甕、越中瀬戸皿（33）が出土した。SD178 は概ね幅 45 cm、深さ 20 cmで SD30 と同様の覆土である。

(3) 柵跡

SA203（第 6 図）　四方荒屋遺跡 P13・P14 グリッドに位置する。5 基のピットが SD30 と 60 cmほど距離を置いて並列している。方位はＮ -24°－Ｅを示す。径 25 cm、深さ 10 ～ 23 cmのピットである。出土遺物はないが、並列する位置関係から SD30 と同時期の柵跡と考えられる。

(4) 畑跡（図版 3 ～ 7）

調査区の広い範囲で小溝群を検出した。小溝群は、周辺の調査事例から近世の畑跡に伴う畝溝と考えられるが、一部の畝溝は中世まで遡る可能性もある。畝溝は主軸方位の違いから、東西畝と南北畝に大別される。東西畝と南北畝の新旧は平面観察では難しく、P11 グリッド付近の E･F 断面、Q5 グリッドのＬ断面で確認した限りは、南北畝が新しいと判断された。

東西畝（第 19 図）　東西方向の畝溝は、四方荒屋遺跡の東部から四方背戸割遺跡の北東部にかけて検出された。南北方向の畝溝に比べ検出範囲が狭く、畝溝の重複はほとんどみられない。東西の畝溝は大きく 5 区画に分けられ、隣接する区画間（区画 3・4 間を除く）には、通路と考えられる幅 5m 前後の空間が存在する。東西の畝溝の覆土は地山塊を多く含む褐灰色土である。

区画 1 は東西幅 15m、南北幅 8m 以上である。方位はN −82°－Eを示し、他の区画と異なる。畝溝は概ね幅 25 ～ 60 ㎝、深さ 5 ～ 10 ㎝、途中で途切れることなく整然と並ぶ。畝幅は 50 ～ 60 ㎝となる。

区画 2 は東西幅 25m 以上、南北幅 20m ほどである。畝溝は概ね幅 15 ～ 60 ㎝、深さ 5 ～ 15 ㎝で、途中で短く途切れるものもある。方位はN −76°－Wを示す。畝幅 40 ～ 80 ㎝が主体で、ばらつきがある。

区画 3 は東西幅 20m 以上、南北 15m ほどである。区画 4 とは南端が重なることから、前後関係が想定される。畝溝は概ね幅 25 ～ 50 ㎝、深さ 5 ～ 15 ㎝、途中で短く途切れるものもがある。方位はN −75°－Wを示す。畝幅は 50 ～ 80 ㎝で、ばらつきがある。

区画 4 は東西幅 25m 以上、南北幅 17m ほどである。畝溝は概ね幅 15 ～ 55 ㎝、深さ 5 ～ 15 ㎝、南側ほど短く途切れる傾向にある。方位はN −83°－Wを示す。畝幅は 60 ～ 80 ㎝である。

区画 5 は東西幅 15m 以上、南北幅 20m ほどである。畝溝は概ね幅 15 ～ 70 ㎝、深さ 5 ～ 15 ㎝、短く途切れるものが多い。方位はN −81°－Wを示す。畝幅は 50 ～ 80 ㎝が主体である。

遺物は弥生土器壺（60）、土師器甕（29・30）があるが、近世のものは出土しなかった。

南北畝（第 20 図）　南北方向の畝溝は調査区のほぼ全域に広がり、とくに四方背戸割遺跡の北東部から四方荒屋遺跡にかけて集中する。南北の畝溝は大きく 6 区画に分けられ、区画 1 は畝溝の重複が著しい中心部分、区画 2 ～ 6 は区画 1 の周囲にあって畝溝の重複が少ない部分である。南北の畝溝の覆土は、東西の畝溝と比較して黒色が強く、含まれる地山塊が小さく、量も少ない点が異なっている。

区画 1 は東西幅 50m、南北幅 75m 以上の広い区画で、北へ延びている。区画 1 の畝溝は、その重複状況から、少なくとも 3 段階の変遷が見込まれる。畝溝の多くは概ね幅 15 ～ 80 ㎝、深さ 5 ～ 15 ㎝である。方位はN −1 ～ 15°－Eを示す。畝幅は 60 ～ 80 ㎝と想定されるが、重複が著しいため不確実である。一部の畝溝には底面に連続する小ピットを伴うものがあり、区画 1 の北東側・南西側の 2 ヶ所に分布する（第 20 図）。小ピットは概ね径 15 ～ 25 ㎝、深さ 5 ～ 10 ㎝である。小ピットは、畝立てなどの際に使用した農具の痕跡と考えられ、高畝にするためにより深く掘り込んだものと考えられる。このうち北東側のものは畝幅が 1.4 ～ 2.2m と、通常の畝幅より広くなっている。

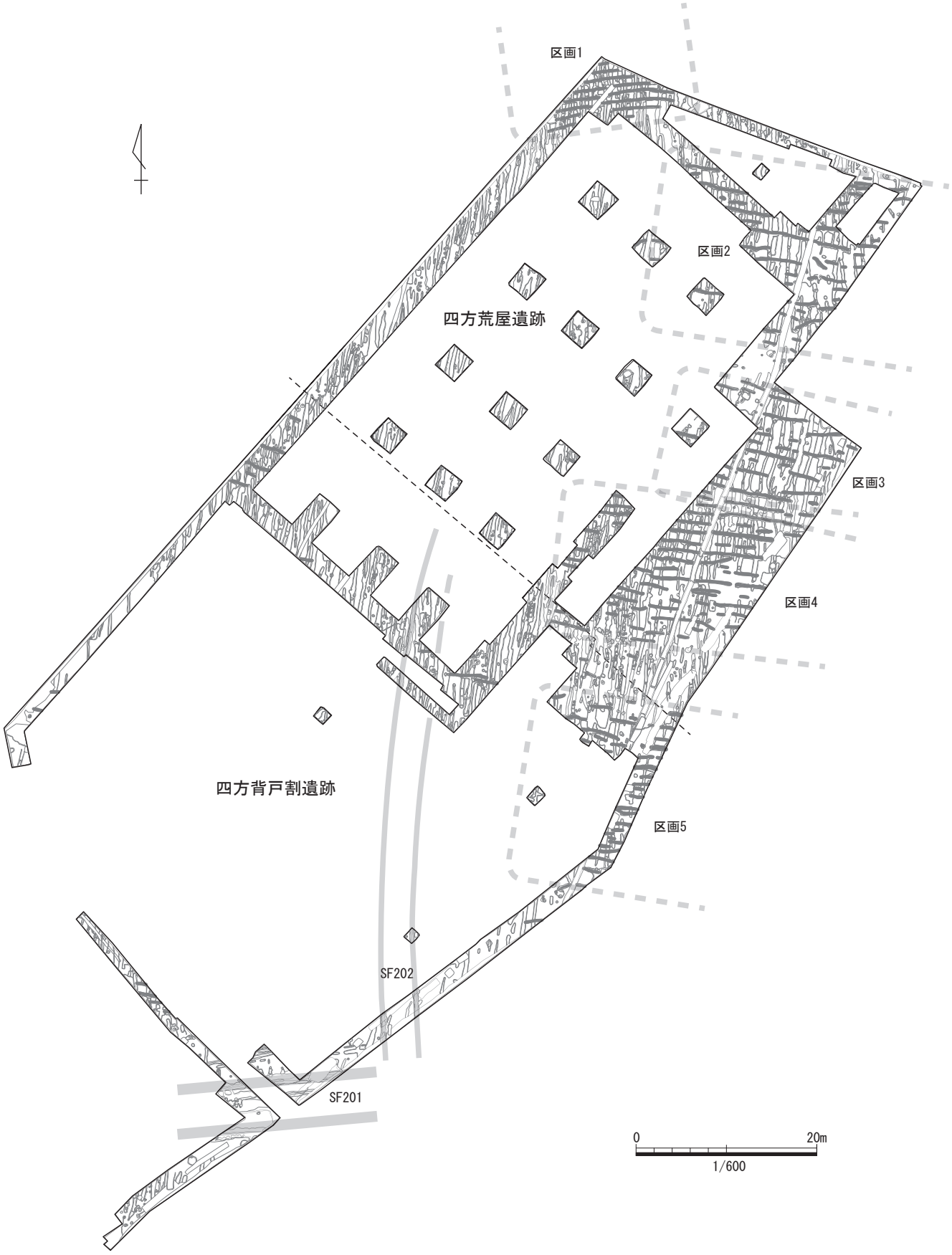
区画 2 は東西幅 25m 以上、南北幅 50m 以上である。畝溝は概ね幅 20 ～ 70 ㎝、深さ 5 ～ 10 ㎝である。畝溝は緩やかな蛇行がみられるが、主軸となる方位はN −5°－Eである。畝溝の重複は、北側や南側で部分的にみられる。畝幅は 50 ～ 70 ㎝である。

区画 3 は東西幅 15m 以上、南北幅 30m ほどである。畝溝は概ね幅 20 ～ 60 ㎝、深さ 5 ～ 10 ㎝である。短く途切れるものが多く、畝溝の重複はほとんどみられない。主軸方位はN −10°－Eである。畝幅は 50 ～ 80 ㎝である。

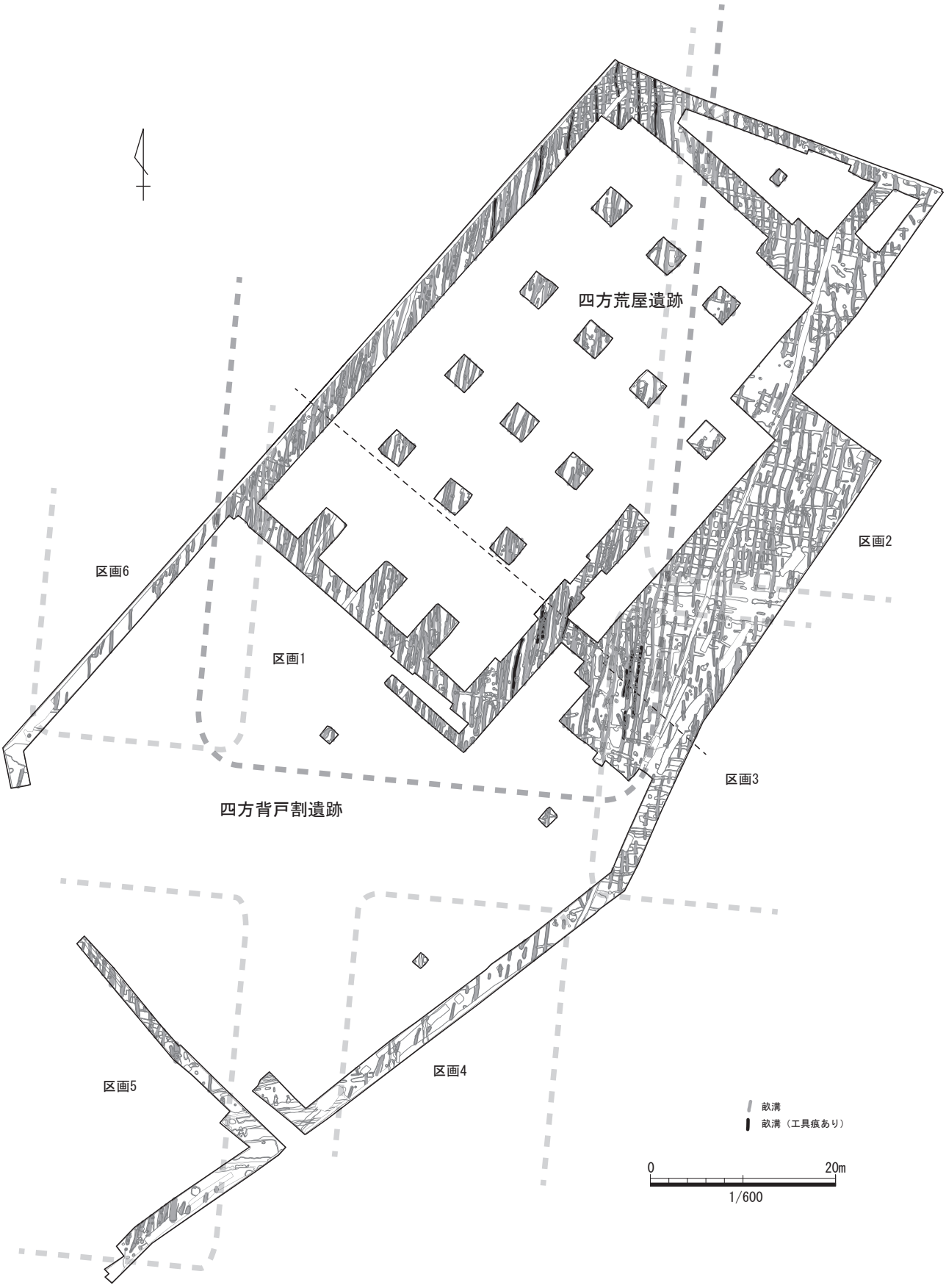
区画 4 は東西幅 20m、南北幅 20m 以上である。畝溝は概ね幅 15 ～ 50 ㎝、深さ 5 ～ 10 ㎝である。短く途切れるものが多く、畝溝の重複はみられない。主軸方位はN −8°－E、畝幅は 60 ～ 70 ㎝である。

区画 5 は東西幅 15m 以上、南北幅 30m 以上である。畝溝は概ね幅 25 ～ 80 ㎝、深さ 5 ～ 15 ㎝である。畝溝がやや密になっており、2 段階の変遷が想定される。主軸方位はN −5°－Eである。畝幅は 50 ～ 70 ㎝と想定される。

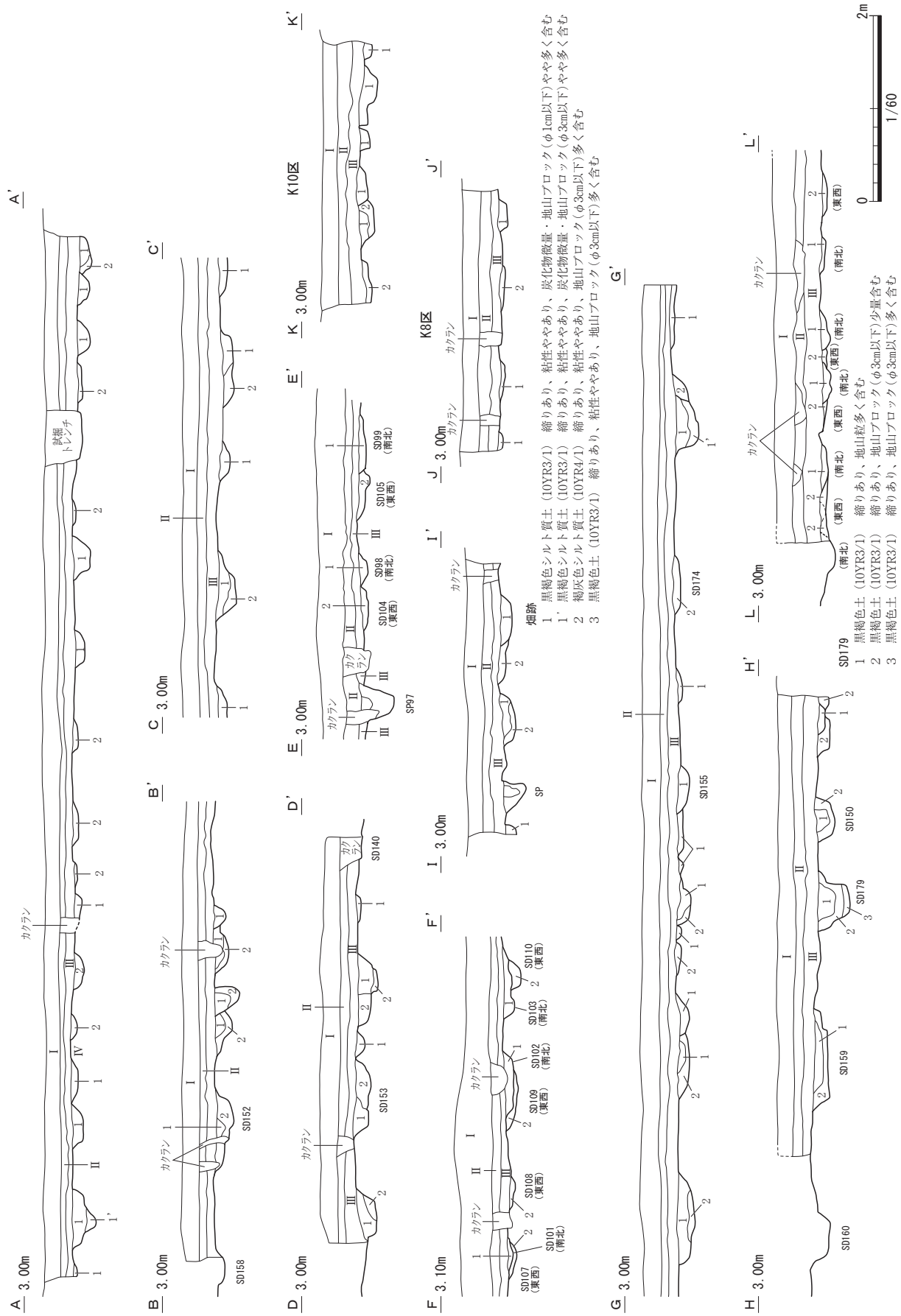
区画 6 は東西幅 20m、南北幅 25m 以上である。畝溝は概ね幅 15 ～ 40 ㎝、深さ 5 ～ 10 ㎝である。短く途切れるものが多く、畝溝の重複はみられない。主軸方位はN −2°－E、畝幅は 50 ～ 80 ㎝である。



第 19 図　畑跡（東西畝）



第 20 図　畑跡（南北畝）


A' A 3.00m
試掘トレンチ
カクラン
B' B 3.00m
SD158
SD152
C' C 3.00m
D' D 3.00m
SD153
SD140
E' E 3.00m
SD104（東西）
SD98（南北）
SD105（東西）
SD99（南北）
SP97
K' K 3.00m
K10区
F' F 3.10m
SD107（東西）
SD101（南北）
SD108（東西）
SD109（東西）
SD102（南北）
SD103（南北）
SD110（東西）
I' I 3.00m
SP
J' J 3.00m
K8区
G' G 3.00m
SD155
SD174
H' H 3.00m
SD160
SD159
SD150
SD179
L' L 3.00m
0 1/60 2m
畑跡
1 黒褐色シルト質土（10YR3/1）締りあり、粘性ややあり、炭化物微量・地山ブロック（φ1cm以下）やや多く含む
1' 黒褐色シルト質土（10YR3/1）締りあり、粘性ややあり、炭化物微量・地山ブロック（φ3cm以下）やや多く含む
2 褐灰色シルト質土（10YR4/1）締りあり、粘性ややあり、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
3 黒褐色土（10YR3/1）締りあり、粘性ややあり、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む
SD179
1 黒褐色土（10YR3/1）締りあり、地山粒多く含む
2 黒褐色土（10YR3/1）締りあり、地山ブロック（φ3cm以下）少量含む
3 黒褐色土（10YR3/1）締りあり、地山ブロック（φ3cm以下）多く含む

第 21 図　畑跡断面図（1）

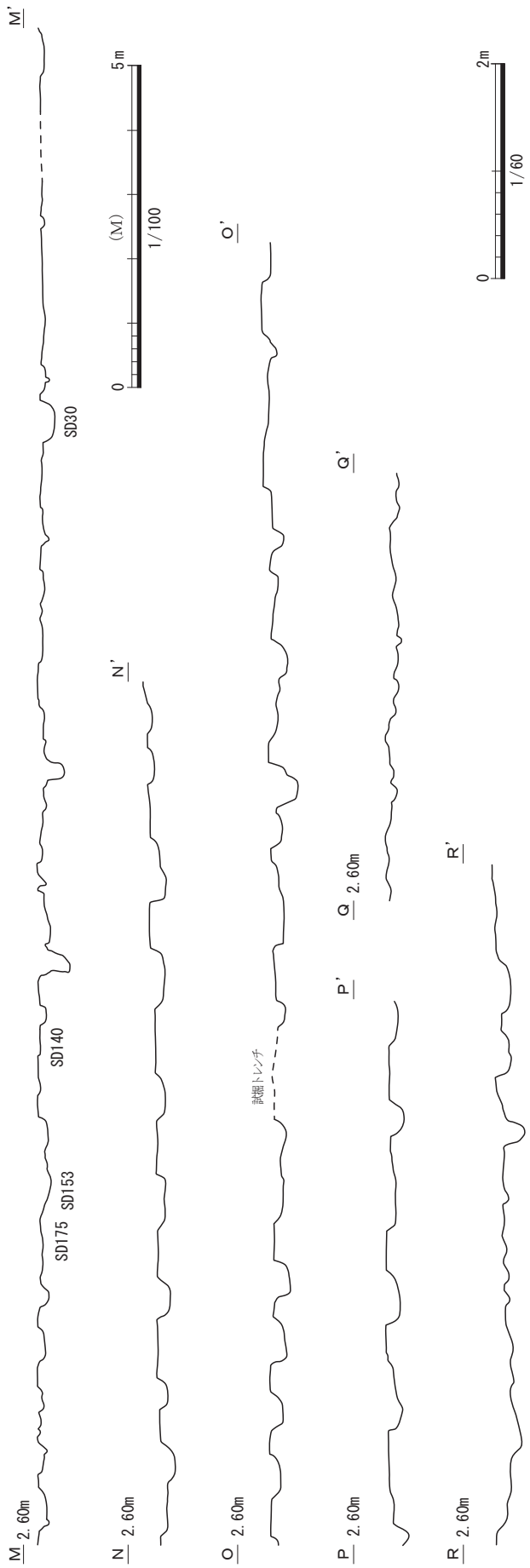
遺物は弥生土器壺（52・53）・甕（43・50・53）、土師器甕（31）、塼（37）があるが、近世のものは出土しなかった。

(5) ピット

ピットは四方背戸割遺跡の南側から西側を除き、調査区に広く分布するが、畑跡の畝溝底面の凹凸との区別が難しいものも多く、正確な数は明らかにできない。集中的に分布するのは、K15、N14、R7、R10、S5 グリッドの 5 ヶ所があり、掘立柱建物や柵などが存在した可能性がある。ピットのほとんどは径 20 ～ 30 cmの円形で、深さ 15 ～ 20 cmのものが多い。遺物は下層の弥生土器の混入がごく少量あるが、古代以降のものは出土しなかった。

(6) 地震痕

四方背戸割遺跡において、地震に伴う噴砂を検出した（第5・6図、図版10）。東西方向に延びるものが多い。下層調査の断面観察によれば、噴砂は基本層序Ⅵ層より下から噴き出し、Ⅳ層を越えていた。噴砂の下部は粗砂、上部は黄白色の細砂が主体となるが、細砂の一部では引き裂かれたⅣ・Ⅴ層とが混入する場所もあった。またⅤ層中にⅤ層ないしⅣ層が二次的に落ち込んだ帯状の変色部分もあり、地割れによる落ち込みと判断された。地割れと噴砂は切り合いがあり、噴砂が新しい。噴砂は近世の畑跡より新しく、近代以降の溝 SD30 より古いこと、平成 17 年度調査(四方背戸割遺跡)で指摘された新旧のある噴砂の灰褐色の噴砂に類似することから、1858 年の飛越地震によるものと考えられる。噴砂に先行する地割れを引き起こした地震は、平成 17 年度調査で指摘された 1586 年の天正地震、あるいは平成 25 年度調査(四方荒屋遺跡)で指摘された 863 年の貞観地震が候補になる。



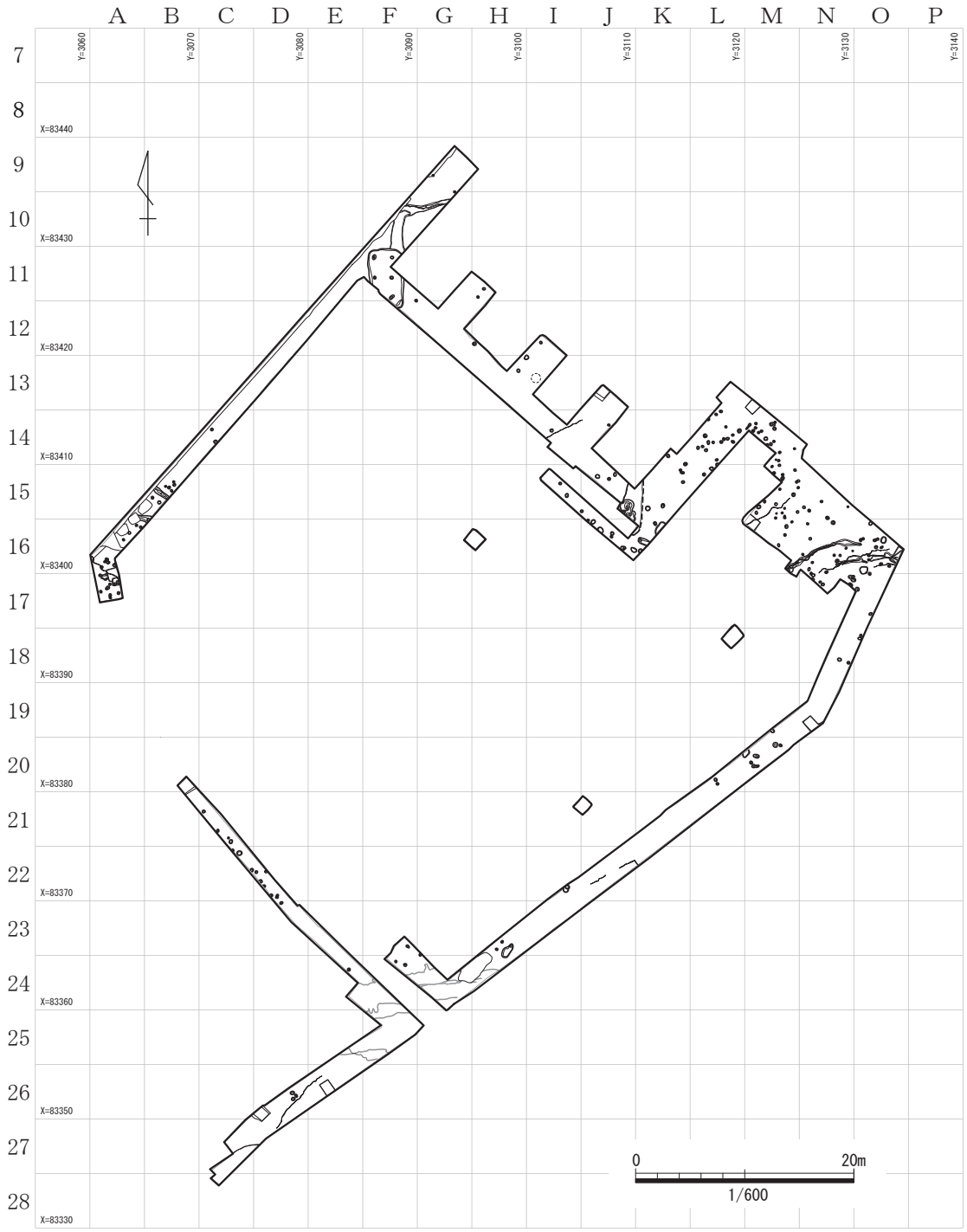
第 22 図　畑跡断面図（2）

２　下層遺構（四方背戸割遺跡）

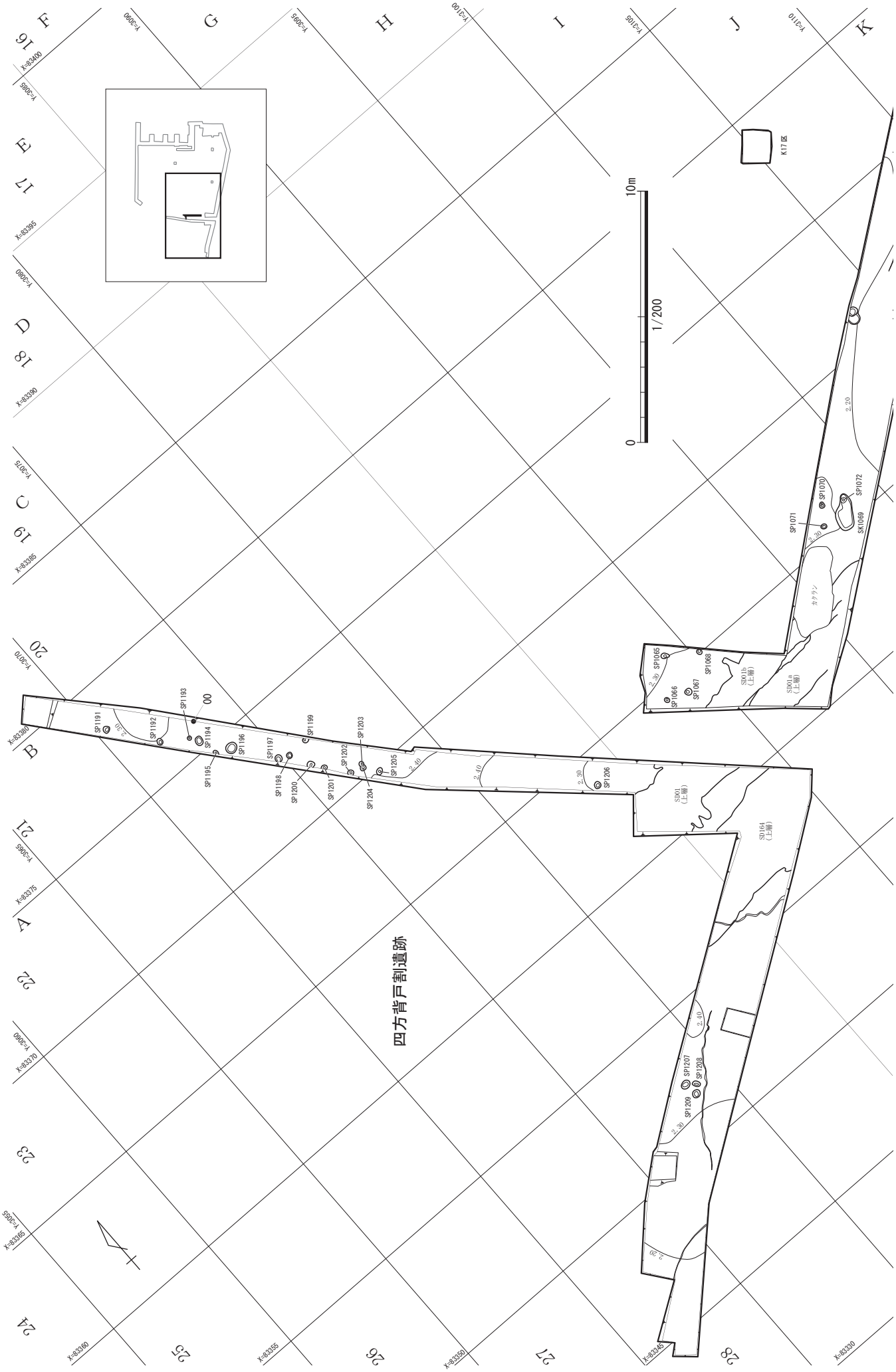
四方背戸割遺跡で実施した下層調査では、土坑２基、溝２条、ピット205基、その他不明遺構３基を検出した（第23～26図）。遺構の分布は、下層の地山Ⅴ層が低くなる北東側にややまとまる傾向があるものの、全体に散在的で、南側はとくに少ない。下層の遺構番号は４桁（1001～）で表記した。

(1) 土坑

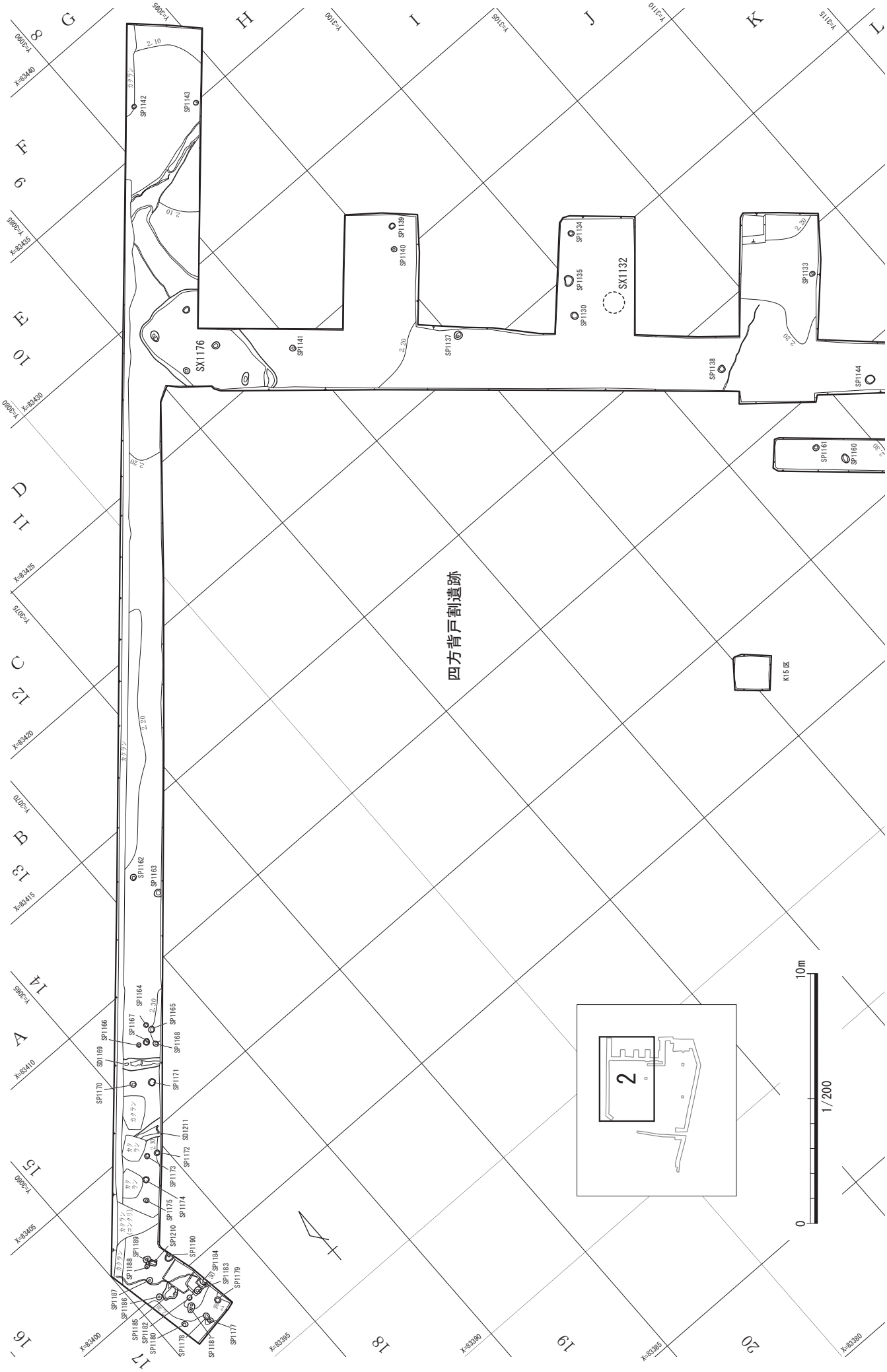
SK1001（第27図、巻頭３･図版９）　K15～J16グリッドに位置する。東西1.40～2.08m、南北5.1m以上の長楕円形と推定され、北側は調査区外へ延びる。東辺は上層遺構SD152に削平され不明瞭であっ



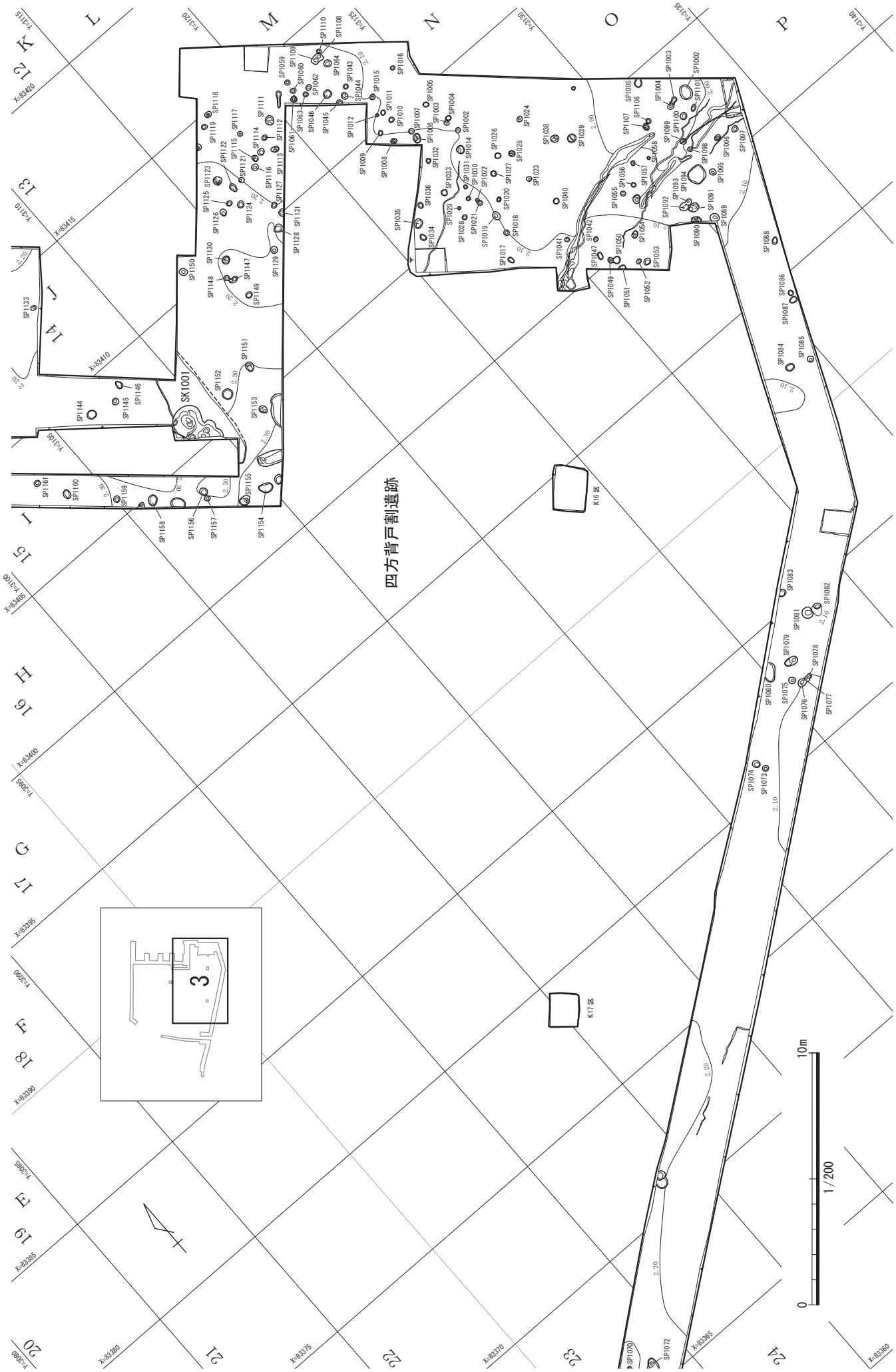
第23図　下層調査区全体図


四方背戸割遺跡
1/200
0
10m
K17 区
SD01a (上層)
SD01b (上層)
SD01 (上層)
SD104 (上層)
SK069
カクラン
SP1191
SP1192
SP1193
SP1194
SP1195
SP1196
SP1197
SP1198
SP1199
SP1200
SP1201
SP1202
SP1203
SP1204
SP1205
SP1206
SP1207
SP1208
SP1209
SP1065
SP1066
SP1067
SP1068
SP1069
SP1070
SP1071
SP1072
2.20
2.30
2.40

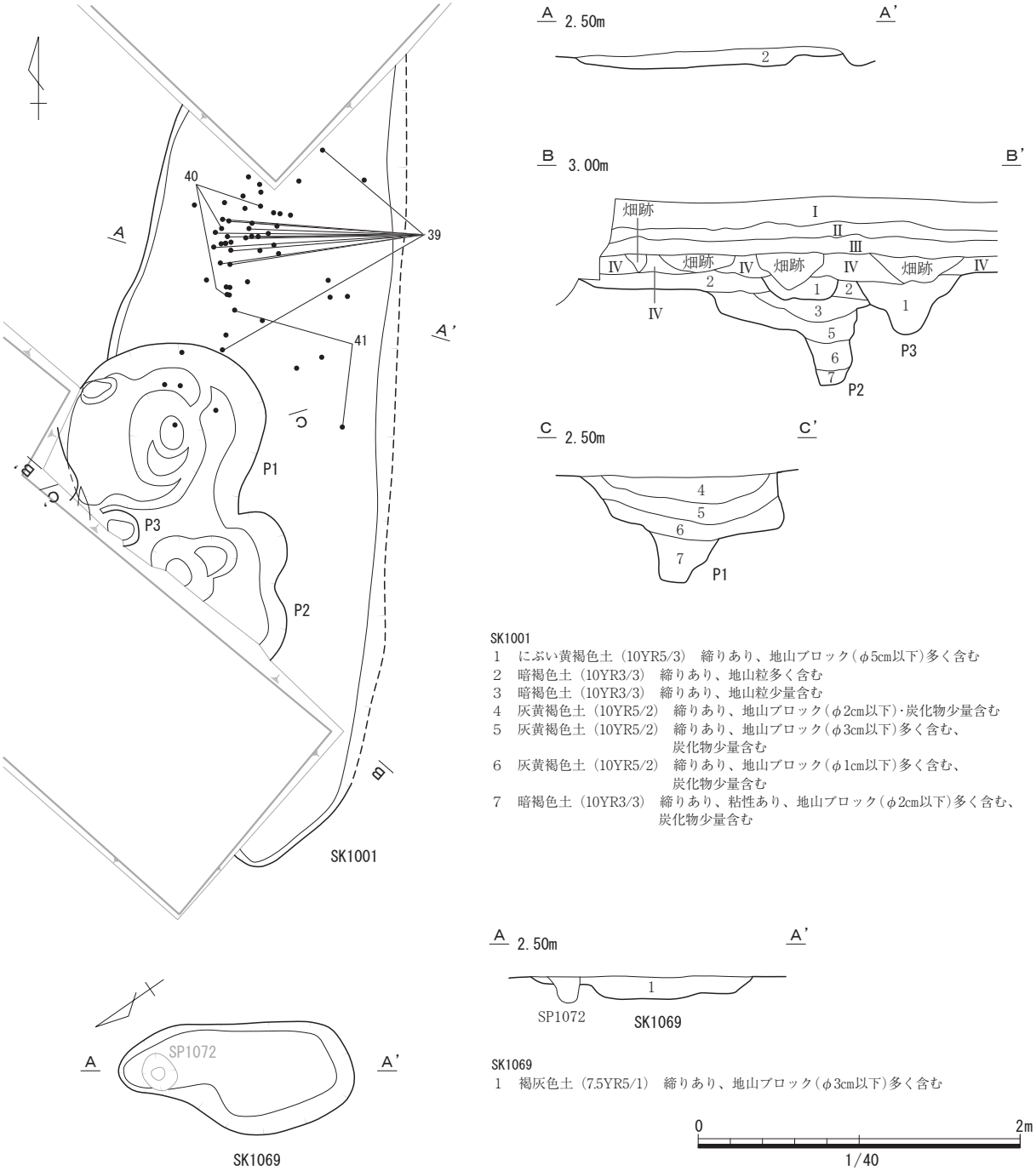
第 24 図　下層遺構図（1）


四方背戸割遺跡
SX1176
SX1132
SP1142
SP1143
SP1141
SP1139
SP1140
SP1137
SP1134
SP1135
SP1130
SP1133
SP1138
SP1144
SP1161
SP1160
SP1162
SP1163
SP1164
SP1165
SP1166
SP1167
SP1168
SD1169
SP1170
SP1171
SD1211
SP1172
SP1173
SP1174
SP1175
SP1210
SP1190
SP1189
SP1188
SP1184
SP1183
SP1179
SP1187
SP1186
SP1185
SP1182
SP1180
SP1178
SP1181
SP1177
K15区
10m
1/200
0
2

第 25 図　下層遺構図（2）



第 26 図　下層遺構図（3）



第 27 図　下層土坑遺構図

た。長軸方位はＮ-4°－Ｅを示す。深さは５～８㎝で、底面は平坦である。南西側には、径 1.07 ～ 1.28m、深さ 0.76m の P1、径 0.99m、深さ 0.66m の P2 がある。P3 は径 0.62m、深さ 0.41m で、P2 の埋没後に掘り込まれている。覆土は２層（暗褐色土）が主体で、P1・P2 内は地山塊を含む。P1 内の４層に炭化物が含まれたことから、放射性炭素年代測定を実施し、calBC198 ～ calBC52 の年代を得た（第４章）。遺物は北側に集中し、弥生土器の甕（39 ～ 42）が出土した。40 は P1 出土の破片も接合した。

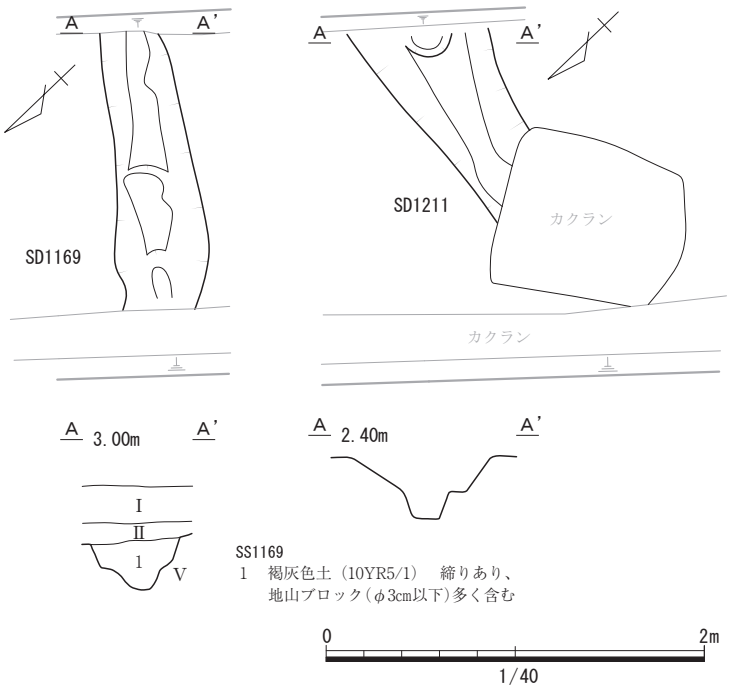
SK1069（第 27 図）　H23･H24 グリッドに位置する。長軸 1.45m、短軸 0.70m の不整楕円形を呈する。長軸方位はＮ-31°－Ｅを示す。深さは 13 ㎝である。SP1072 と重複し、SK1069 が古い。出土遺物は

ない。

(2) 溝

SD1169（第 28 図、図版 9）　B15 グリッドに位置する。規模は上幅 50 ㎝、下幅 9 ㎝である。深さ 17 ～ 39 ㎝で、北西に向かって深くなる。主軸方位はＮ -52°－Ｗを示す。出土遺物はない。

SD1211（第 28 図）　A15 ～ B16 グリッドに位置する。規模は上幅 43 ～ 63 ㎝、下幅 12 ～ 29 ㎝である。深さは 18 ㎝で、南東端はピット状に 15 ㎝深くなる。主軸方位はＮ -83°－Ｗを示す。出土遺物はない。



第 28 図　下層溝遺構図

(3) ピット

ピットは約 205 基検出された。北東側と西側でやや密に分布し、北側と南側は散漫な分布である。ピットは概ね径 15 ～ 30 ㎝、深さ 5 ～ 25 ㎝である。覆土は大半が灰褐色土の単層で、2 層になる場合は下層に地山塊が多く混入する傾向がある。出土遺物はなかった。

(4) その他不明遺構

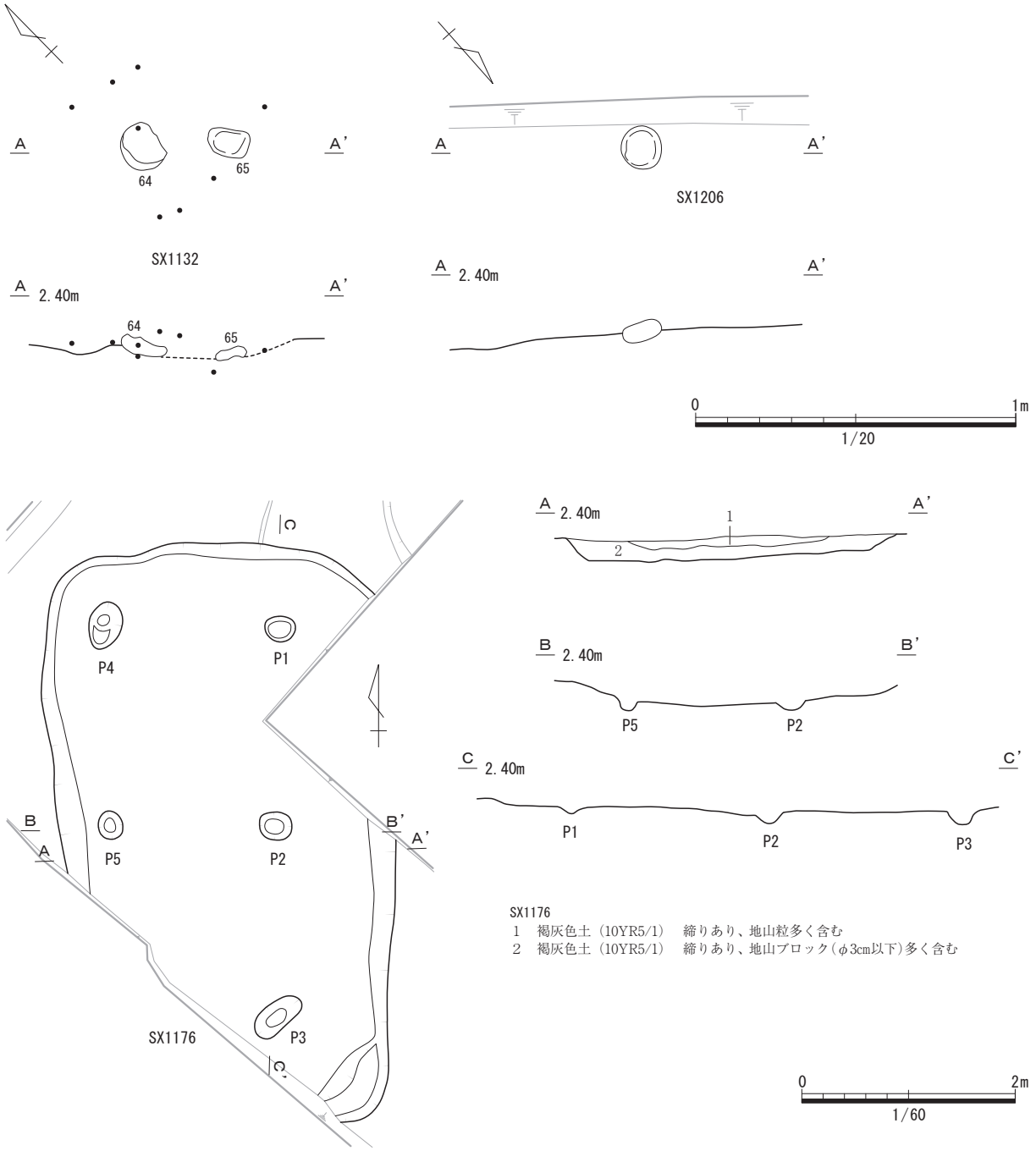
SX1132（第 29 図、巻頭 3・図版 10）　I13 グリッドに位置する。径 50 ～ 60 ㎝の範囲内に打製石斧の未成品 2 点（64・65）と剥片 8 点が出土したものである。Ｖ層上面で検出したが、掘り込みはもたず、未成品の周囲に剥片が点在した状況であった。同一の石材であるが、接合はしなかった。

SX1176（第 29 図、図版 10）　F11･F12 グリッドに位置する。南北 5.4m、東西 3.1m の隅丸長方形で、長軸はＮ -1°－Ｅを示す。壁面はしっかりとした掘り込みではなく、緩やかな傾斜である。深さは 20 ㎝、底面は平坦である。底面には推定 6 基のピットが等間隔で並ぶが、長軸の中心は床の中心から西へずれた位置にある。ピットは径 26 ～ 51 ㎝の円形ないし楕円形で、深さは 9 ～ 21 ㎝である。ピット間の距離は南北で 1.80 ～ 1.92m、東西で 1.54 ～ 1.66m である。建物跡の可能性も考えられたが、焼土や炭化物、遺物もまったく出土しなかった。

SX1206（第 29 図、図版 10）　M14 グリッドに位置する。Ｖ層上面で偏平礫が単独で出土したものである。Ｖ層に礫は含まれないので、人為的に残されたものと考えられる。周囲にはピットが多数あり、関連性が窺われる。

第４節　遺　物

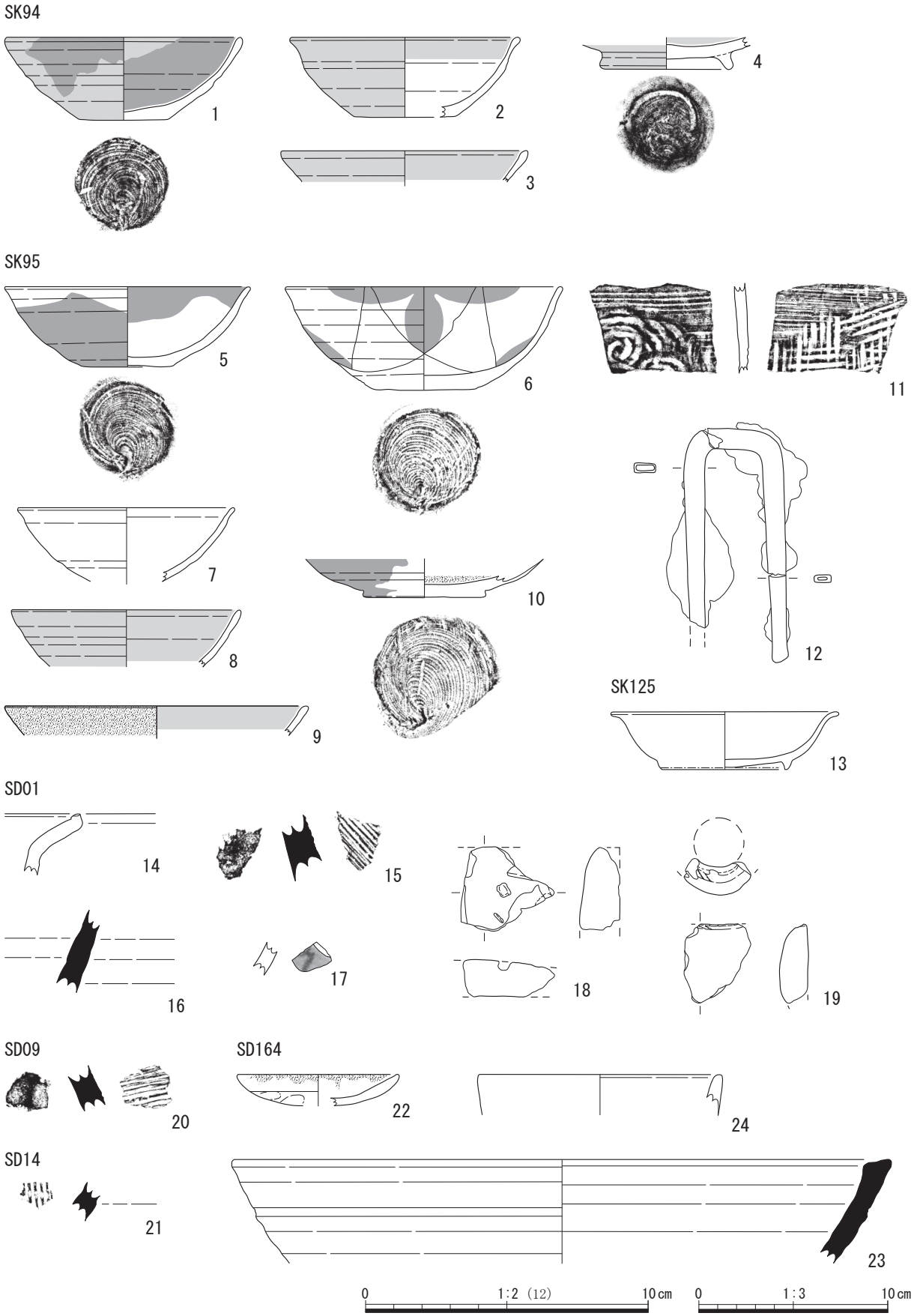
出土遺物は上層（古墳時代～近世）、下層（弥生時代）、試掘調査に分けられる。上層に混入した弥生土器などは、下層遺物として扱った。



第 29 図　下層不明遺構遺構図

1　上層出土遺物

古墳時代の土師器、古代の土師器・須恵器・白磁、中世の土師器・珠洲、近世の瀬戸美濃・越中瀬戸、鉄製品、塼、土錘などがある。上層遺構に伴う遺物は、四方荒屋遺跡の土坑 SK94・95・125、四方背戸割遺跡の溝 SD01・164（SF201）、SD09・14（SF202）がある。その他は畑跡の畝溝に混入したものが大部分を占めるが、総じて遺物の出土量は少ない。古代の土師器は坏・埦・甕があり、四方荒屋遺跡に多い。SK94・95 の埦は回転糸切り底で、赤彩を施したもの、煤・油煙が付着したものがある。須恵器は非常に少なく、坏・壺・甕が数点出土した。中世の土師器皿や珠洲は、四方背戸割遺跡



第 30 図　上層出土遺物図（1）

のSD01・164（SF201）、SD09・14（SF202）で出土しただけである。

SK94（第30図、巻頭4・図版11）　1～3は土師器埦である。口径12.0～13.0㎝、回転糸切り底である。内外面に赤彩が施され、1は内外面に煤が付着する。4は高台の付く皿で、回転糸切り底である。内外面赤彩を施す。9世紀後半のものである。

SK95（第30図、巻頭4・図版11）　5～10は土師器埦である。口径11.4～16.0㎝、回転糸切り底である。8・9は内外面赤彩を施す。5・6・10は口縁部に打ち欠きがあり、煤や油煙が付着することから、灯明皿として利用されている。9も油煙の付着がある。6には割れて破片化した後に付着した煤もみられる。9世紀後半ものである。11はロクロ成形の土師器甕で下半はタタキと当て具痕が残る。12は逆U字状に折れ曲がる鉄製品である。断面は長方形で中空である。

SK125（第30図、図版11）　13は白磁碗である。口径11.8㎝、器高6.4㎝と浅く、内湾する体部から外反する口縁部へ立ち上がる。太宰府編年の椀Ⅵ類（11c後半～12c前半）に該当する。

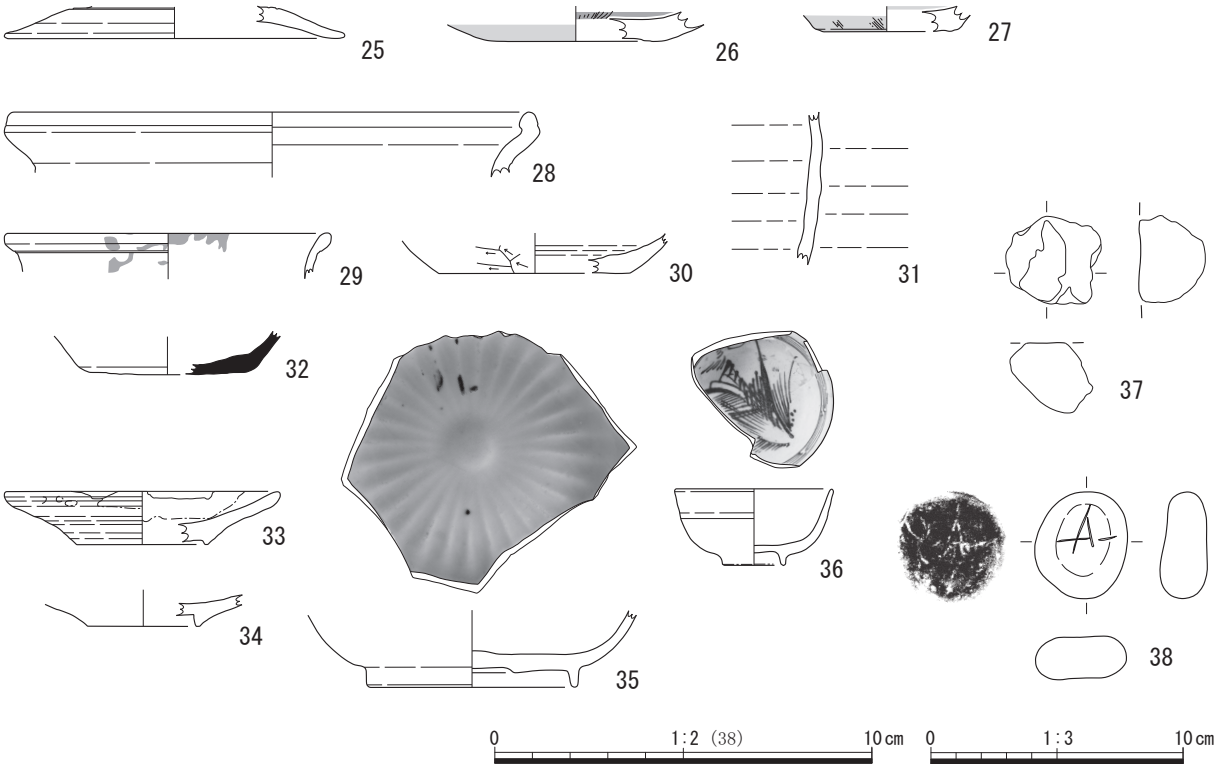
SD01（第30図、図版12）　14はロクロ成形の土師器甕である。口縁端部を折り込み、内側に稜をもつ。9世紀後半のもの。15は珠洲の甕、16は鉢である。17は肥前染付の皿ないし鉢である。18は板状の土製品で、塼とみられる。還元炎焼成である。19は土錘の端部である。

SD09（第30図、図版12）　20は珠洲の甕の細片である。

SD14（第30図、図版12）　21は珠洲の甕の細片で、胎土に海綿骨針を含む。

SD164（第30図、図版12）　22は中世土師器の皿で、口径8.5㎝の非ロクロ成形。内外面に油煙が付着する。15世紀のもの。23は珠洲の鉢である。内湾気味の体部から口縁端部は三角形状に収める。外面のロクロ痕が強く、胎土に海綿骨針を含む。珠洲Ⅳ期（1280～1370年代）のもの。24は陶器椀で、口縁部が垂直になる筒形碗か。口径12.9㎝で、内外面に錆釉を施す。

その他



第31図　上層出土遺物図（2）

その他（第 31 図、図版 11・12）　畑跡の畝溝やピット、確認面で出土した遺物である。

25 は土師器高坏の脚部で、古墳時代のものか。上部に浅い沈線がある。26 は内黒の土師器坏で、回転糸切り底である。外面は赤彩を施し、胎土には海綿骨針が含まれる。9 世紀前半のもの。27 は土師器埦で、内外面に赤彩を施す。9 世紀後半のもの。28 ～ 31 はロクロ成形の土師器甕で、9 世紀代のものである。28 は口縁端部を屈曲させ、外面に浅い沈線を施す。29 は肥厚する口縁部の内外面に煤が付着する。30 は胴部から底部にかけての外面を手持ちヘラケズリする。

32 は須恵器の坏 A で、底部はヘラ切り。9 世紀代のものである。

33・34 は越中瀬戸である。33 は削り出し高台の皿で、体部から口縁部へ直線的に立ち上がる。口縁部内外面に灰釉を施す内禿皿である。34 は付高台の皿である。

35 は肥前の中皿（膾皿）で、底部は蛇ノ目凹形高台である。鎬のある菊花形で、見込みに上絵の痕跡が残る。36 は瀬戸美濃の碗である。コバルト色の染付で、雷文・山水文を描く。近代のもの。

37 は板状の土製品で、塼とみられる。酸化炎焼成である。

38 は径 3.0 ㎝未満の小石で、表面に線刻がある。

２　下層出土遺物

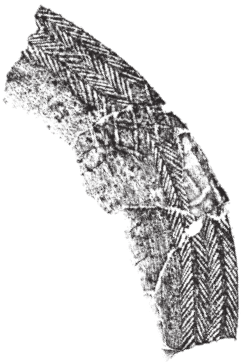
弥生時代中期の土坑 SK1001 出土土器のほか、確認面や上層遺構へ混入したものを下層出土遺物として扱った。弥生時代中期から後期の土器、石器がある（第 32・33 図）。

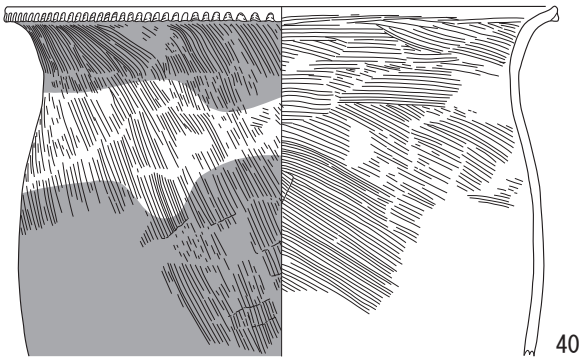
SK1001（第 32 図、巻頭 4・図版 13）　39 ～ 42 は弥生時代中期の土器である。39 は器高 24.35 ㎝の甕である。器面はハケ調整後に内面はナデ消し、口縁端部にキザミ、口縁部内面には羽状文を施す。内外面に煤付着。40 は口径 21.8 ㎝の甕で、器面はハケ調整後に内面胴部下半はナデ。口縁端部外面にキザミを施す。外面に煤が付着。41・42 は甕の底部で、42 は小型である。41 は胎土に海綿骨針を多く含む。

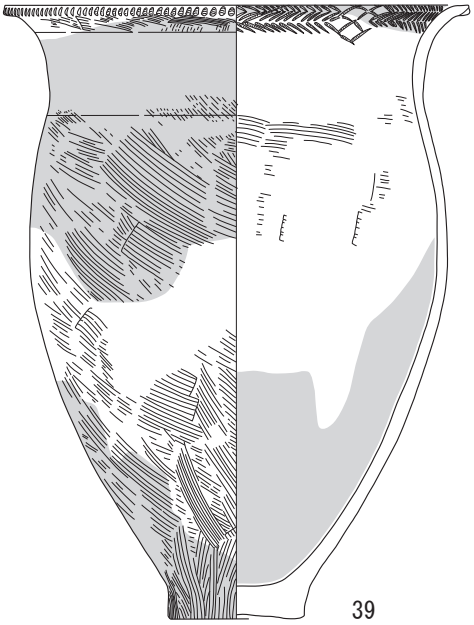
その他（第 32・33 図、図版 11～14）　SK1001 以外のものである。43 ～ 60 は弥生土器である。43 は甕で、口径 16.0 ㎝、内外面ハケ調整である。外面に煤が付着する。44 はハケ調整の甕の底部である。
45 は胴部がソロバン玉状になる壺である。胴部最大径下にある低い突帯にキザミを入れる。胴部上半は櫛描直線文と二枚貝の刺突による擬縄文がわずかに残る。東海地方の貝田町式土器にみられる特徴を備える。胎土に海綿骨針を含む。46 ～ 48 は面取りした口縁端部にキザミのある甕である。ハケ調整で、外面に煤が付着する。49 は口縁部内面に斜行短線文を羽状に施す甕、50 は口縁部内面羽状文の甕である。51 は端部を面取りした甕の口縁部で、外面には沈線により 2 条の直線文と連弧文を施す。52 は壺の胴部で、2 段の円形刺突文の下に沈線が三角形状に施される。53 は壺の胴部で、櫛描直線文と波状文が 2 段に施される。胎土に海綿骨針を含む。54・55 は甕の口縁部である。端部内外面にキザミ、その下に内面 2 条の沈線、外面は斜位の縄文施文後に 1 条の沈線を施す。55 は胎土に海綿骨針を含む。56 は壺の胴下半で、斜位の縄文施文後に沈線を施す。57 ～ 59 は縄文を施文した甕の胴部である。59 は内面ケズリである。57 は胎土に海綿骨針を含む。60 は壺の胴部で、沈線で直線文・連弧文を施す。51・54 ～ 60 は、多くが縄文を施文し、沈線による連弧文を施すなど、四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡の過去の調査で出土した天王山式土器（弥生時代後期前半）に類似するものである。その他は弥生時代中期の土器である。

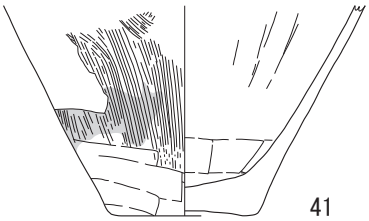
61 ～ 65 は石器・石製品である。61・62 は四方荒屋遺跡出土で、61 が平基有茎式の石鏃、62 は敲石である。63 ～ 65 は四方背戸割遺跡出土である。63 は SK1001 付近の上層で出土した敲石である。64・65 は SX1132 で出土した、打製石斧の未成品と考えられるものである。

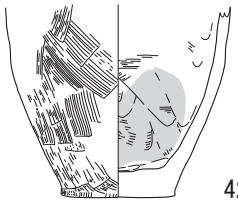
SK1001



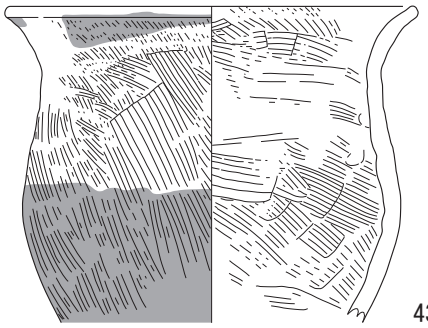


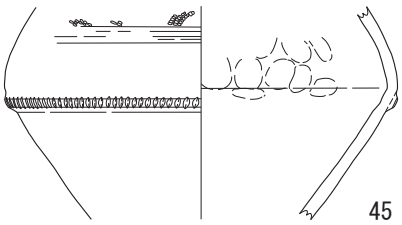


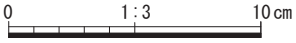




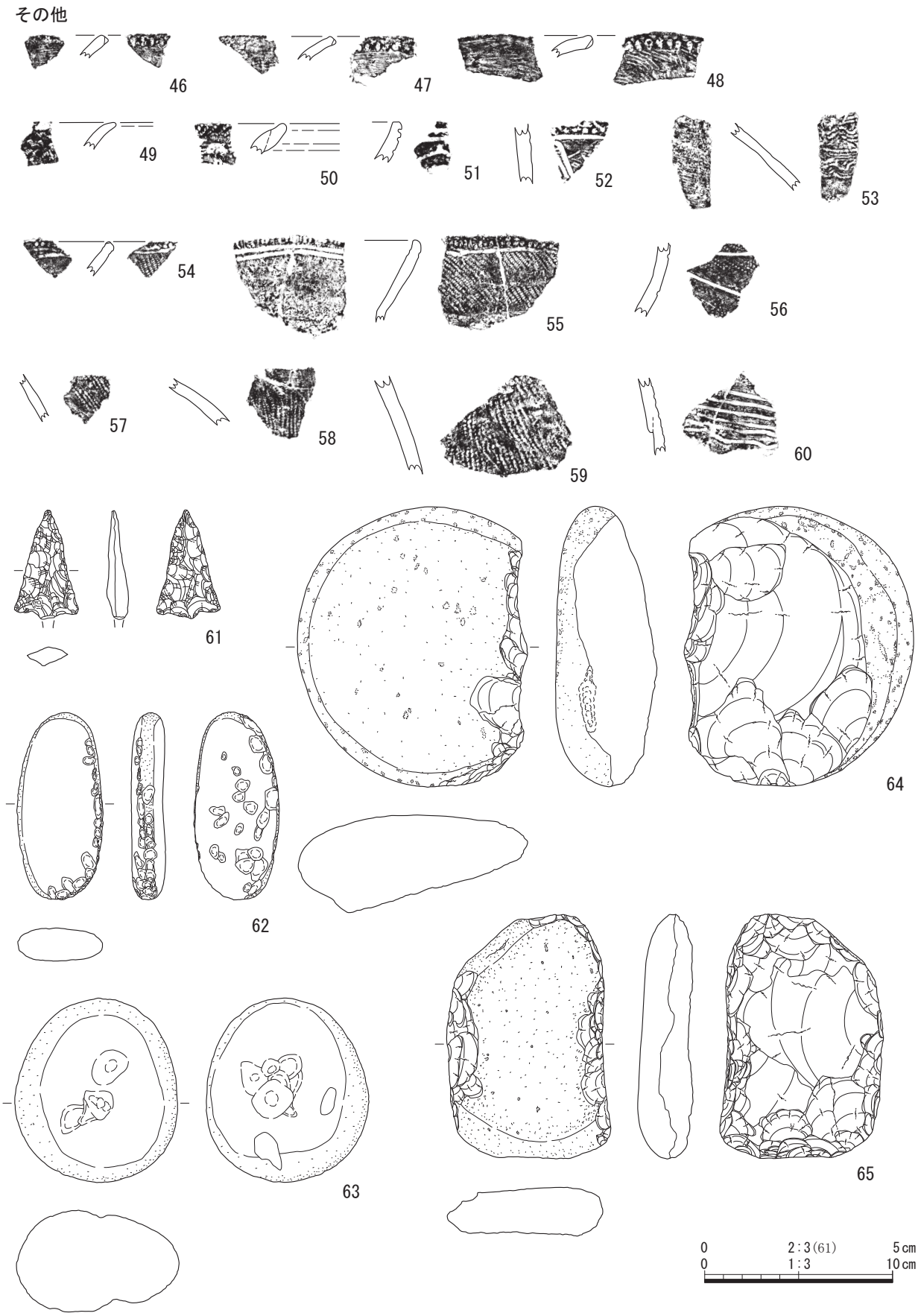
その他







第 32 図　下層出土遺物図（1）



第 33 図　下層出土遺物図（2）

３　試掘調査出土遺物

試掘トレンチ出土の遺物である（第 34 図、図版 14）。

66 ～ 68 は弥生土器である。弥生時代中期のもので、66・67 は 10 号トレンチの土器溜りから出土した（第 1 図）。66 は口径 21.4 ㎝の甕である。口縁部外面にキザミを施し、内外面ハケ調整、内面下半はハケをナデ消す。外面には煤・焦げが付着する。67 は壺の胴部で、内外面ハケ調整である。68 は壺の胴部で、櫛描直線文・波状文を施す。内面はハケ調整である。

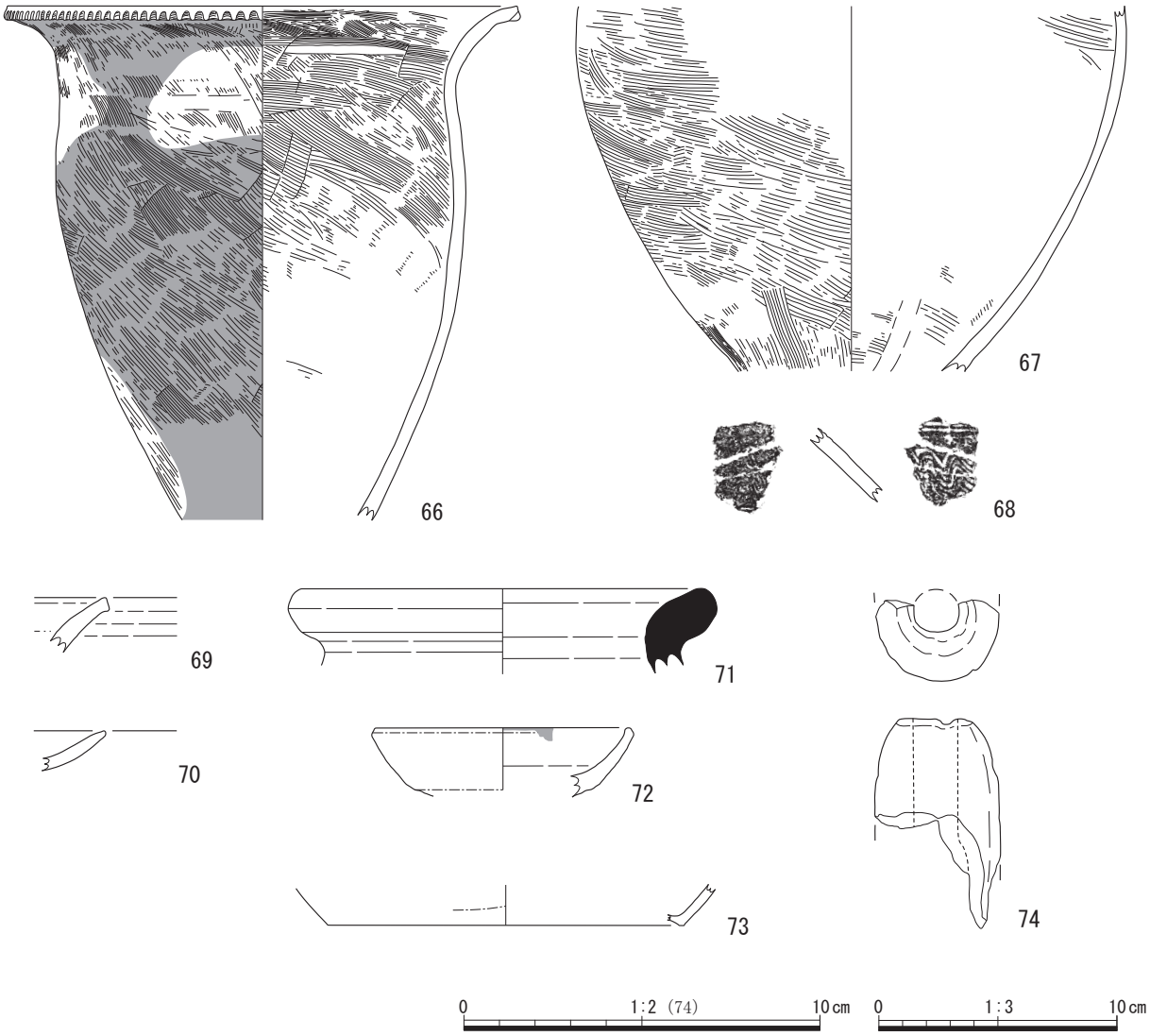
69 は古代土師器の甕で、ロクロ成形である。8 世紀代のもの。70 は中世土師器の皿である。非ロクロ成形で口縁部にヨコナデを施す。15 世紀後半から 16 世紀のもの。

71 はSF201 に近い 11 号トレンチ内の東西溝から出土した珠洲である。口径 17 ㎝の小型の甕である。珠洲Ⅳ期（1280 ～ 1370 年代）のもの。

72・73 は瀬戸美濃系の陶器である。72 は口縁部内面に煤が付着する灯明皿である。内外面灰釉で口唇部は鉄釉を施す。73 は土瓶とみられる底部である。内外面に灰釉がかかる。

74 は土錘である。孔径 1.25 ㎝。（常深）

試掘トレンチ



第 34 図　試掘調査出土遺物図

第１表　遺物観察表(1)

番号	出土遺構 層位	種別	器種等	法 量(cm) ()は推定値、〈〉は残存値 口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	胎 土	焼成	色調 (外面)	成・整形	文様ほか、備考
1	SK94	土師器	埦	(12.4)	4.8	5.40	密、角閃石・白色粒	良好	5YR5/4 にぶい赤褐	ロクロ成形、底部右回転糸切り	内外面赤彩、口縁部内外面に煤付着
2	SK94	土師器	埦	(12.0)	(5.3)	4.25	密、海綿骨針微量	良好	5YR6/6 橙	ロクロ成形、底部右回転糸切り	外面と口縁部内面赤彩
3	SK94	土師器	埦	(13.0)	－	〈1.90〉	密	良好	5YR5/8 明赤褐	ロクロ成形	口縁部内外面赤彩
4	SK94	土師器	皿	－	6.5	〈1.70〉	密、石英・白色粒	良好	5YR6/8 橙	ロクロ成形、底部右回転糸切り	底部内外面赤彩
5	SK95	土師器	埦 (灯明皿)	12.8	4.9	4.25	密、石英・角閃石	良好	7.5YR8/4 浅黄橙	ロクロ成形、底部右回転糸切り	外面と口縁部内面に煤付着
6	SK95	土師器	埦 (灯明皿)	(14.5)	5.5	5.50	密、石英・白色粒	良好	5YR7/6 橙	ロクロ成形、底部右回転糸切り	口縁部内外面に煤付着、体部の煤は割れた後の付着
7	SK95	土師器	埦	(11.4)	－	〈3.90〉	密、石英・角閃石・白色粒	良好	5YR6/6 橙	ロクロ成形	
8	SK95	土師器	埦	(12.0)	－	〈3.00〉	密、石英・白色粒	良好	5YR6/6 橙	ロクロ成形	口縁部内外面赤彩
9	SK95	土師器	埦 (灯明皿)	(16.0)	－	〈1.65〉	密、白色粒	良好	7.5YR3/1 黒褐	ロクロ成形	口縁部内外面赤彩、口縁部外面に油煙付着
10	SK95	土師器	埦 (灯明皿)	－	(6.2)	〈2.05〉	密、石英・白色粒	良好	7.5YR6/3 にぶい褐	ロクロ成形、底部右回転糸切り	体部～底部外面に煤付着、体部～底部内面に煤・油煙付着
11	SK95	土師器	甕	－	－	〈4.75〉	密、石英・赤褐色粒・白色粒	良好	10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロ成形、胴部上半内外面カキメ、胴部下半外面タタキ・内面当て具痕	胴部内面に煤付着
12	SK95	鉄製品	不明	残長 〈8.3〉	残幅 3.6	残厚 0.35	逆U字状になる鉄製品で、断面は長方形(幅6.0～7.5㎜・厚さ2.5～3.5㎜)で中空となる。重さ30.24g。				
13	SK125 (K6区)	白磁	碗	(11.8)	(6.4)	〈6.40〉	精良	良好	7.5YR7/1 灰白	ロクロ成形	高台畳付は無釉、太宰府編年碗Ⅵ類 (11c後半～12c前半)
14	SD01	土師器	甕	－	－	〈3.10〉	密、石英・白色粒	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロ成形	
15	SD01	珠洲	甕	－	－	〈3.50〉	密、白色粒	良好	2.5Y5/1 黄灰	胴部外面タタキ、胴部内面ナデ	
16	SD01	珠洲	擂鉢	－	－	〈4.35〉	密、石英	良好	N4/0 灰	ロクロ成形	体部内面に自然釉
17	SD01	肥前	大皿または鉢	－	－	〈1.75〉	密	良好	7.5GY7/1 明緑灰		染付、透明釉（貫入入る）
18	SD01	土製品	塼か	残長 〈4.4〉	残幅 〈5.0〉	残厚 〈2.15〉	粒度普通、白色粒・小石	良好 還元炎	2.5Y7/2 灰黄	ナデ	
19	SD01	土製品	土錘	残長 〈4.2〉	残幅 〈3.6〉	残厚 〈1.50〉	密、石英・赤褐色粒	良好	7.5YR7/6 橙	ナデ、上端部に平坦面	重さ20.82g
20	SD09	珠洲	甕	－	－	〈2.45〉	密、白色粒	良好	5Y6/1 灰	胴部外面タタキ、胴部内面ナデ	
21	SD14	珠洲	甕	－	－	〈2.05〉	密、海綿骨針・白色粒	良好	10Y2/1 黒	口頸部外面ロクロナデ、口頸部内面タタキ	口頸部外面に自然釉
22	SD164	中世土師器	皿 (灯明皿)	(8.5)	－	〈1.65〉	密、赤褐色粒	良好	5YR7/6 橙	非ロクロ成形、内外面ヨコナデ、体部外面ユビオサエ	口縁部内外面に油煙付着
23	SD164	珠洲	擂鉢	(34.7)	－	〈5.50〉	密、海綿骨針・白色粒	普通	7.5YR5/1 褐灰	ロクロ成形	吉岡編年鉢b9類（Ⅳ1～Ⅳ2期か）
24	SD164	陶器	筒形碗か	(12.9)	－	〈2.15〉	密、石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	ロクロ成形	内外面に錆釉
25	確認面 (YA)	土師器	高坏	－	(13.0)	〈1.25〉	粒度普通、石英・角閃石・白色粒	良好	5YR7/6 橙	脚部ヨコナデ	脚部外面に沈線2条
26	残土 (YKS)	土師器	坏	－	(6.0)	〈1.15〉	密、石英・海綿骨針	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロ成形、底部回転糸切り	体部外面赤彩、内面黒色処理
27	SK163	土師器	埦	－	(5.6)	〈1.0〉	密、石英	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	体部外面ハケ	体部～底部内外面赤彩
28	SD30	土師器	甕	(20.3)	－	〈2.60〉	密、石英・白色粒	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロ成形	
29	SD118	土師器	甕	(12.8)	－	〈1.80〉	密、白色粒	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	ロクロ成形	口縁部内外面に煤付着
30	SD49	土師器	甕	－	(7.6)	〈1.60〉	密、石英・赤褐色粒・白色粒	良好	7.5YR2/1 黒	ロクロ成形、外面胴部～底部ケズリ、内面胴部～底部ロクロナデ	外面胴部～底部に煤付着

第２表　遺物観察表(2)

番号	出土遺構 層位	種別	器種等	法 量(cm) ()は推定値、〈〉は残存値 口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	胎 土	焼成	色調 (外面)	成・整形	文様ほか、備考
31	SD151	土師器	甕	－	－	〈7.05〉	密、石英・赤褐色粒・白色粒	良好	5YR7/6 橙	ロクロ成形	
32	残土 (YA)	須恵器	坏Ａ	－	(6.2)	〈1.75〉	密、白色粒	良好	2.5Y5/1 黄灰	ロクロ成形	
33	SD30	越中瀬戸	皿	(10.8)	(5.2)	〈2.10〉	密、石英	良好	7.5YR4/4 にぶい赤	ロクロ成形、体部外面ケズリ、削り出し高台	口縁部内外面に灰釉、見込みに重ね焼き痕
34	試掘埋土 (YKS)	越中瀬戸	皿	－	(4.3)	〈1.45〉	密、石英・白色粒	良好	10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロ成形、付高台	残存範囲は無釉
35	確認面 (YA)	肥前	中皿 (膾皿)	－	8.1	〈3.05〉	密	良好	10GY8/1 明緑灰	ロクロ成形、蛇ノ目凹形高台	内面菊花文（上絵剥落）
36	カクラン (YKS)	瀬戸美濃	碗	(6.2)	2.4	3.05	密	良好	5Y8/1 灰白	ロクロ成形、体部外面に弱い稜	染付(内面雷文･山水文?)、畳付は無釉
37	SD161	土製品	塼か	残長 〈3.5〉	残幅 〈3.8〉	残厚 〈2.80〉	粒度普通、石英	良好 酸化炎	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ	
38	SP144	石製品	線刻石	長さ 2.85	幅 2.55	厚 1.25	表面滑らかな小石の片面に線刻。重さ 11.57g。				
39	SK1001	弥生土器	甕	(18.4)	5.4	24.35	やや密、石英･白色粒	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	外面口縁部～胴部ハケ、内面頸部～胴部上半ハケ後ナデ・胴部下半ナデ	外面口縁端部にキザミ、口縁部内面羽状文、外面と胴部下半内面に煤付着
40	SK1001	弥生土器	甕	(21.8)	－	〈13.85〉	粒度普通、石英・海綿骨針	良好	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部内外面ヨコナデ、頸部～胴部外面ハケ、頸部～胴部内面ハケ、胴部中位内面ナデ	外面口縁端部にキザミ、外面に煤付着
41	SK1001 SD152	弥生土器	甕	－	5.8	〈8.35〉	密、石英・海綿骨針（多）	良好	7.5YR4/3 褐	外面胴部ハケ・下端強いナデ、内面胴部～底部ナデ	胴部外面に煤付着
42	SK1001 SD152	弥生土器	甕	－	4.6	〈7.55〉	密、石英・白色粒	良好	7.5YR5/3 にぶい褐	外面胴部ハケ・底部ナデ、内面胴部～底部ハケ後ナデ	内面胴部～底部に煤付着
43	SD155 SP156	弥生土器	甕	(16.0)	－	〈12.55〉	密、石英・チャート・赤褐色粒・白色粒	良好	7.5YR8/4 浅黄橙	内外面口縁部～胴部ハケ後に一部ナデ消し	外面口縁部と胴部下半に煤付着
44	SD170	弥生土器	甕	－	(5.6)	〈4.25〉	密、石英・白色粒	良好	7.5YR6/3 にぶい褐	胴部外面ハケ、底部外面ミガキ、胴部内面ナデ	胴部外面に煤付着、胴部内面に黒斑
45	Ⅳ層 (YKS)	弥生土器	壺	－	－	〈8.5〉	普通、石英・海綿骨針	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	胴部外面摩滅（ハケ?）、胴部内面ユビオサエ・ナデ	胴部最大径付近の突帯上にキザミ、上部は櫛描直線文と二枚貝の刺突（擬縄文）、東海系（貝田町式）
46	下層確認面 (YKS)	弥生土器	甕	－	－	〈1.20〉	密、石英・赤褐色粒	良好	7.5YR1.7/1 黒	口縁部外面ヨコナデ、口縁部内面ハケ	外面口縁端部にキザミ、外面に煤付着
47	下層確認面 (YKS)	弥生土器	甕	－	－	〈1.25〉	密、石英	良好	5YR4/3 にぶい赤褐	口縁部内外面ヨコナデ、口縁内面ハケ	外面口縁端部にキザミ、外面に煤付着
48	下層確認面 (YKS)	弥生土器	甕	－	－	〈1.15〉	密、石英・白色粒	良好	7.5YR5/3 にぶい褐	口縁部内外面ヨコナデ、口縁部外面ハケ	外面口縁端部にキザミ、外面に煤付着
49	SD01	弥生土器	甕	－	－	〈1.45〉	粒度普通、石英・白色粒	良好	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ	口縁部内面斜行短線文
50	SD150	弥生土器	甕	－	－	〈1.60〉	密、石英・チャート・褐色粒	良好	5YR7/6 橙	口縁部内外面ヨコナデ	口縁部内面羽状文
51	確認面 (YA)	弥生土器	甕	－	－	〈2.15〉	粒度普通、石英・白色粒	良好	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部ナデ	口縁部外面に沈線による直線文と連弧文
52	SD159	弥生土器	壺	－	－	〈3.20〉	密、石英・白色粒	良好	7.5YR7/6 橙	胴部内外面ナデ	胴部外面に沈線と円形刺突文
53	SD166	弥生土器	壺	－	－	〈3.55〉	粒度普通、石英・チャート・海綿骨針	普通	7.5YR5/8 明褐	胴部外面櫛描直線文・波状文、胴部内面ハケ	
54	残土 (YKS)	弥生土器	甕	－	－	〈1.80〉	密、石英・白色粒	良好	7.5YR5/4 にぶい褐		口縁端部内外面にキザミ、口縁部外面縄文と沈線１条、口縁部内面沈線２条
55	SD120・ 上層 確認面 (YA)	弥生土器	甕	－	－	〈4.35〉	粒度普通、石英・海綿骨針・白色粒	良好	7.5YR5/3 にぶい褐	口縁部内外面ナデ	口縁部外面に縄文、口縁端部内外面にキザミと沈線、口縁部外面日コゲ付着
56	残土 (YKS)	弥生土器	壺か	－	－	〈3.90〉	密、石英・白色粒	良好	10YR5/2 灰黄褐	胴部内外面ナデ	胴部外面に縄文と沈線
57	確認面 (YA)	弥生土器	甕	－	－	〈2.50〉	粒度普通、石英・海綿骨針・白色粒	良好	7.5YR4/3 褐	胴部内外面ナデ	外面に縄文

第３表　遺物観察表(3)

番号	出土遺構 層位	種別	器種等	法 量(cm) ()は推定値、〈〉は残存値 口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	胎 土	焼成	色調 (外面)	成・整形	文様ほか、備考
58	確認面 (YA)	弥生土器	壺	－	－	〈2.50〉	粒度普通、石英・白色粒	良好	10YR5/2 灰黄褐	胴部内外面ナデ	外面に縄文
59	確認面 (YKS)	弥生土器	甕	－	－	〈5.20〉	密、石英・白色粒	良好	10YR6/3 にぶい黄橙	胴部外面ナデ、胴部内面ケズリ	外面に縄文
60	SD115	弥生土器	壺	－	－	〈4.15〉	粒度普通、石英・白色粒	良好	10YR5/3 にぶい黄褐	胴部内外面ナデ	胴部外面に直線文と連弧文
61	確認面 (YA)	石器	石鏃	残長 〈2.90〉	幅 1.70	厚 0.6	平基有茎（茎部欠損）。重さ 1.60g。				
62	SD176	石器	敲石	長 9.90	幅 4.60	厚 1.85	偏平な円礫の表裏・側面に敲打痕。全体に摩滅。重さ 136.57g。				
63	SD174	石器	凹石	長 9.8	幅 8.7	厚 5.4	磨滅した円礫の表裏に凹み。重さ 537.45g。				
64	SX1132	石器	未成品 打製石斧か	長 14.9	幅 12.3	厚 5.3	円礫を打ち割り後に側面を敲打。打製石斧の未成品か。重さ 1157.68g。				
65	SX1132	石器	未成品 打製石斧か	長 13.0	幅 8.8	厚 2.9	円礫素材の上下・側面に敲打痕。自然面残る。打製石斧の未成品か。重さ 488.69g。				
66	試掘 (10T)	弥生土器	甕	(21.4)	－	〈21.60〉	密、石英・白色粒	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部内外面ヨコナデ、頸部～胴部外面ハケ、頸部～胴部内面ハケ後に胴部下半ナデ	口縁端部にキザミ、外面に煤・焦げ付着
67	試掘 (10T)	弥生土器	壺	－	－	〈15.35〉	密、石英・褐色粒・白色粒	良好	10YR7/4 にぶい黄橙	胴部外面ハケ、胴部内面ハケ（摩耗）	
68	試掘 (11T)	弥生土器	壺	－	－	〈3.10〉	粒度普通、石英・白色粒	良好	5YR6/6 橙	胴部内面ハケ	胴部外面櫛描直線文・波状文、胴部外面に煤付着
69	試掘 (5T)	土師器	甕	－	－	〈2.30〉	密、石英・白色粒	良好	5YR6/4 にぶい橙	ロクロ成形	
70	試掘 (3T)	中世土師器	皿	－	－	〈1.65〉	密、褐色粒	良好	5YR7/6 橙	非ロクロ成形、口縁部内外面ヨコナデ	
71	試掘 (11T SD)	珠洲	甕	(17.0)	－	〈3.55〉	密、白色粒	良好	2.5Y5/1 黄灰	ロクロ成形	口縁部内外面自然釉
72	試掘 (11T)	陶器 (瀬戸美濃系)	皿 (灯明皿)	(10.5)	－	〈2.90〉	密（7.5YR5/3 にぶい褐）	良好	7.5YR6/2 灰褐	ロクロ成形	内外面灰釉・口縁端部鉄釉、口縁部内面に煤付着
73	試掘 (9T)	陶器 (瀬戸美濃系)	土瓶か	－	(15.0)	〈1.75〉	密（2.5Y6/1 黄灰）	良好	5Y6/2 灰オリーブ	ロクロ成形、胴部外面ロクロケズリ、胴部内面ロクロナデ	胴部内面と下端除く外面に灰釉
74	試掘 (7T)	土製品	土錘	残長 〈5.9〉	残幅 〈3.5〉	－	密、石英	普通	10YR7/3 にぶい黄橙	ナデ	孔径 1.25 ㎝、重さ 22.73g

第４章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

１　はじめに

四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡は、富山県富山市四方荒屋地内に所在し、神通川下流左岸の平野部に隣接して立地する遺跡である。これまでの発掘調査で、四方背戸割遺跡からは弥生時代中期～後期の平地式建物、排水路、中世の掘立柱建物などが、四方荒屋遺跡からは区画溝に囲まれた鎌倉～室町時代の屋敷跡などの遺構が確認されている。

本報告では、四方荒屋遺跡および四方背戸割遺跡の土坑から出土した試料を対象に、遺構の年代観に関する情報を得るため、放射性炭素年代測定を実施する。

２　試料

試料は、四方荒屋遺跡の土坑 SK95 より採取された炭化材１点、および四方背戸割遺跡の土坑

SK1001 より採取された炭化材 1 点の、計 2 点である。なお、発掘調査の結果、四方荒屋遺跡 SK95 は平安時代、四方背戸割遺跡 SK1001 は弥生時代の土坑と推定されている。

３　分析方法

分析試料は AMS 法で実施する。試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理：AAA）。濃度は HCl、NaOH 共に最大 1mol/L である。一方、試料が脆弱で 1mol/L では試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の NaOH の状態で処理を終える。その場合は AaA と記す。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

δ ^{13}C は試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver and Polach,1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、OxCal4.4(Bronk,2009)、較正曲線は IntCal20(Reimer *et al.*,2020) である。

４　結果

結果を第 4 表、第 35 図に示す。試料の測定年代（補正年代）は、四方荒屋遺跡 SK95 出土炭化材が 1,250 ± 20yrBP、四方背戸割遺跡 SK1001 出土炭化材が 2,115 ± 20yrBP の値を示す。なお、検出された炭化材は破片であったため正確な同定ができなかったが、実体鏡等で試料を観察した結果、四方荒屋遺跡 SK95 はツツジ科、四方背戸割遺跡 SK1001 はハンノキ属の可能性が指摘された。

暦年較正は、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。暦年較正年代は、測定誤差を 2 σとして計算させた結果、四方荒屋遺跡 SK95 が 1,272 ～ 1,077 calBP、四方背戸割遺跡 SK1001 が 2,147 ～ 2,001 calBP である。

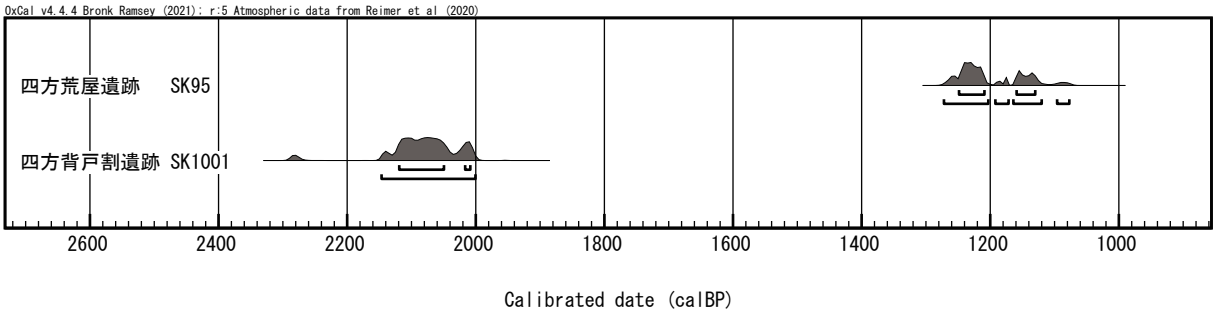
５　考察

四方荒屋遺跡の土坑 SK95 より採取された試料について放射性炭素年代測定を実施した結果、補正年代で 1,250 ± 20yrBP、暦年代で 1,272 ～ 1,077 calBP の値が得られた。本遺構は発掘調査結果から平安時代の可能性が指摘されており、暦年代を見ると 7 世紀後半～ 9 世紀後半の値が得られている。

第４表　放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	δ13C (‰)	暦年較正用	暦年較正年代 年代値							確率	Code No.	
四方荒屋遺跡 SK95	炭化材 ツツジ科?	AAA	1250±20	−26.02±0.14	1248±19	σ	cal AD	702 − cal AD	741	1249 −	1209	calBP	49.1	pal-14763	PLD-49896
							cal AD	791 − cal AD	820	1159 −	1130	calBP	19.1		
						2σ	cal AD	678 − cal AD	747	1272 −	1203	calBP	60.7		
							cal AD	758 − cal AD	779	1192 −	1172	calBP	5.1		
							cal AD	786 − cal AD	830	1164 −	1120	calBP	26.3		
							cal AD	854 − cal AD	873	1096 −	1077	calBP	3.4		
四方背戸割遺跡 SK1001	炭化材 ハンノキ属?	AAA	2115±20	−29.03±0.15	2117±22	σ	cal BC	170 − cal BC	101	2119 −	2050	calBP	62.2	pal-14764	PLD-49897
							cal BC	68 − cal BC	60	2017 −	2009	calBP	6.0		
						2σ	cal BC	198 − cal BC	52	2147 −	2001	calBP	95.4		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
4)AAAは酸ーアルカリー酸処理を示す。
5)暦年の計算には、Oxcal4.4を使用。
6)暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
7)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。



第 35 図　暦年較正結果

よって、調査所見と概ね一致する。

一方、四方背戸割遺跡の土坑 SK1001 より採取された試料の放射性炭素年代測定結果は、補正年代で 2,115 ± 20yrBP、暦年代で 2,147 ～ 2,001　calBP の値が得られた。本遺構は発掘調査結果から弥生時代の可能性が指摘されており、得られた年代値は弥生時代前期～中期頃に比定される。よって、本遺構の結果も調査所見と一致する。

なお、それぞれの炭化材はツツジ科、ハンノキ属の可能性が指摘された。これらの種類は、本地域の周辺に一般的であることから、周辺で採集可能な木材を利用した可能性がある。

（パリノ・サーヴェイ株式会社　斉藤崇人）

引用文献

Bronk, R. C.,2009,Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

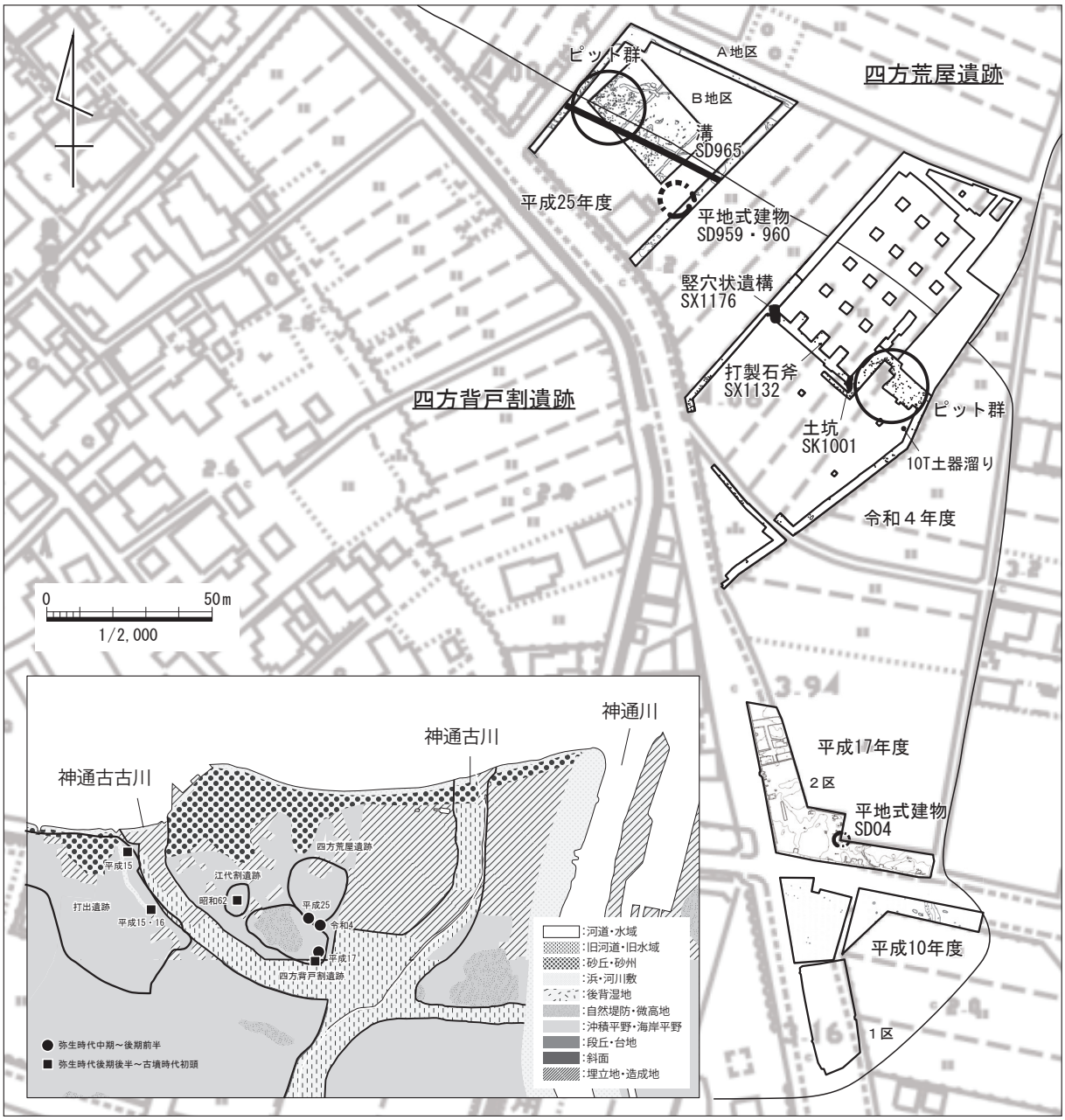
Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62,1-33..

Stuiver, M., and Polach, H. A.,1977,Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

第５章　総　括

第１節　弥生時代

四方背戸割遺跡の下層調査において、弥生時代中期の土坑 SK1001 を検出した。また上層遺構に混入した弥生時代中期の土器片も一定量あり、調査地区周辺に弥生時代中期の遺構が存在することが想定される（第 36 図）。調査区の北東部 L14 ～ 016 グリッド付近には、径 20m ほどの広がりをもつピット群が存在する。SK1001 はピット群の西端に位置する溝状の土坑で、またピット群の南端には同じく中期の弥生土器がまとまって出土した試掘トレンチ 10T がある。同じ径 20m 規模のピット群を囲むように土坑（溝状を含む）が存在する様子は、隣接する四方荒屋遺跡の平成 25 年度調査でも認められ（富山市教委 2014）、調査地周辺には弥生時代中期の複数のピット群が存在する可能性がある。



第 36 図　弥生時代中期の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡

遺物や炉跡が未検出であることから、ピット群を建物跡と判断するのは現状では難しく、平成 25 年度調査で平地式建物の周溝と想定された SD959・960 や平成 17 年度調査の四方背戸割遺跡の周溝状の溝 SD04（富山市教委 2006a）、今回の調査で検出した 6 本柱の竪穴状遺構 SX1176 などを念頭に、中期の建物跡が今後明らかにされることが期待される。遺跡内では打製石斧の製作も行われていたと考えられる（SX1132）。また平成 17 年度調査の栗林式土器、今回の調査で出土した貝田町式土器は、中期における他地域との交流を示す遺物である。

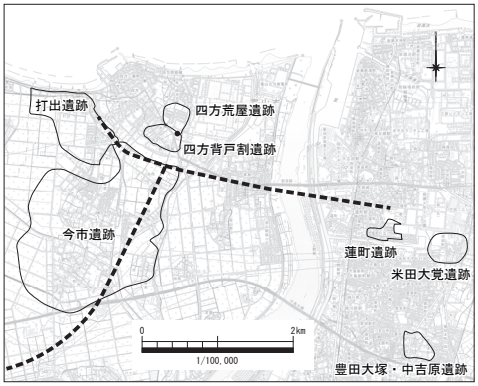
中期の遺構の上には基本層序Ⅳ層の堆積がある。Ⅳ層は神通古古川の氾濫に由来する堆積層と考えられ、今回の調査ではほとんど遺物を含んでいなかった。Ⅳ層中の唯一の遺物といえる壺（45）は著しく摩滅しており、氾濫に伴って混入した可能性が高い。平成 25 年度調査の四方荒屋遺跡 SD965 は弥生時代中期の直線的な溝であるが、有機物を含む黒色土がみられずにⅣ層に近い土で埋没しており、遺物には天王山式を含む後期前半の土器が少量含まれる。SD965 は後期前半に洪水で埋没したと判断される。周辺の江代割遺跡・打出遺跡においても後期前半の土器は散見されるが、いずれも包含層からの出土であり、明確な遺構は検出されていない。後期前半は洪水が繰り返される湿潤な環境へと変化したことが想定される（小黒 2015）。四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡は平成 17・25 年度調査と今回の調査で天王山式土器が出土し、後期前半の土器の大部分を占めている。その分布状況は中期の遺構分布と重なっており、中期の集落が後期前半まで継続したことを示している。

神通古古川沿岸の弥生時代において、本遺跡周辺にはいち早く集落が形成されたが、頻発する洪水が収束した後期後半には対岸の打出遺跡で本格的な集落形成が始まる。打出遺跡では後期後半～古墳時代前期までの多様な遺物が出土し、鉄器の保有状況などから神通川河口付近における交流拠点としての性格が指摘されている（富山市教委 2006b）。本遺跡周辺は、平成 17 年度調査の包含層から後期後半～古墳時代初頭の土器が大量に出土したものの、現状では建物跡の検出には至っていない。

第２節　平安時代

四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡においては、これまで古代の遺構・遺物がほとんど確認されていなかった。平成 8 年度の四方荒屋遺跡において、9 世紀代の土師器・須恵器が少量出土した程度であった（富山市教委 2000）。今回も広い調査面積に対して、須恵器の出土は数点に留まり、本遺跡における須恵器の少なさを踏襲する結果となった。土師器は調査区全体に埦ないし甕の細片が散在するが、SK94・95 では 9 世紀後半の埦がまとまって出土した。埦の多くは赤彩され、灯明皿として使用されている。遺物が出土しなかった SK96 も含め、2.5m ほどの範囲に土坑が存在することから、同時期の土坑と考えられる。

今回の調査地点は、神通古古川を挟んで今市遺跡で検出された古代道路状遺構の北側延長線上にあたるが、古代の道路跡や溝は検出されなかった。打出遺跡から南下する古代道路と交差して途切れるものと考えられる（第 37 図、富山市教委 2006b・2013b）。四方荒屋遺跡の平成 8 年度調査で古代の柱穴を 9 世紀代の畝状遺構が切っているように、本遺跡周辺は平安時代には畑地として利用され始めたと考えられる。SK94・95 は、生産域のなかにあって灯明皿を使用した何らかの行為が行われたことを窺わせる。



第 37 図　古代道路推定図

第３節　中　世

今回の調査で検出した中近世の畑跡は、南北畝（A 群）と東西畝（B 群）に分けられ、両者が交錯する状況であった。四方荒屋遺跡ではこれまでも畑跡の調査事例があり（平成 8・11・25 年度）、南北畝ないし東西畝が検出されている。断面観察によると東西畝が南北畝より古く、同様の新旧の切り合いは平成 8 年度第 2 地区でも確認されている（富山市教委 2000）。また平成 11 年度 F・G 地区では東西畝のみを検出したが、中世のある段階で掘立柱建物や井戸を伴う居住域へ変化している。さらに北に隣接する四方北窪遺跡で検出された畑跡は中世のものとされ、東西畝である（富山市教委 1999a）。このような状況から、東西畝は中世を主体とするものと判断される。

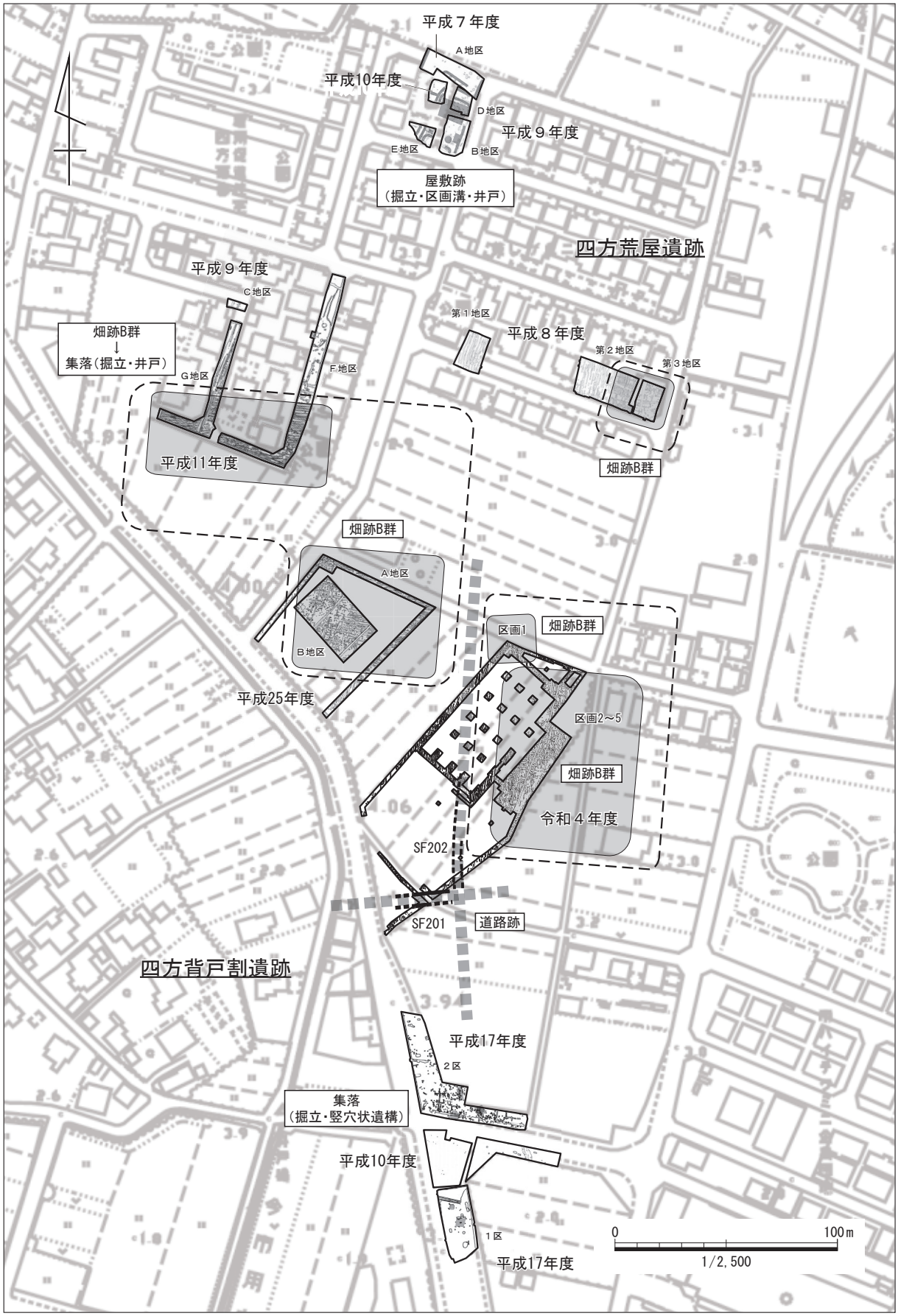
中世の道路跡 SF202 はやや東に向きを変えながら北へ延びているが、その先は大型建物と倉庫・井戸を伴う中世屋敷（富山市教委 1999a・2008a）へと至る可能性がある。南は中世の掘立柱建物群を検出した四方背戸割遺跡 1・2 区（富山市教委 2006a）の集落へ向かう（第 38 図）。SF202 は屋敷と集落を結ぶ道路跡と位置付けられ、その両側に東西畝の畑跡が展開する。屋敷の前面となる北側と東西の道路跡 SF201 より南側には東西畝の畑跡は検出されないことから、最大で 200m 四方（4 町歩）の畑跡が想定される。東西畝の畑跡は 14 世紀以降とされる屋敷と同時期と考えられるが、13 世紀代の珠洲も散見することから、時期が遡る可能性もある。平成 9 年度調査の四方荒屋遺跡では中世屋敷から 12 世紀後半～ 13 世紀前半の白磁碗が、今回の調査でも SK125 から白磁碗が出土しており、この時期に中世屋敷の前身集落が形成されていたことも想定される。

SF201 は SF202 と調査区外で直交する位置関係にあるが、SF202 より規模が大きく、少なくとも 2 回の掘り直しがある直線的な道路跡である。西側は四方荒屋の集落から旧神通川流路を越え、打出集落の南方に向かう方位である。同所は平成 15 年度調査の打出遺跡（富山市教委 2004）にほど近く、同調査では 13 ～ 14 世紀の掘立柱建物や井戸、15 世紀の道路跡が検出され、四方荒屋遺跡の屋敷と同時期に存在した集落である。SF201 は両者を結ぶ、より広域の道路跡と位置付けられる。また SF201 の北側溝 SD01 は水路としても利用されており、当地が排水性が極めて高い土地であること、畑跡の上手に位置することから灌漑用水路として機能したことも想定される。東西畝の区画 1 は他の区画と異なって方位が西に寄っており、その方位が SD01 と近いことから、東西畝のなかでも新しい時期のものと考えられる。16 世紀後半に発生した神通川の流路変更に伴う洪水により、中世屋敷や畑跡は廃絶したと考えられるが、SD01 ではわずかであるが肥前の出土があり、最終的な埋没は近世まで下る可能性もある。

中世の畑跡（東西畝）は畝溝の重複が少なく、畝溝覆土に含まれる地山塊が近世の畑跡（南北畝）に比べ大きいなど、近世の畑跡と比較したときに、耕作面積や期間がより限定的な利用であった可能性がある。

第４節　近　世

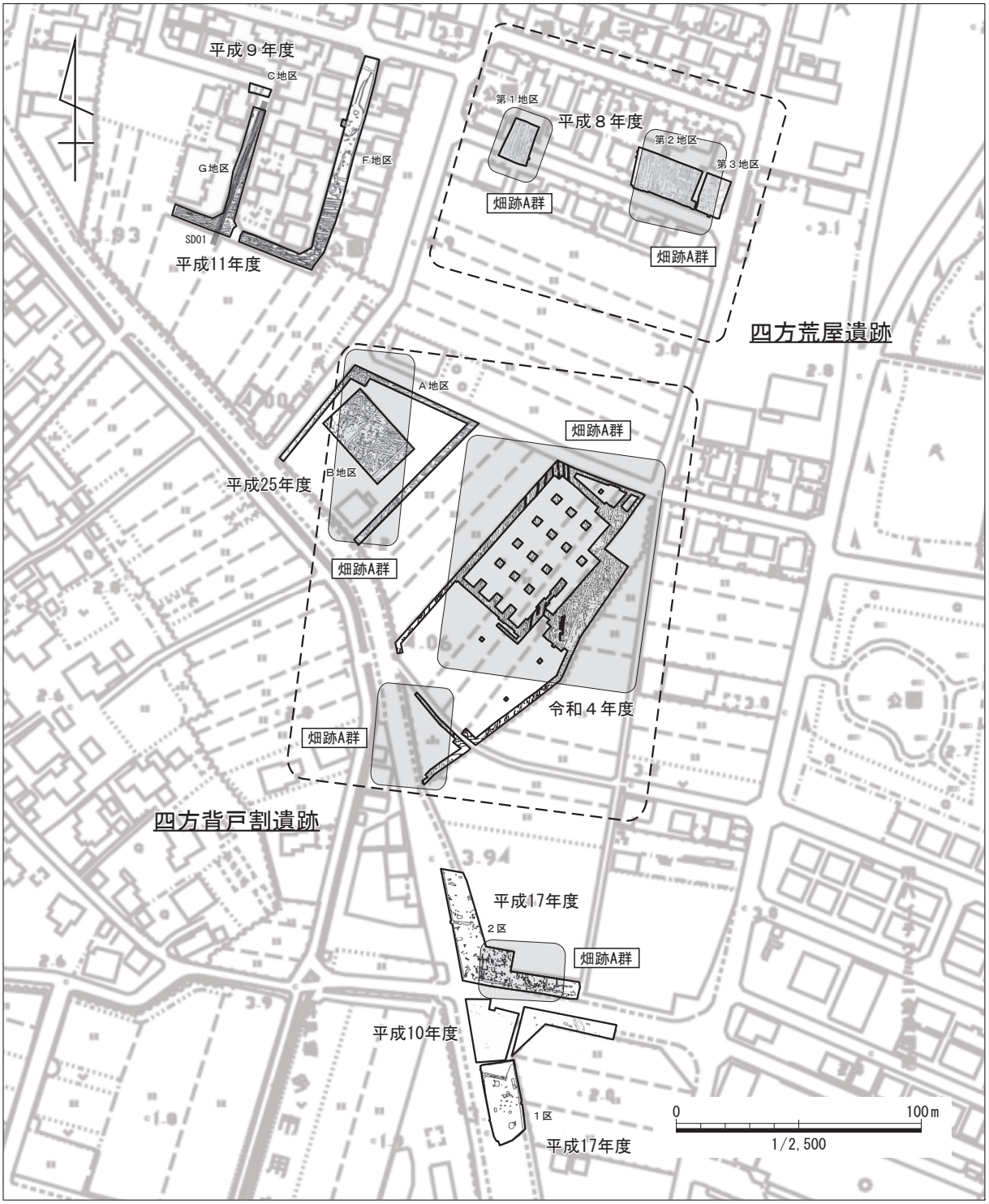
近世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡は南北畝の畑跡が広く展開すると考えられる（第 39 図）。ただし畑跡の畝溝から近世遺物が出土することは稀で、今回の調査でも上層遺構検出面や近代以降の溝から若干の近世陶磁器が出土したものの、畝溝からの出土はなかった。平成 8 年度調査の四方荒屋遺跡では、第 2 地区の畑跡から近世遺物が出土したとの記載がある（富山市教委 2000）。畑跡検出面上の包含層では、平成 7・9 年度調査の四方荒屋遺跡で 17 ～ 18 世紀を主体とする越中瀬戸、肥前、唐津が（富山市教委 2008a）、平成 25 年度調査の四方荒屋遺跡では、18 世紀後半から 19 世紀とされる越中瀬戸、肥前、泥面子（加工円盤含む）などが出土している（富山市教委 2014）。このような断片



第 38 図　中世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡

的な遺物の出土状況に加え、1858 年の飛越地震による灰褐色噴砂（富山市教委 1999a）との切り合いで、南北畝が噴砂より古いことが今回の調査で確認されたことから、南北畝が近世の畑跡である可能性がより高まったといえる。

南北畝は今回の調査と平成 25 年度四方荒屋遺跡の調査で一つのまとまりがある。そのなかには東西幅およそ 20m を基準とする南北に長い短冊形の区画が複数ある。一部には東西幅 40m ほどの大区画や、底面に工具痕が残るやや深い畝溝が集中する部分など、各区画は一様ではない。中世の東西畝



第 39 図　近世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡

に比べて畝溝の重複も多く、畝溝に含まれる地山塊の粒径も小さくなることから、畝立てを繰り返しながら、畑として長期間利用されたことが窺われる。また平成８年度調査の四方荒屋遺跡でも南北畝のまとまりがあり、あわせて一つの畑跡になる可能性がある。その場合は、少なくとも６町歩（南北300m、東西200m）ほどの耕作面積が想定される。また南側では平成17年度調査の四方背戸割遺跡２区の畝状遺構があり、埋没が進んだ神通古古川の沿岸近くまで耕地が広がる様子が窺われる。

中世の東西畝が近世になって南北畝に変わることは、中世後期に再び洪水が頻発し、河跡湖的な状況であった神通古古川が完全に埋没したことが影響したと考えられる（小黒2015）。周辺の用排水は、北流する神通古川に沿った方位に切り替えられた。平成９年度調査の四方荒屋遺跡Ｇ地区SD01は越中瀬戸が出土する幅2.4mの大溝であるが、畑跡と同じく南北に延びることから、近世の農地を支える基幹的な水路であったと考えられる。

本遺跡周辺は神通古川・神通古古川ともに近い位置にあり、両者の影響を強く受ける場所であったことは想像に難くない。各時代の遺構の消長は、この両者が引き起こす洪水など自然環境に大きく左右されたことであろう。洪水堆積物が形成した自然堤防上では、水はけの良い土地を生かして、各時代を通じて畑地としての利用が盛んであったことが分かる。（常深）

引用・参考文献

小黒智久2015「弥生時代後期～古墳時代前期の河川環境と遺跡動態　－富山市打出遺跡焼却建物跡SI01の発掘調査成果が示す諸問題」『富山市考古資料館紀要』第34号　富山市考古資料館
小葉田淳1986「冷泉為広卿の「越後下向日記」と越中の旅路」『富山史壇』第92号　越中史壇会
中世岩瀬湊調査研究グループ2004「「海中から中世岩瀬湊を探る」15年度海底探査報告」『富山市日本海文化研究所報』第33号　富山市日本海文化研究所
富山県富山農林振興センター・富山市教育委員会2012『富山市百塚住吉Ｄ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2014『小竹貝塚発掘調査報告』
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2015『打出遺跡発掘調査報告』
富山市教育委員会1974『富山市小竹貝塚範囲確認調査報告書』
富山市教育委員会1987『長岡杉林遺跡』
富山市教育委員会1996『富山市千原崎遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会1998『史跡北代遺跡発掘調査概要Ⅱ』
富山市教育委員会1999a『富山市四方背戸割遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会1999b『富山市千原崎遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会1999『富山市四方荒屋遺跡発掘調査概要』3/29
富山市教育委員会2000『富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会・環境事業団富山建設事務所2003『富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会2004『富山市打出遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会2006a『富山市四方背戸割遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会2006b『富山市打出遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会2008a『富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会2008b『富山市八町Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会2009『富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉Ｂ遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会2011『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ　－砂川カタダ遺跡・今市遺跡－』
富山市教育委員会2012『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会2013a『富山市四方背戸割遺跡発掘調査報告書』3/15
富山市教育委員会2013b『富山市今市遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会2014『富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会2015『富山市八ヶ山Ａ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会2020『富山市番神山古墳・番神山横穴墓群発掘調査報告書』
富山市教育委員会2022『富山市番神山横穴墓群・呉羽山古墳群発掘調査報告書』
西井龍儀・藤田富士夫1976「呉羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期の遺跡について」『大境』第６号　富山考古学会
根津明義2006「越中国射水郡における諸郷の所在について」『富山史壇』第149号　越中史壇会
古川知明2005「神通川底出土遺物のこと」『草島校下の歴史』第50号　草島校下郷土史会
古川知明・野垣好史・小林高太・蓮沼優介2010「富山藩主前田家墓所長岡御廟所基礎調査報告」『富山市考古資料館紀要』第29号　富山市考古資料館
堀沢祐一1996「北代加茂下Ⅲ遺跡の縄文時代の掘立柱建物について」『富山市考古資料館報』№.30　富山市考古資料館
堀沢祐一1997「縄文時代中期掘立柱建物の一考察　－北代加茂下Ⅲ遺跡掘立柱建物の検討－」『富山市考古資料館紀要』第16号　富山市考古資料館
山本信夫2000「4，陶磁器分類」『大宰府条坊跡XV』太宰府市教育員会
吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

調査地区全景（上層完掘、空撮、北から）

調査地区全景（四方荒屋遺跡上層完掘、空撮、北西から）

調査地区全景（四方背戸割遺跡上層完掘、空撮、北東から）

調査地区全景（四方背戸割遺跡下層完掘、空撮、南東から）

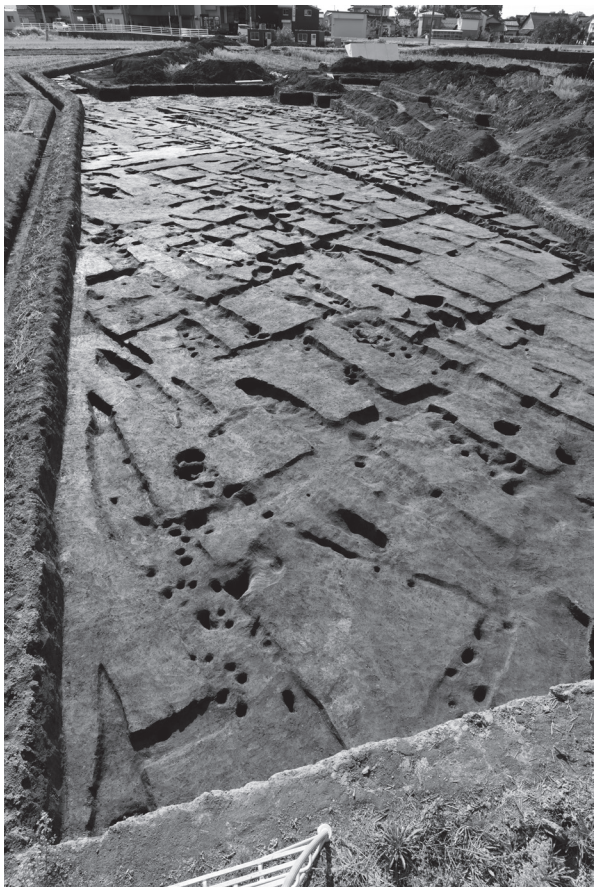
調査区南東部（北東から）

調査区南東部（南東から）

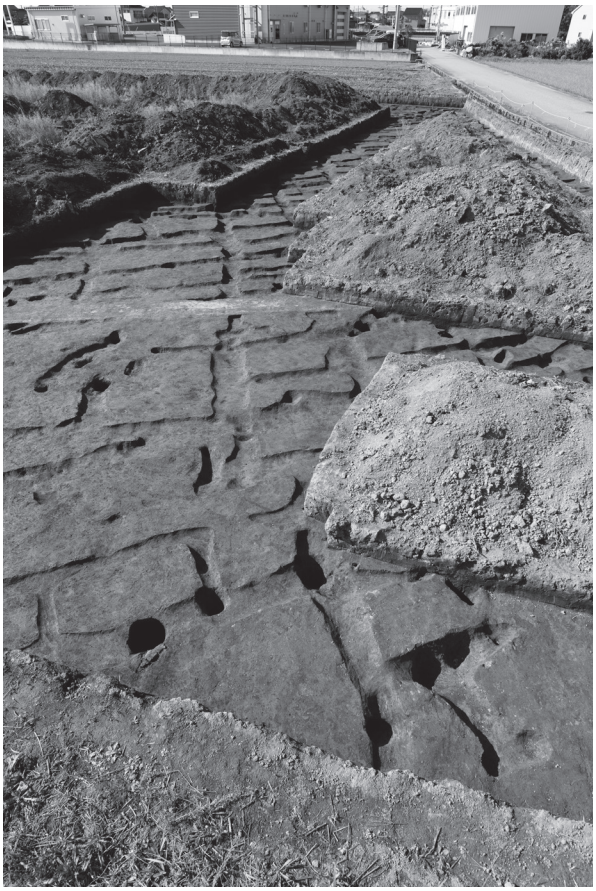
調査区北東部（北から）

調査区北東部（東から）

調査区北部（北から）



調査区南東部（北東から）



調査区北東部（東から）

調査区南東部（北から）

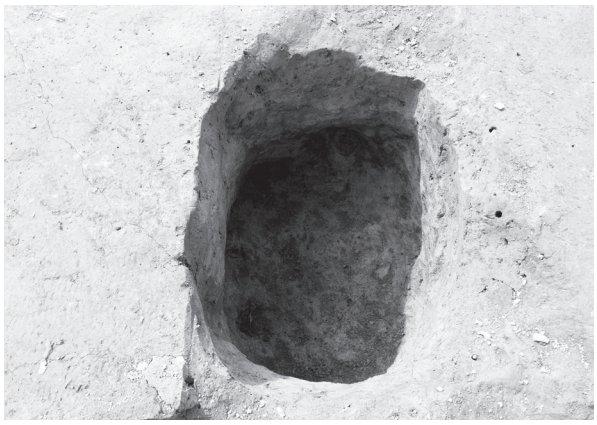
調査区北西部（北東から）

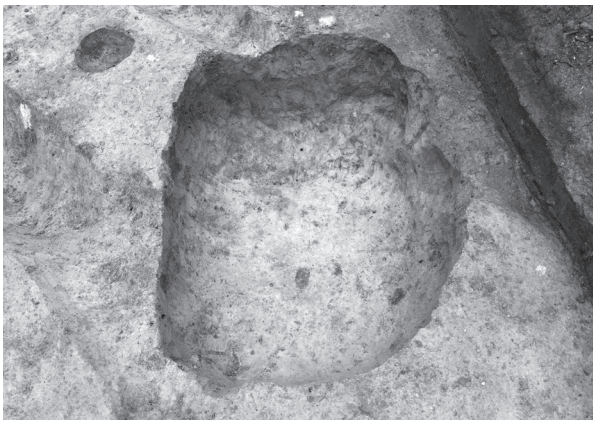
K6 区（北東から）

K9 区（南西から）

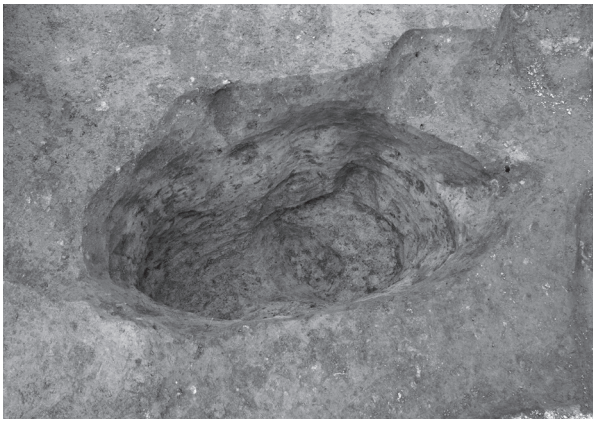
K13 区（南西から）

SK94 完掘（西から）


SK95 完掘（北から）


SK125 完掘（東から）

SK130 完掘（北西から）


SK131 完掘（南東から）

写真図版６　遺構(6)　四方背戸割遺跡上層

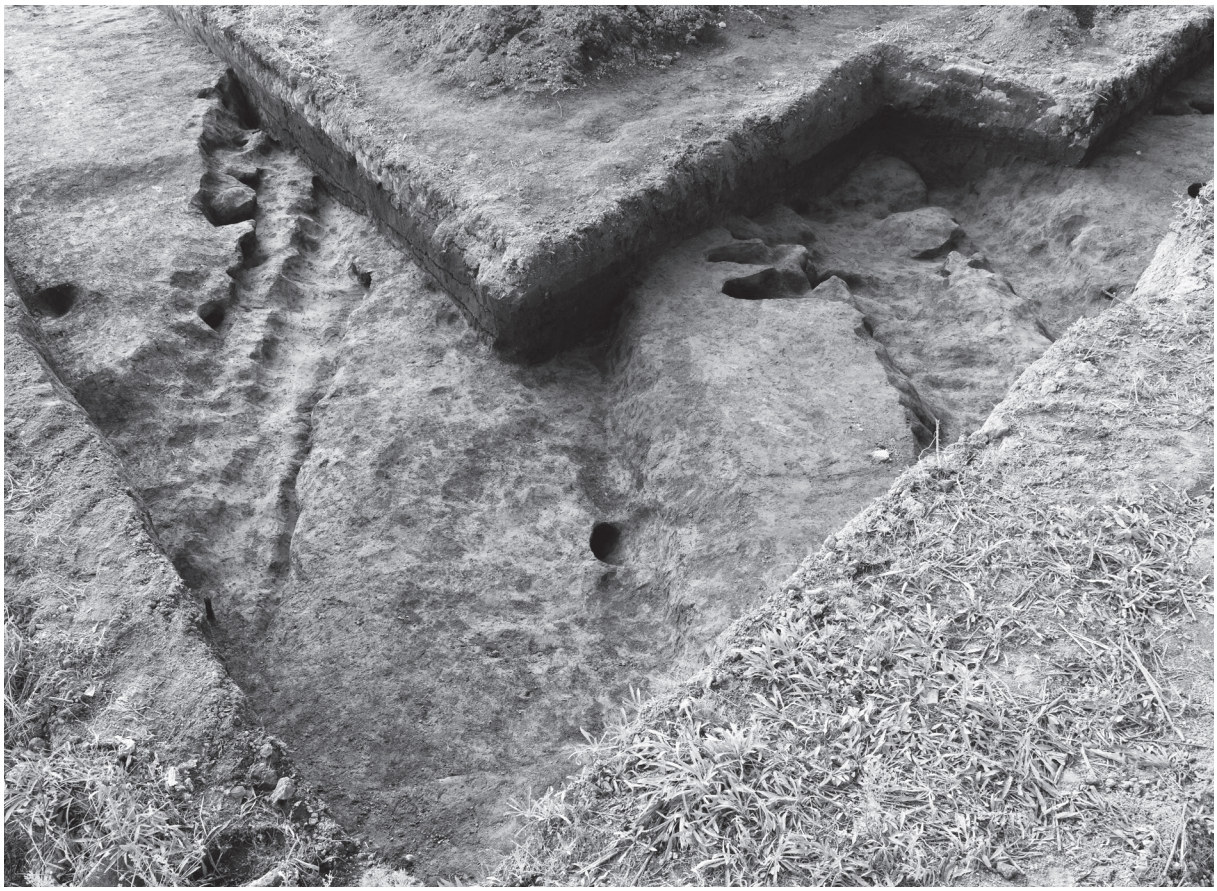
調査区北東部（北東から）

調査区北東部（北から）

調査区北東部（北東から）

調査区北東部（北から）

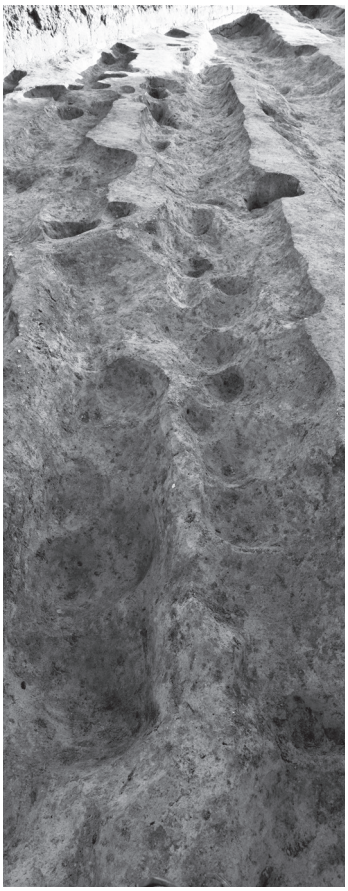
調査区北東部（南東から）



SD01・164 完掘（SF201、東から）

SD01 完掘（東から）

SD09・14 完掘（SF202、北から）



畝溝底面の凹凸（北から）

写真図版８　遺構(8)　四方背戸割遺跡下層

調査地区全景（北から）

調査区北東部（東から）

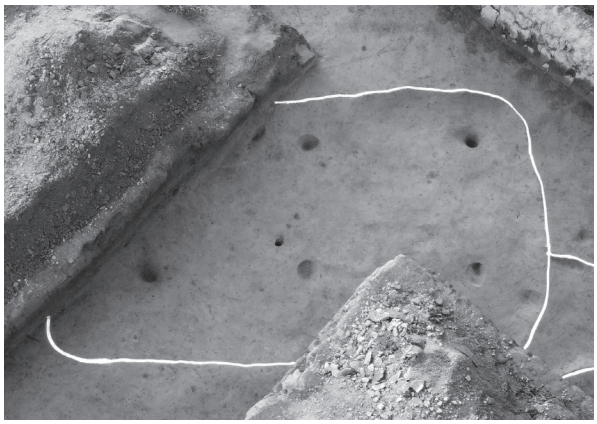
調査区北東部（北から）

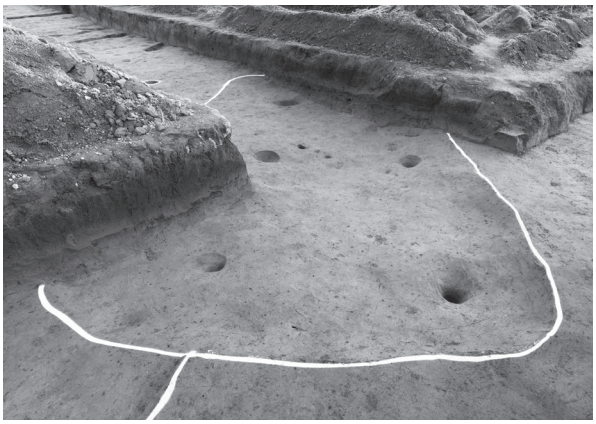
SK1001 完掘（北から）

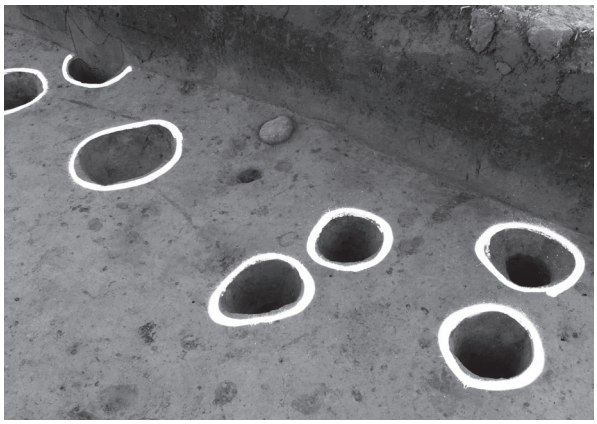
SK1001 遺物出土状況（東から）

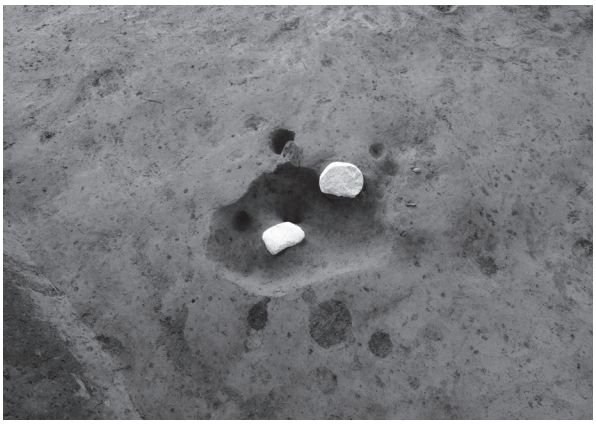
SK1001 内土坑完掘（北東から）

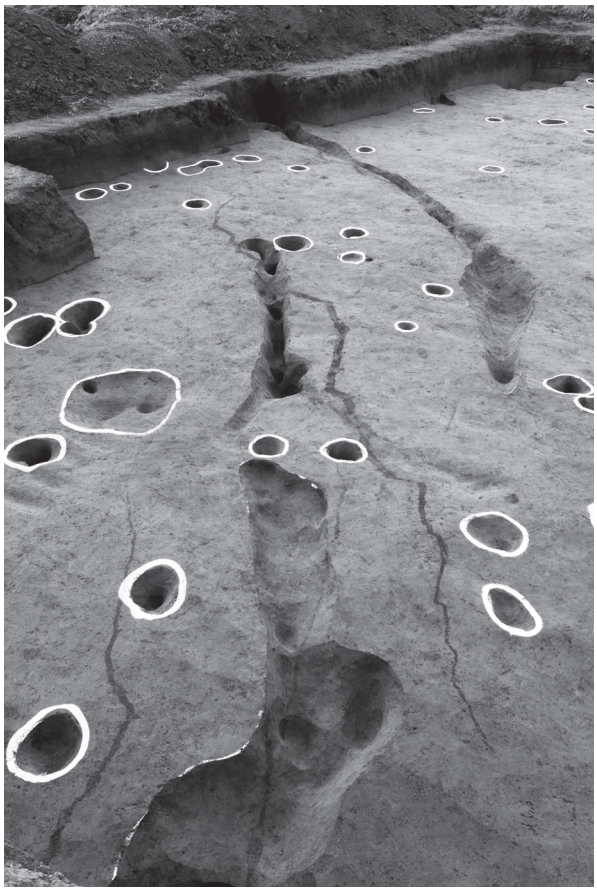
SD1169 完掘（南東から）


SX1176 完掘（東から）

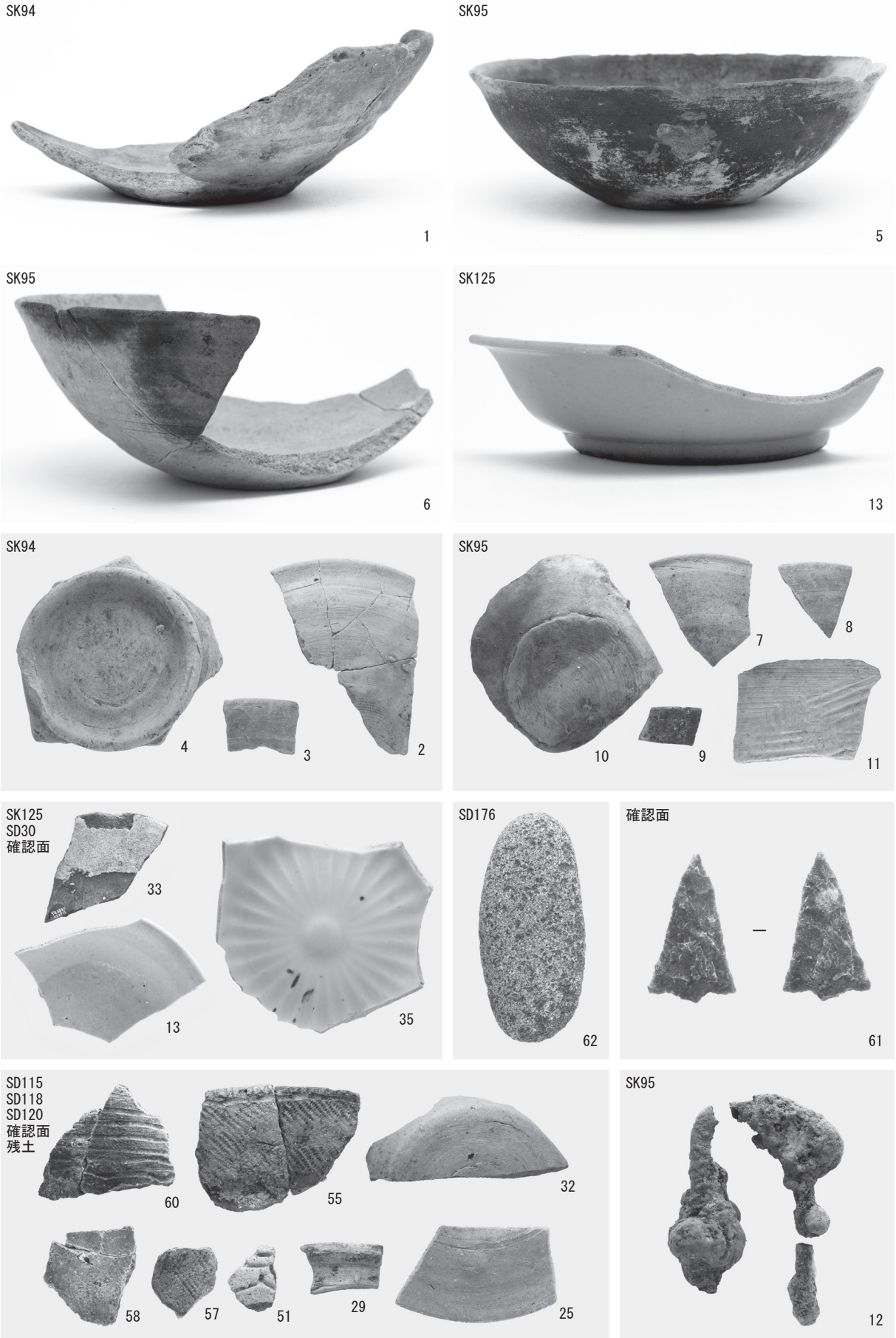

SX1176 完掘（北から）


SX1206 礫出土状況（北から）


SX1132 石器出土状況（東から）

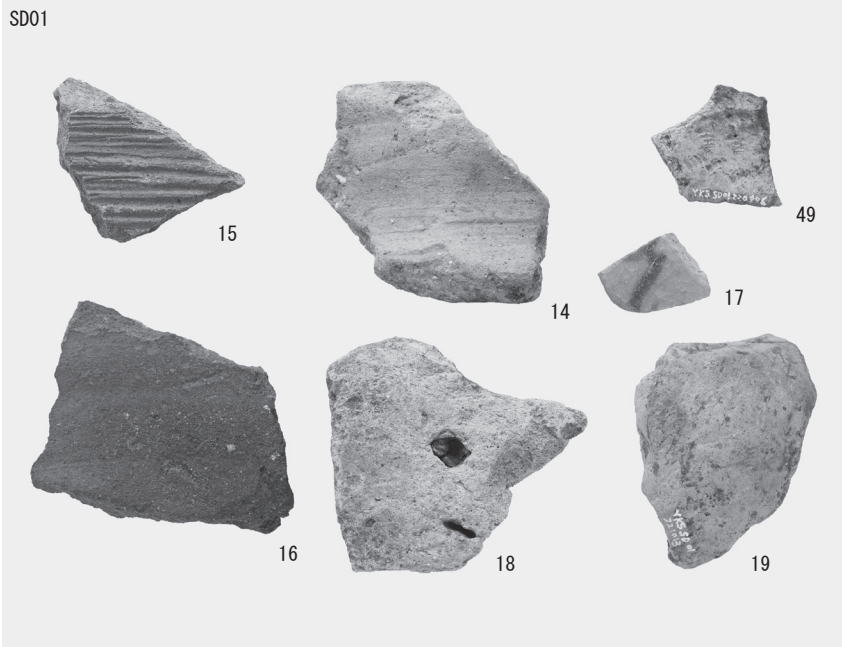

地割れ・噴砂検出状況（東から）

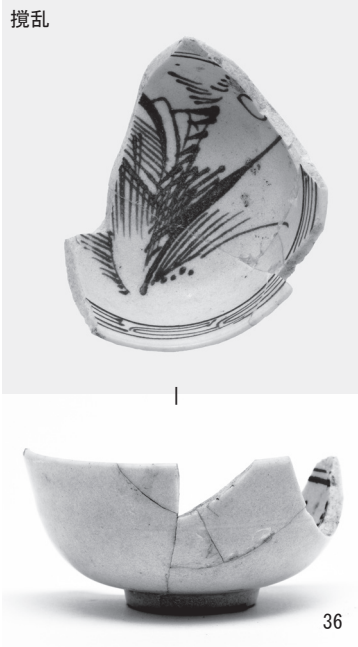
噴砂断割（北西から）

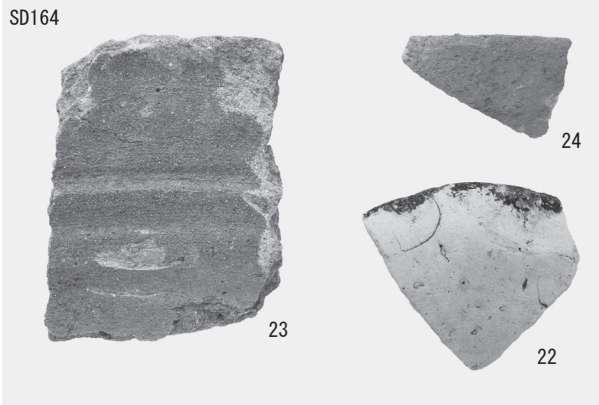


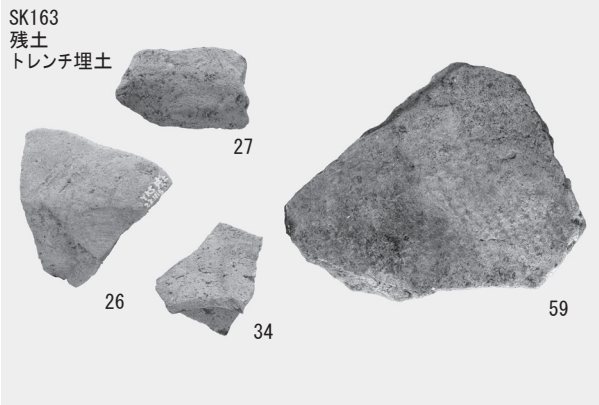
SK94・95・125、SD30・115・118・120・176、確認面、残土出土遺物

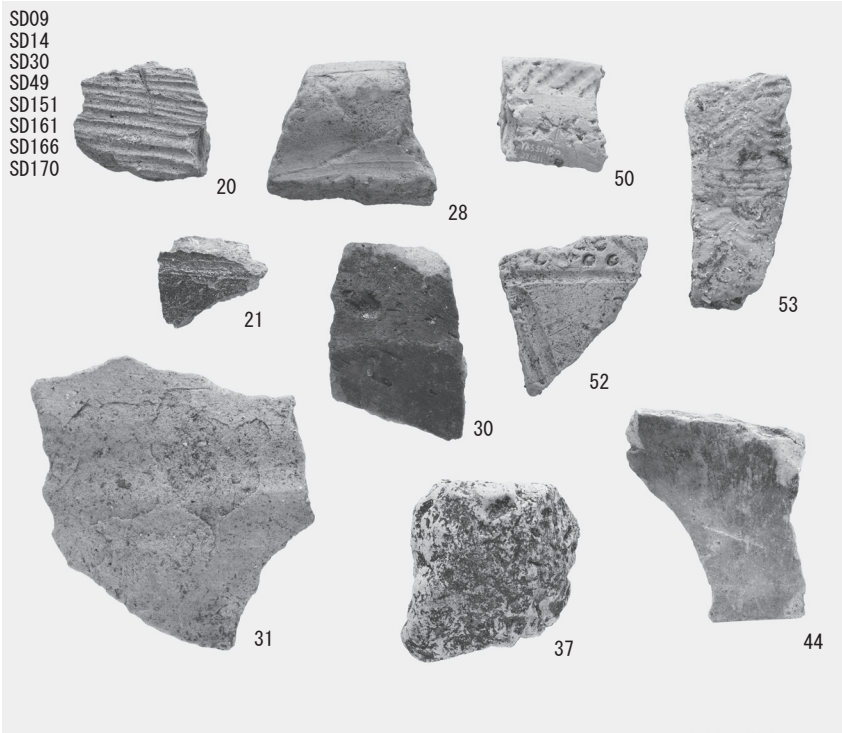
写真図版12　遺物(2)　四方背戸割遺跡

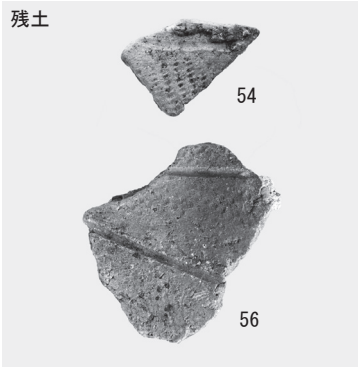




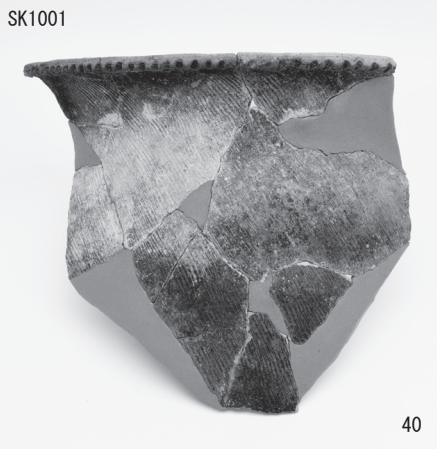


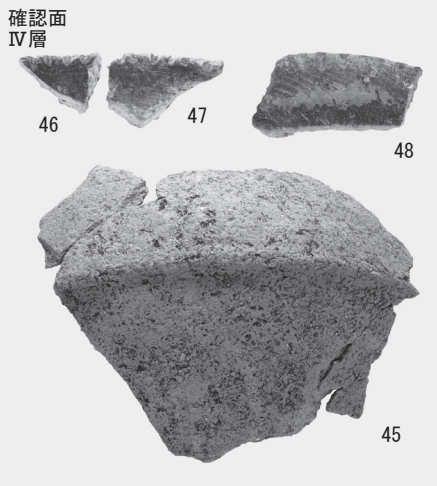




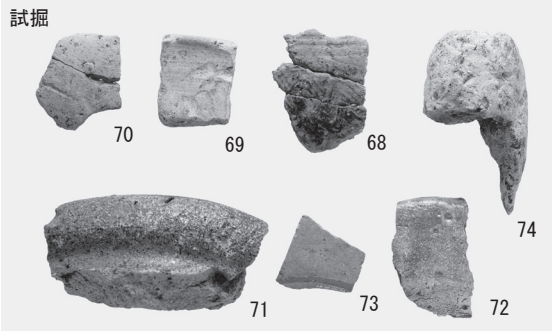


SK163、SD01・09・14・30・49・151・161・164・166・170、SP144、残土、撹乱、トレンチ埋土出土遺物





SK1001、SD155、SP156、確認面、Ⅳ層出土遺物



SD174、SX1132、試掘調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とやまし よかたせとわりいせき・よかたあらやいせき はっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山市　四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡　発掘調査報告書
副書名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	111
編著者名	堀内大介（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）、常深 尚（有限会社毛野考古学研究所富山支所）、 斉藤 崇人（パリノ・サーヴェイ株式会社）
編集機関	有限会社毛野考古学研究所 富山支所
所在地	〒933-0351　富山県射水市戸破1679－3－A
発行機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
所在地	〒939-2798　富山県富山市婦中町速星754　℡ 076-465-2146
発行年月日	西暦 2023年9月30日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よかたせとわりいせき 四方背戸割遺跡	とやまけんとやましし 富山県富山市 よかたあらや 四方荒屋	16201	2010027	36° 45′ 5″	137° 11′ 57″	20220829 ～ 20221121	660㎡ （上下層）	店舗 建設
よかたあらやいせき 四方荒屋遺跡			2010026	36° 45′ 14″	137° 12′ 4″		1,060㎡ （上層）	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
四方背戸割遺跡 四方荒屋遺跡	集落	弥生時代	土坑・溝・ピット	弥生土器・石鏃・打製石斧	弥生時代中期･後期前半（天王山式）の土器が出土した。 中世の道路跡と、中世～近世にかけての畑跡を検出した。
		平安時代	土坑・ピット	土師器・須恵器・白磁・鉄製品	
		中世	溝（道路跡）・畑跡	中世土師器・珠洲	
		近世	畑跡、地震痕	越中瀬戸・肥前・瀬戸美濃	

要約

四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡は旧神通川とその支流の分岐点近くに位置し、度重なる洪水により形成された自然堤防上に存在する。標高はおよそ 3.0m である。

上層遺構面では、平安時代以降の土坑・溝・ピット・畑跡・地震痕が確認された。

平安時代では、灯明皿として使用された土師器埦（9 世紀後半）を出土した土坑、白磁碗（11 世紀後半～12 世紀前半）を出土した土坑があるものの、遺物量は少なく、畑地としての利用が始まっていたと考えられる。

中世では東西方向の畝溝からなる畑跡が確認され、既往の調査とあわせ、畑地の広がりが把握できるようになった。畑地の南側には、数度の掘り直しのある側溝をもつ道路跡が東西に延びており、旧神通川の対岸に位置する打出遺跡との関連が窺われた。また畑地の中央を南北に延びる道路跡もあり、北側にある四方荒屋遺跡の中世屋敷へ向かうと考えられた。

近世には畝溝が南北方向に変化した畑跡が確認され、畑地の拡大と長期間の利用が推測された。また畑跡と切り合う噴砂が確認され、1858 年発生の飛越地震の痕跡と考えられた。

下層遺構面（四方背戸割遺跡）では、弥生時代中期の土坑、ピット群を確認した。遺構外出土の土器には、中期の貝田町式、後期前半の天王山式といった他地域の土器も含まれた。ピット群が建物の痕跡であるか確定できなかったが、周囲では打製石斧の製作が行われていた。

富山市埋蔵文化財調査報告 111

富山市
四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡
発掘調査報告書

－店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2023（令和 5）年 9 月30日発行

発　行　富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
〒 939-2798
富山県富山市婦中町速星 754 番地
（婦中行政サービスセンター本館 3 階）
TEL　076-465-2146
Fax 076-465-5032
E-mail：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

編　集　有限会社毛野考古学研究所 富山支所
〒939-0351
富山県射水市戸破1679-3-A
TEL　0766-57-1618

印　刷　株式会社中村